福岡市埋蔵文化財調査報告書　第153集

那　珂　遺　跡

―那珂遺跡群第８次調査の報告―

1987

福岡市教育委員会

Na ka site

那　珂　遺　跡

―那珂遺跡群第８次調査の報告―

遺跡調査番号　8609

遺跡略号　　NAK8

1987

福岡市教育委員会

上：青銅器鋳造関係遺物―中子・取瓶・鋳型参考品―　　下：SC 04住居址出土器一括

序　文

福岡市のほぼ中央部の南東から北西に伸びる広大な那珂台地には、先人達の残した文化遺産が数多く分布しています。交通の要衝をひかえるこの地域は、開発もまた活発に行なわれているところです。

福岡市では、開発によってやむなく消滅するこれら文化遺産について、記録保存に努めているところであります。

このたび、民間開発によって那珂台地に広がる那珂遺跡群の一角を発掘調査いたしました。

発掘調査の結果、後期旧石器時代の遺物や、弥生時代の青銅器鋳造に関する遺物、古墳時代初頭の山陰系土器、奈良時代の瓦など貴重な発見が相次ぎました。

本書は、これら発掘調査の成果を収録したものです。本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際し、東峰住宅産業株式会社小柳司郎氏、竹田和秀氏をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表する次第であります。

昭和62年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　佐藤　善郎

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が1986年４月21日から７月３日にかけて発掘調査を実施したマンション建設に伴う、那珂遺跡群の第８次緊急発掘調査の報告書である。

2．遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址→SC、掘立柱建物→SB、井戸址→SE、土壙→SK、溝→SD、ピット→SP とした。遺構番号は記号のあとに順番に続けた。なお、第１次調査から第８次調査までの遺構番号を整理しようと試みたが、時間的制約から今回はできなかった。

3．本書に掲載する遺構実測図は、力武が中心となって作成した。整図も力武が行なった。

4．遺物実測図は、下村のほか田中克子、池田祐司（九州大学）、荻村昇二・小川泰樹（明治大学）、永淵昭子が作成した。また、整図は田中克子が行なった。

5．本書に掲載する遺構写真は、力武が撮影し、白石公高氏が焼付を行なった。遺物写真も力武が撮影した。

6．本書で用いる遺構図の方位は磁北である。

7．那珂遺跡群第８次調査に係る遺物、記録類（図面、写真、スライドなど）は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理されるので活用されたい。

8．本書の執筆・編集は力武と協議のもとに下村が行なった。

本 文 目 次

序
Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の組織 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地とこれまでの調査 …… 3
Ⅲ　調査の記録 …… 7
　検出遺構の概要 …… 7
　1　竪穴住居址 …… 7
　2　掘立柱建物 …… 37
　3　井戸址 …… 42
　4　土　壙 …… 47
　5　溝 …… 51
　6　その他の重要遺物 …… 56
Ⅳ　まとめ …… 57

図 版 目 次

巻頭図版　上：青銅器鋳造関係遺物　―中子・取瓶・鋳型参考品―
　　下：SC04住居址出土土器一括

PL. 1　調査区南半部全景
PL. 2　(1)　SC01住居址出土状況(西から)　(2)　SC02・03住居址出土状況(南から)
　(3)　SC04住居址出土状況(南から)　(4)　SC04住居址遺物出土状況(東から)
　(5)　SC05・09住居址出土状況(北から)　(6)　SC06住居址出土状況(南から)
PL. 3　(1)　SC07住居址出土状況(西から)　(2)　SC08・12住居址出土状況(南から)
　(3)　調査区北半部全景(北から)　(4)　SC13・14住居址出土状況(南から)
　(5)　SC15住居址・SE03井戸址出土状況(西から)
　(6)　SC16住居址出土状況(西から)
PL. 4　(1)　SC18住居址・SB04掘立柱建物出土状況(東から)
　(2)　SC19住居址出土状況(南から)
　(3)　SE01井戸址出土状況(東から)　(4)　SB01掘立柱建物出土状況(北から)
　(5)　SB05掘立柱建物出土状況(南から)　(6)　SD01溝出土状況(西から)

挿図目次

Fig. 1　那珂遺跡群位置図及び周辺遺跡分布状況(1/5万)…2
Fig. 2　那珂遺跡群発掘調査区位置図(1/6000)…… 6
Fig. 3　那珂遺跡群第8次調査区遺構全体図(1/200)折込
Fig. 4　SC01住居址出土遺物実測図(1/3)…… 8
Fig. 5　SC01住居址実測図(1/60)…… 9
Fig. 6　SC02住居址実測図(1/60)…… 10
Fig. 7　SC02・03住居址出土遺物実測図(1/3)…… 10
Fig. 8　SC03住居址実測図(1/60)…… 11
Fig. 9　SC04住居址実測図(1/60)…… 12
Fig 10　SC04住居址出土遺物実測図(1)　(1/3)…… 12
Fig. 11　SC04住居址出土遺物実測図(2)　(1/3)…… 13
Fig. 12　SC04住居址出土遺物実測図(3)　(1/3)…… 14
Fig. 13　SC05住居址実測図(1/60)…… 15
Fig. 14　SC05住居址出土遺物実測図(1/1・1/2・1/3・1/6)… 16
Fig. 15　SC06住居址出土遺物実測図(1/3)…… 17
Fig. 16　SC06住居址実測図(1/60)…… 17
Fig. 17　SC07・11住居址実測図(1/60)…… 18
Fig. 18　SC07住居址出土遺物実測図(1/3)…… 19
Fig. 19　SC08住居址実測図(1/60)…… 20
Fig. 20　SC08住居址出土遺物実測図(1/3)…… 21
Fig. 21　SC09住居址実測図(1/60)…… 22
Fig. 22　SC09住居址出土遺物実測図(1/3)……22
Fig. 23　SC10・11住居址出土遺物実測図(1/2・1/3)… 23
Fig. 24　SC12住居址実測図(1/60)…… 24
Fig. 25　SC13住居址実測図(1/60)…… 25
Fig. 26　SC13住居址出土遺物実測図(1/3)…… 26
Fig. 27　SC14住居址実測図(1/60)…… 27
Fig. 28　SC14住居址出土遺物実測図(1/3・1/6)…… 28
Fig. 29　SC15住居址実測図(1/60)…… 29
Fig. 30　SC15住居址出土遺物実測図(1/3)…… 30
Fig. 31　SC16住居址実測図(1/60)…… 31
Fig. 32　SC16住居址出土遺物実測図(1/2・1/3・1/6)‥ 31
Fig. 33　SC17住居址実測図(1/60)…… 32
Fig. 34　SC17住居址出土遺物実測図(1/3)…… 32
Fig. 35　SC18住居址実測図(1/60)…… 33
Fig. 36　SC18住居址出土遺物実測図(1/3)…… 33
Fig. 37　SC19住居址実測図(1/60)…… 34
Fig. 38　SC19住居址出土遺物実測図(1/3)…… 35
Fig. 39　SC20住居址実測図(1/60)…… 35
Fig. 40　SC20住居址出土遺物実測図(1/3)…… 35
Fig. 41　SC21住居址実測図(1/60)…… 36
Fig. 42　SC20・21住居址出土遺物実測図(1/3)…… 36
Fig. 43　SB01掘立柱建物実測図(1/60)…… 37
Fig. 44　SB02掘立柱建物実測図(1/60)…… 38
Fig. 45　SB03掘立柱建物実測図(1/60)…… 38
Fig. 46　SB04掘立柱建物実測図(1/60)…… 39
Fig. 47　SB05掘立柱建物実測図(1/60)…… 40
Fig. 48　SB06掘立柱建物実測図(1/60)…… 41
Fig. 49　SE01井戸址実測図(1/60)…… 42
Fig. 50　SE02・03・04井戸址実測図(1/60)…… 43
Fig. 51　SE01井戸址出土遺物実測図(1)　(1/3)…… 44
Fig. 52　SE01井戸址出土遺物実測図(2)　(1/4・1/6)…45
Fig. 53　SE02・03井戸址出土遺物実測図(1/2・1/3)… 46
Fig. 54　SK02・04・07・08土壙実測図(1/60)…… 47
Fig. 55　SK10・12土壙実測図(1/60)…… 48
Fig. 56　SK05・06・07・08土壙出土遺物実測図(1/3・1/6)‥49
Fig. 57　SK10・11・12・13土壙、SP532ピット出土遺物実測図(1/3)…… 50
Fig. 58　SD01溝出土遺物実測図(1)　(1/3・1/6)…… 51
Fig. 59　SD01溝出土遺物実測図(2)　(1/6)…… 52
Fig. 60　SD01溝出土遺物実測図(3)　(1/3)…… 53
Fig. 61　SD02・03・10溝出土遺物実測図(1/3)…… 54
Fig. 62　SD01溝出土瓦実測図(1/6)…… 55
Fig. 63　その他の重要遺物実測図(1/2)…… 56

表目次

Tab. 1　那珂遺跡群発掘調査一覧…… 5

付図目次

付図1　那珂遺跡群第8次調査区遺構全体図(1/100)

Ⅰ　は　じ　め　に

1　調査に至る経過

1985年10月22日付で、東峰住宅産業株式会社から、博多区那珂一丁目601、606、607番地内における宅地開発に伴う埋蔵文化財の事前調査願が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、那珂遺跡群の範囲内にあり、かつ前方後円墳が２基存在する台地上にあることなどから、事前に遺構の有無確認が必要と判断された。そこで、施主と協議の上、旧建物が解体された11月12日に試掘調査を実施することにした。試掘の結果、径15～20cm程のピットが調査区全域に広がり、土壙が西半部で、溝が中央部で検出された。覆土が黒褐色土のものと暗褐色土のものとがあり、弥生時代、あるいは古墳時代から、中世の時期まで想定された。検出遺構から推定すると各時期の集落址が重複密集して存在するものと考えられた。埋蔵文化財課では、試掘成果をもとに、施主と遺跡の取り扱いについて協議をかさね、住宅建設によって失なわれる遺構について、記録保存のための本調査を実施することになった。本調査は、1986年４月21日から開始した。

遺跡調査番号	８６０９		遺跡略号	ＮＡＫ	
調査地地籍	博多区那珂一丁目601、606、607番		分布地図番号	037－Ａ－３	
開発面積	1,763m²	調査対象面積	1,763m²	調査実施面積	1,350m²
調査期間	1986年４月21日～1986年７月３日		事前審査番号	60－２－182	

2　調査の組織

調査委託：東峰住宅産業株式会社（博多区住吉５丁目５番５号）

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：埋蔵文化財課長　柳田純孝　　埋蔵文化財第２係長　飛高憲雄

調査庶務：埋蔵文化財第１係　松延好文

調査担当：杉山富雄、池崎譲二（試掘調査）　　埋蔵文化財第２係　力武卓治、下村　智

調査作業・整理作業：池田祐司、吉上久次、高田　茂、濱根　定、村上新制、笠　晃、山口光生、梶原三治、岸原藤雄、中垣　親、林田　弘、箱田かよ子、西山秀子、広田政子、穴井輝子、石本みすえ、小谷保子、永利咲江、池田由美、瀧　良子、柳井順子、加藤泰子、川崎セツ子、西本スミ、舎川キチエ、久保山二三子、荒木君子、徳永ノブ子、森山キヨ子、山崎三枝子、山口慶子、高野皓代、船越エミ子、鹿児島トシ子、播磨博子、緒方敬子、北原人美、西依由起子、中村多佳子、田中克子、溝口博子、塩手鶴子

Ⅰ　はじめに

Fig. 1　　那珂遺跡群位置図及び周辺遺跡分布状況（1/5万）

1．比恵遺跡群
2．剣塚古墳
3．**那珂遺跡第8次調査地点**
4．那珂八幡古墳（中広銅戈）
5．那珂君休〔久平〕遺跡
6．那珂深ヲサ遺跡
7．板付遺跡
8．高畑廃寺
9．諸岡遺跡
10．三筑遺跡
11．三宅廃寺
12．板付G26トレンチ（広形銅矛）
13．板付G7a区（中広銅戈）
14．妙楽寺（広形銅矛）
15．高宮八幡宮（広形銅戈、広形銅矛4）
16．井尻熊野神社（広形銅矛2）
17．須玖唐梨遺跡（鋳型片、銅矛中子）
18．須玖永田遺跡（小型仿製鏡・銅矛中子、取瓶など）
19．須玖岡本遺跡（広形・中広銅矛、細形Ⅰ・中細・銅戈、銅剣、小銅鐸）
20．赤井手遺跡（中細or中広銅矛、広形銅矛 or 戈、中細ｂ orｃ 銅戈）
21．大南遺跡（中広、広形銅戈）
22．大谷遺跡（細形Ⅰｂ式銅剣、中細a・中広銅矛、中広銅戈、小銅鐸）
23．九大筑紫地区キャンパス内遺跡（中細銅戈）
24．赤穂ノ浦遺跡（銅鐸）
月隈（銅矛）、小倉（銅矛）
（　　）内は鋳型及び青銅器生産関係遺物

Ⅱ　遺跡の立地とこれまでの調査

1　遺跡の立地（Fig.1）

那珂遺跡群第８次調査地点は、福岡平野のほぼ中央部、那珂川と御笠川にはさまれた中位段丘上に位置する。標高は10ｍ前後を測り、南側150ｍ地点には昭和60年度の調査で三角縁神獣鏡を出土した那珂八幡古墳がある。西側及び北側は同レベルの台地が続き、北150ｍ地点には６世紀後半の横穴式石室を持つ剣塚古墳が所在する。東側は１ｍ程レベルを減じて東光寺の台地部へと続く。

遺跡の位置する那珂台地は、南が春日丘陵に連なり、北方は標高５～６ｍの比恵の台地部へと続く。この台地上には、後期旧石器時代から中世までの遺跡が連綿とみられ、とりわけ弥生時代から古代にかけての遺跡密度は非常に高い。

北方の比恵遺跡では、昭和13年の環濠集落の調査以来これまで16次の調査を重ね、細形銅剣を副葬した甕棺墓地群（第６次）、古墳時代後期の大倉庫群（第８次）、南面する大形掘立柱建物（第13次）など重要な遺構・遺物が発見されている。東方には、初期水田農耕が明らかになった板付遺跡、奈良時代の郡寺の可能性を秘める高畑廃寺が存在する。南部は五十川や井尻の遺跡群、朝鮮系無文土器やゴホウラ製貝輪を副葬した甕棺墓の出土で知られる諸岡遺跡、生産遺跡としての三筑遺跡などが広がる。さらに井尻から春日丘陵にかけては近年、仿製鏡や銅矛の鋳造を行なったと考えられる須玖永田遺跡や須玖唐梨遺跡が調査され、須玖岡本、赤井手、大南、大谷など、青銅器の出土や青銅器鋳造に関する遺物が出土し、主要な弥生時代の遺跡群を形成している。那珂川西方の丘陵部には、銅戈・銅矛の鋳造を示す鋳型が高宮八幡宮に所蔵され、７世紀末から８世紀にかけて三宅廃寺が造営されている。那珂遺跡群の週辺には重要な遺跡が数多く分布している。

2　これまでの調査（Fig.2）

那珂遺跡群では、これまで８次に亘る発掘調査が行なわれている。しかし、生活遺構を中心とする遺跡の内容は明確でなかった。第７次調査では、古墳時代後期の集落址の一部が初めて明らかになり、第８次調査では弥生時代を中心とする集落址の一端を窺うことができた。以下各次の調査概要について略述したい。

第１次調査（1970～71年度、那珂八幡古墳調査団　森　貞次郎）

那珂八幡古墳墳丘裾から1948年に銅戈の鋳型が発見され、付近に弥生後期の土器片が散布していたことから、鋳型を含む土器包含層の調査を目的に、1971年３月から４月にかけて発掘調

査が行なわれた。那珂遺跡群で考古学的に学術的なメスが入れられたのはこれが最初であり、この発掘を那珂遺跡群の第１次調査とする。発掘調査の結果、包含層は確認できなかったが、周溝底から古墳時代初頭の井戸址１基が確認され、また、那珂八幡古墳自体もそれまで径40ｍの円墳と考えられていたものが、帆立貝式の前方後円墳ではないかという可能性が指摘された。幅12ｍの周溝を持ち、周堤幅６ｍ前後を有する古墳となり、周堤まで含めた古墳の南北長は約85ｍになると推察された。第１次調査では、銅戈鋳型の問題、古墳の墳丘の問題がクローズアップされたが、この問題は、そのごの那珂遺跡群の調査で常に意識されることになった。

第２次調査（1974年度、別府大学考古学研究室　賀川光夫）

1974年10月に発掘調査が行なわれた。調査地点は那珂遺跡群東縁の谷部に位置する。検出遺構は、調査区中央部で全長7.5ｍ、幅2.7ｍ、人頭大・拳大の円礫・角礫を使用した不整長楕円形の集石と、南側で直径67cm、深さ55cmの小竪穴１個がある。出土遺物は、集石遺構から須恵器、土師器（土師質土器）、土鍋、甑、陶器、磁器、平瓦などが少量出土し、他の地点から弥生土器（中期後半～後期初頭）と若干の石器が出土しているのみで、全体的に遺物は少なく断片的である。また、出土遺物の大半は小破片で、磨滅を受けており、二次堆積と考えられる。

第３次調査（1977年度、福岡市教育委員会）

第８次調査区の西方100ｍの地点に位置し、地形的には那珂台地のほぼ中央部にあたる。専用住宅建設に伴なって、弥生中期の甕棺墓が１基調査されている。

第４次調査（1980年度、福岡市教育委員会）

那珂八幡古墳の東方200ｍの地点に位置し、那珂遺跡群の東縁部にあたる。発掘調査は、都市計画道路竹下駅前線の拡幅工事に伴なって行なわれた。発掘調査の結果、弥生時代前期後半の伯玄タイプの甕棺墓２基、古墳時代のピット群、崖面に住居址ではないかと推察される茶褐色土の落ち込み２箇所が検出された。那珂台地で弥生前期の甕棺墓が検出されたことは注目に値し、他にも弥生前期末の甕棺口縁部破片が出土していることから、数基の甕棺墓が存在した可能性がある。第４次調査区の南方80ｍの地点では、戦前農家建築の際、甕棺墓が数十基出土し、忌み嫌って叩き壊し一箇所に埋めたという。地元の中原志外顕氏からご教示を受けた。一帯には弥生前期から中期にかけての甕棺墓地が広がっていたものと推察される。

第５次調査（1983年度、福岡市教育委員会）

ビル建設に伴なって発掘調査を実施したもので、筑紫通りをはさんで那珂小学校の西側にあたる。発掘調査の結果、東西に伸びる長さ15ｍ、幅２ｍの溝１条を検出した。この溝は、東側に向って底が急激に深くなっており、溝の中から弥生時代前期の壺・甕、縄文時代晩期末の甕及び打製石器類と共に、主に古墳時代初頭の土師器類が多量に出土した。この溝は古墳時代の集落址の一部をなすものと考えられ、周辺に住居址群が広がっていた可能性がある。調査区南側には青磁片が出土する柱穴群が確認され、鎌倉時代の集落址も存在することが判明した。

第６次調査（1984～85年度、福岡市教育委員会）

重要遺跡確認調査で那珂八幡古墳の規模、及び範囲確認調査を行なった。調査の結果、1971年以来帆立貝式の前方後円墳と考えられていた墳丘は、前方部が撥形に開き、盾形の周溝を持つより古式の前方後円墳であることが想定された。後円部径48～50ｍ、現存長64ｍで推定全長は75ｍ、周溝は推定12～20ｍになるものと考えられる。墳頂部には２基の主体部が確認され、１号主体部は社殿の下になって明確にし得なかったが、北側に接して２号主体部が検出され、長さ2.3ｍの割竹形木棺から三角縁神獣鏡と玉類が出土している。上層からは布留式併行期の土師器が出土しており、古墳時代初頭の時期が考えられている。福岡平野では最も古い前方後円墳であり、平野中央部の那珂台地に形成された有力豪族の存在を窺うことができる。

第７次調査（1985年度、福岡市教育委員会）

那珂台地東縁部に位置し、公民館建設に伴なって、1985年11月６日から1986年１月26日にかけて発掘調査を行なった。発掘調査の結果、遺物としては後期旧石器時代の台形石器、弥生時代中期を中心とする土器片や黒曜石片などが出土しているが、遺構は、弥生時代後期末の甕棺墓１基、古墳時代後期の竪穴住居址11軒・溝状遺構２条、古墳時代から奈良時代にかけての掘立柱建物19棟以上、奈良時代の井戸址３基・溝状遺構２条、中世（鎌倉時代）以降の溝状遺構１条、その他多数の柱穴群が検出されている。包含層からは輸入陶磁器片が多く出土しており、鎌倉時代から室町時代にかけての溝覆土上層から、高さ８cmの褐釉陶器の茶入１点が完形で出土している。第７次調査では、弥生時代から中世に亘る遺構・遺物が確認され、古墳時代後期の集落址、奈良時代の集落址が明らかになった。表土層下には約40cm厚の中世から近世初期にかけての整地層がみられ、この時期にかなりの遺構が削平されているものと推察される。しかし、古墳時代前期、平安時代前半頃の遺構・遺物は欠落しており、各期における土地利用の在り方が、若干異なりを見せていたことが窺える。むしろ、古墳時代前半期の遺構・遺物は、台地中央部寄りにみられ、第５次、第８次調査で検出されている。奈良時代から平安時代初めにかけての遺構・遺物も台地部で確認されている。しかし、平安時代の集落は判然としない。

Tab.1　那珂遺跡群発掘調査一覧

次	調査期間	調査番号	所　在　地	調査面積	調査原因	調査主体	報　告
1	710315～710405	7109	博多区那珂一丁目44番(宮の脇)	24㎡	学術調査	那珂八幡古墳調査団(森貞次郎)	「福岡市那珂八幡古墳」『九州考古学』No53 1978
2	741009～741019	7414	博多区那珂一丁目237-1 外(菰牟田)	231㎡	倉庫建設	別府大学考古学研究室（賀川光夫）	『福岡平野の歴史』市歴図録第２集 1977
3	771000	7705	博多区那珂一丁目680番	2㎡	専用住宅建設	福岡市教育委員会（柳沢一男）	
4	800310～800317	8036	博多区那珂一丁目277番 外(沼口)	300㎡	道路建設	福岡市教育委員会（飛高憲雄 力武卓治）	「那珂沼口遺跡」市埋文報第82集 1982
5	830620～830703	8328	博多区那珂一丁目377-2,3	100㎡	ビル建設	福岡市教育委員会（横山邦継 下村　智）	
6	850312～850709	8505	博多区那珂一丁目44番	534㎡	重要遺跡確認緊急調査	福岡市教育委員会（井沢洋一 米倉秀紀）	『那珂八幡古墳』市埋文報第141集 1986
7	851106～860126	8530	博多区那珂三丁目８番	495㎡	公民館建設	福岡市教育委員会（田中壽夫 荒牧宏行）	「博多区那珂遺跡群第７次」市埋文報第162集 1987
8	860421～860703	8609	博多区那珂一丁目601 外(宮園)	1,350㎡	共同住宅建設	福岡市教育委員会（力　武 下　村）	『那珂遺跡』市埋文報第153集 1987

II　遺跡の立地とこれまでの調査

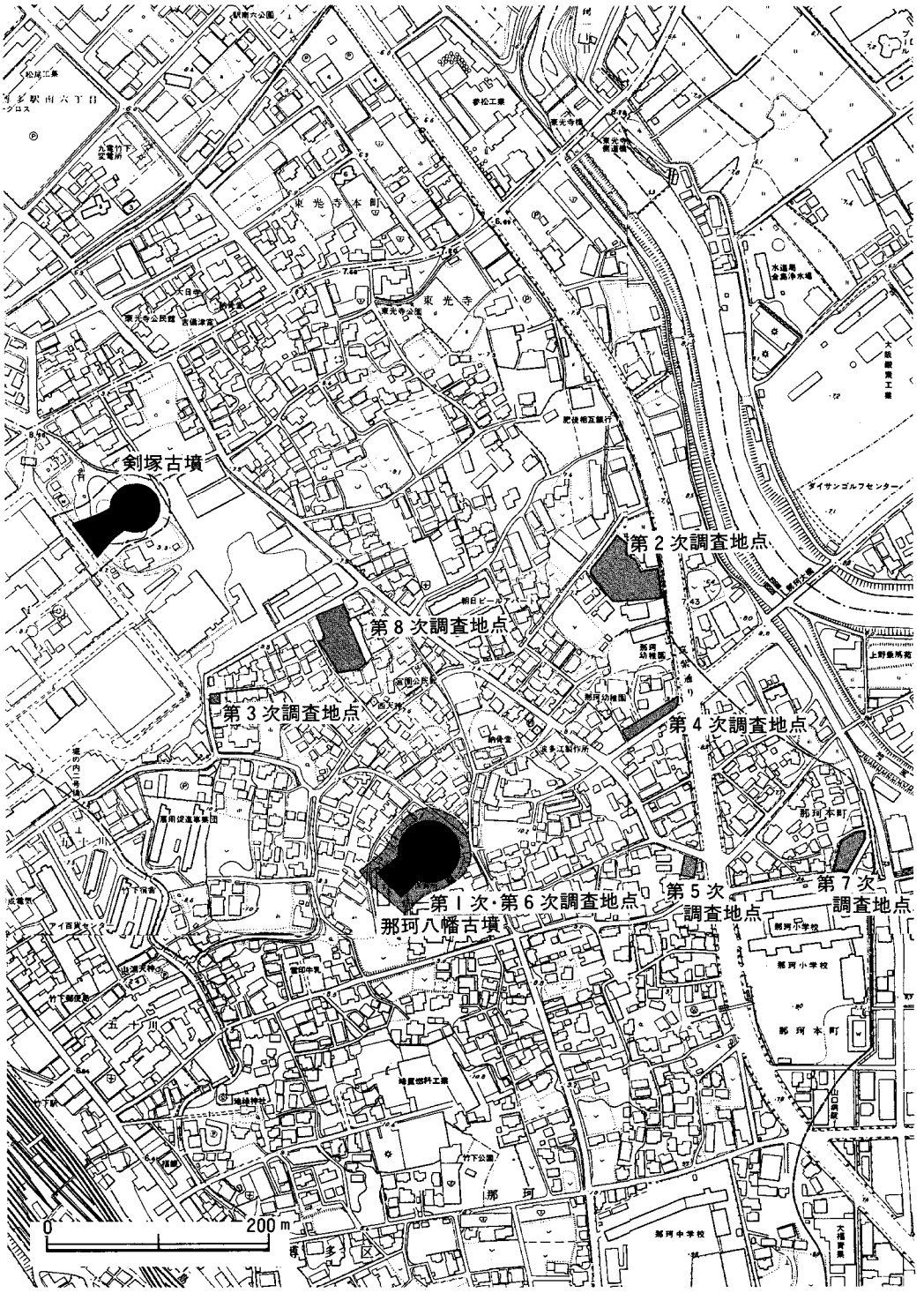


Fig. 2　　那珂遺跡群発掘調査区位置図（1/6000）

Fig. 3　那珂遺跡群第 8 次調査区遺構全体図（1/200）

Ⅲ　調 査 の 記 録

検出遺構の概要

那珂遺跡群第８次調査で検出された遺構は、円形及び方形の竪穴住居址21軒、掘立柱建物６棟、井戸址４基、土壙13基、溝10条、ピット830穴があげられる。ピット数については、竪穴住居址の柱穴、掘立柱建物６棟分の柱穴も含んだ数である。さらに、資料操作によって掘立柱建物が建つ可能性がある。

遺構は、鳥栖ロームまで掘り込まれ、暗褐色土～黒褐色土が覆土となる。遺構検出面の鳥栖ロームは、褐色粘土化した部分で漸移層、旧表土が削平又は流失してしまっているものとみられる。鳥栖ロームの上には、遺構覆土と同じ暗褐色土～黒褐色土が20cm程みられ、弥生土器などの遺物が少量認められる。さらに東半部では、この層の上に褐色土が20～40cmのっている。その上は30～40cmの盛土及び整地層となる。また、調査区数箇所には旧建物解体時のガラを埋め込んだ攪乱が認められ、遺構が一部破壊されている部分があった。

以下、各検出遺構・遺物について説明を加えたい。

1　竪穴住居址

SC01住居址〔Fig.5　PL.2(1)〕

調査区南側で検出された大形の円形竪穴住居址である。建て増しが行なわれており、最初の住居址は、径６ｍ85cmのほぼ正円に近い形を呈する。主柱穴は、Ｐ1からＰ7までの７本で、間隔はＰ1―Ｐ2が2.0ｍ、Ｐ2―Ｐ3が１ｍ80cm、以下、Ｐ3―Ｐ4 2.0ｍ、Ｐ4―Ｐ5 1ｍ80cm、Ｐ5-Ｐ6 2ｍ40cm、Ｐ6―Ｐ7 1ｍ40cm、Ｐ7―Ｐ1 2ｍ40cmとなり、規格性がある。中央には大形のピットがあり、焼土塊は認められなかったが、焼土粒子を含む黒褐色土が詰っていた。周縁には壁溝が巡り、10～15cmの壁の立ちあがりを検出した。全体にかなり削平を受けており、東側は壁溝のみとなっている。壁溝の内側には浅いピットがめぐるが、北側はＳＣ04から切られており判然としない。

次に、西側に建て増しが行なわれておりＰ6、Ｐ7にかわって新たにＰ8～Ｐ10が主柱穴に加わる。したがって、主柱穴はこの段階で都合８本になる。主柱穴の深さは床面下80cm前後で、他の柱穴の深さと殆ど変化はない。床面も同一平面でフラットである。建て増しによって、長径は7ｍ40cmとなり、短径は元のままの6ｍ85cmでやや楕円形のプランになる。柱穴間隔は、Ｐ5-Ｐ8が2.0ｍ、Ｐ8―Ｐ9が1ｍ90cm、Ｐ9―Ｐ10が2ｍ40cm、Ｐ10―Ｐ1が１ｍ40cmを測る。建て増しによって拡張した周縁部にも浅い壁溝が確認できる。円形住居址は、第８次調査ではこの他ＳＣ07、ＳＣ08住居址がある。その中でもＳＣ01は、最も規模の大きいものである。

出土遺物（Fig.4）

甕（1・2・5）　1は逆L字状口縁を持つ甕形土器で、口縁内側の発達が著しい。推定外口径26.5cm、茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。2は丹塗りの甕形土器で、逆L字状の口縁を持つ。口縁外端部に刻み目、口縁下にM字状突帯を施す。推定外口径は30cm。胎土は砂粒を含むが、淡褐色を呈し肌理が細かい。5は底部である。底径7.3cm、底面が幅1cm前後で輪状に窪む。砂粒を多く含み赤褐色。甕形土器は全体に器面が荒れており、調整がはっきりしない。

壺（6）　壺形土器の底部である。底径7.2cmで、底面がやや窪む。色調は褐色で、胎土に砂粒を多く含む。外面は研磨されている。

高坏（3・4）　高坏の筒部と脚である。筒部は縦方向の細かなヘラ磨き、内面はシボリ、脚部は器面が荒れており調整不明、明褐色～褐色を呈し、胎土は肌理細かく精良である。

その他、図化しなかったが、磨石と石皿が出土している。SC01住居址出土遺物は、弥生時代中期中葉から後半代に相当すると考えられる。

SC02住居址〔Fig.6　PL.2(2)〕

調査区南側、SC01の西隣りに位置する長方形の竪穴住居址である。南側は削平されてプランが確認できない。主軸をN－13°－Wにとり、南北3m90cm、東西3m30cmを測る。小形で南側に向ってやや幅が狭くなっている。主柱穴は2本で、掘り方は2段になっている。柱間の距離は1m50cmである。周縁には壁溝はみられないが、西壁に突出した部分があり、炉址状に赤く焼けている。壁の立ちあがりは15～18cmまで確認できた。

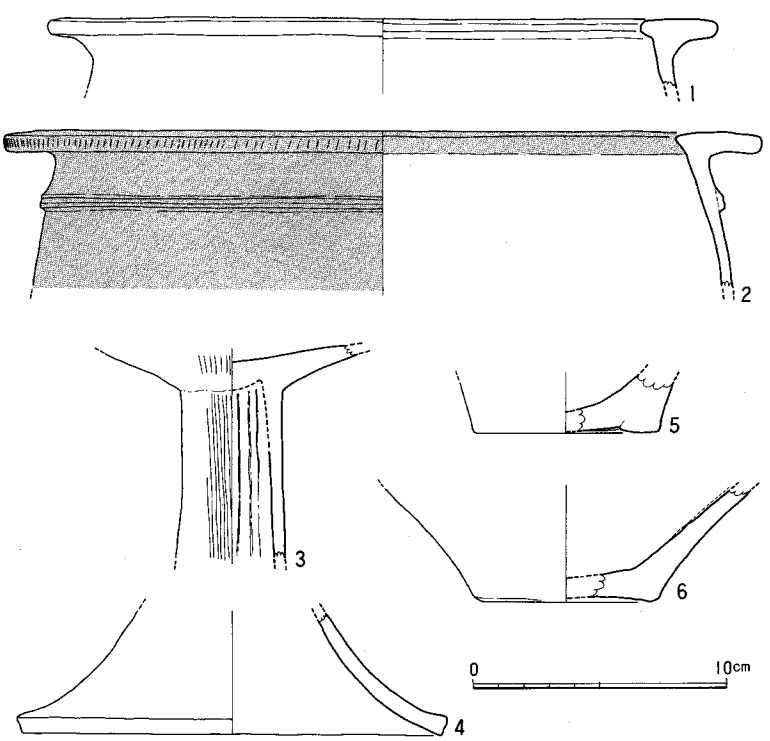


Fig.4　SC01住居址出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.7 1～3　巻頭図版上）

甕（2）　胴下半部から底部にかけての部分である。底径8.7cm、内外面共に風化が激しく器面が荒れている。

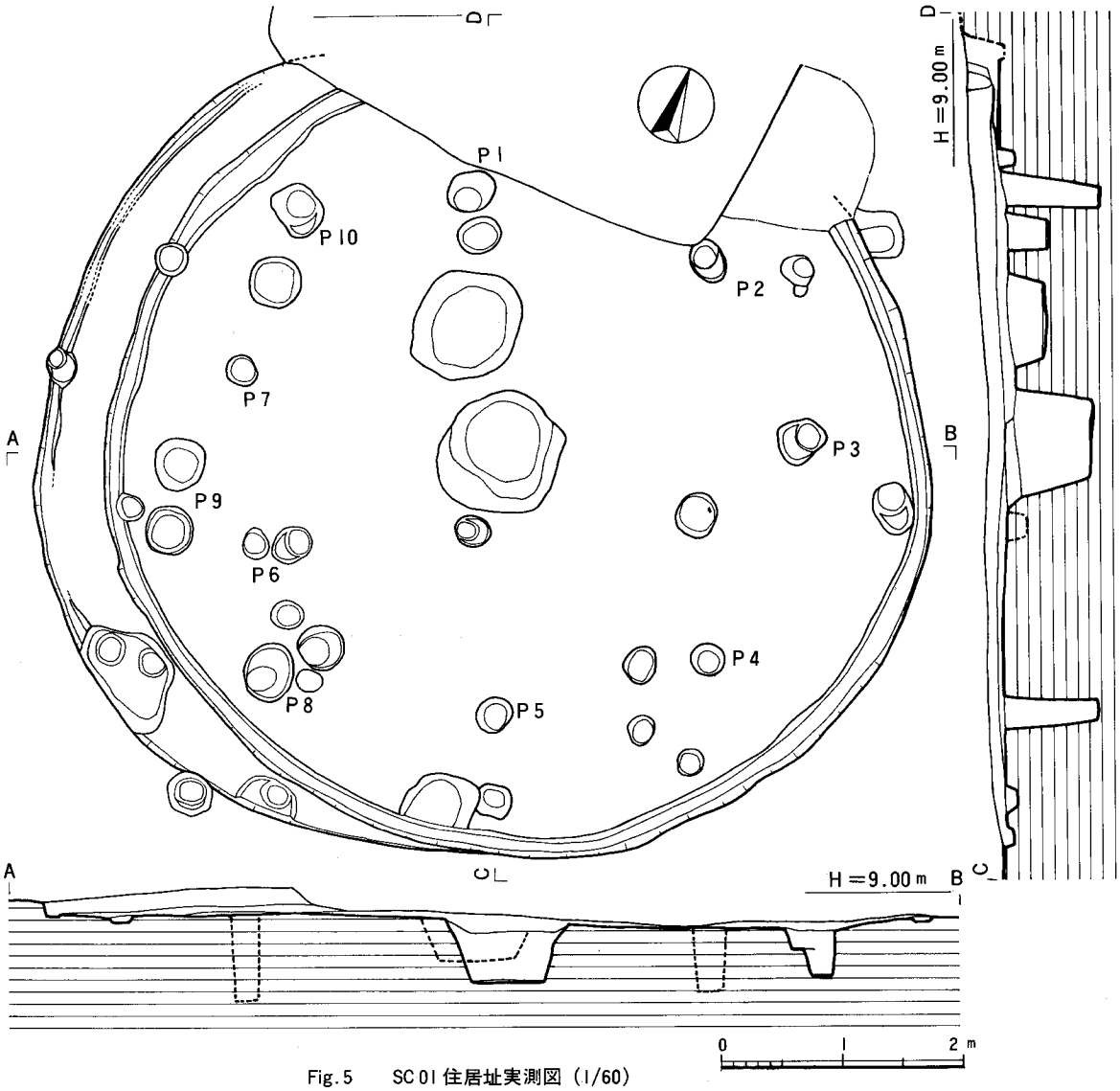


Fig.5　SC01 住居址実測図（1/60）

実際は図示した断面よりも器壁は厚い。茶褐色を呈し、砂粒を多く含む。調整は不明。

壺（1・3）　1は鋤先状口縁を有する壺形土器である。推定外口径28cm、頸部にやや丸味を帯びた三角突帯を一条施し、頸部から肩部に移る部分にも三角突帯を一条貼付する。厚手の作りではあるが、外面は丹塗りが施される。内面は横方向の刷毛目調整。明褐色を呈し、胎土は赤色粒子を少量含む精良なものである。3は袋状口縁壺の口縁部である。頸部に断面コの字状に近い突帯をめぐらす。明褐色を呈し、胎土は精良である。外面及び内面の袋状部には丹彩が施される。

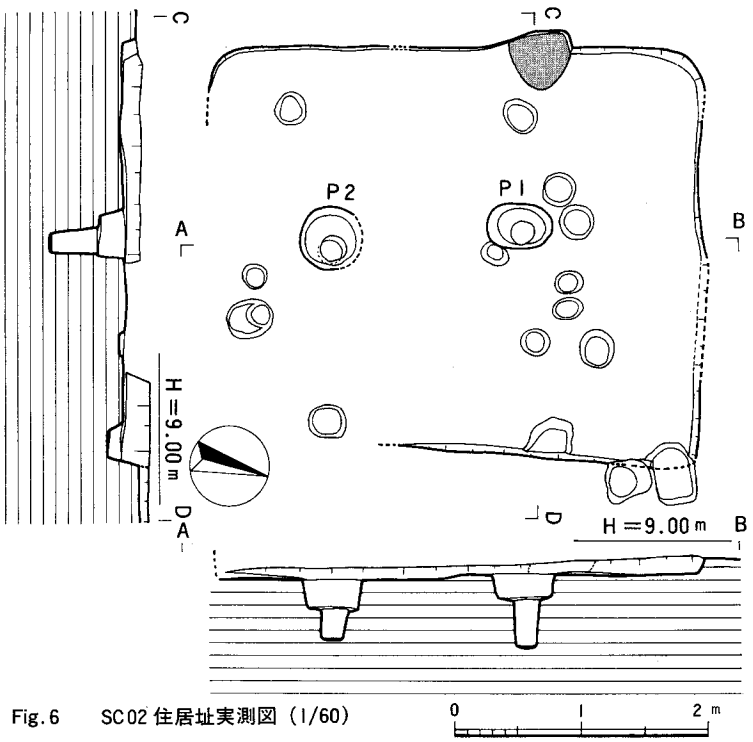


Fig.6　SC02住居址実測図（1/60）

SC02は、以上の出土遺物から弥生時代中期末の時期が考えられる。なお、SC02からは青銅器鋳造に関係すると考えられる取瓶片が2点出土している。外面は赤褐色、スサは認められないが厚手で、内面は灰色に焼け固まっている。胎土に粗い石英砂を多く含む。

SC03住居址〔Fig.8 PL.2（2）〕

SC02住居址のすぐ北側に隣接する。長方形のプランを有すると考えられるが、北側は旧建物解体時の攪乱と、古墳時代後期のSC05住居址に切られており、判然としない。長軸はN—29°—W方向をとり、4mまでは床面が確認できる。短軸の東西方向は3m70cmを測ることがで

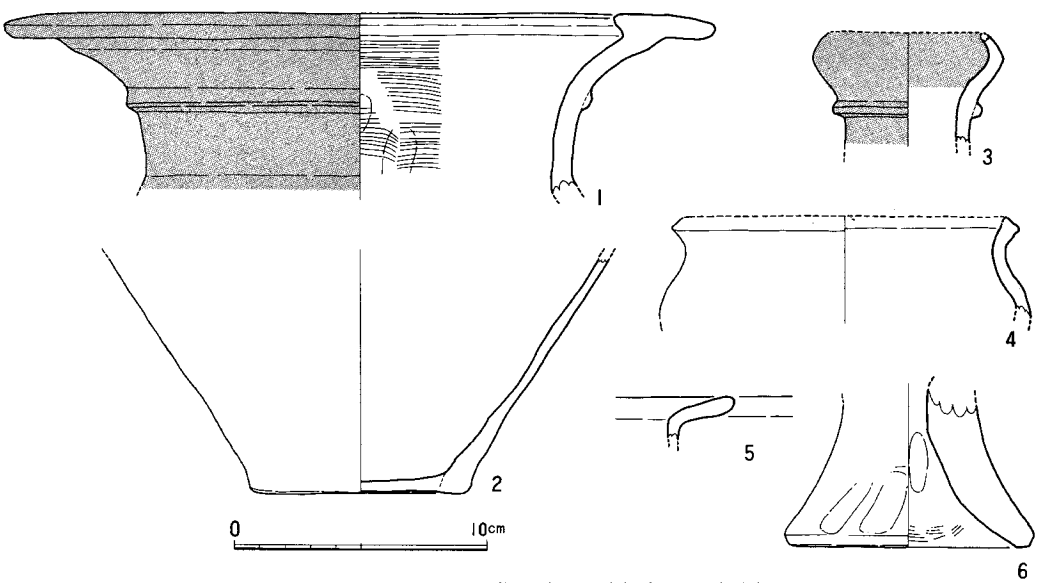


Fig.7　SC02・03住居址出土遺物実測図（1/3）

きる。全体にかなり削平を受けており、壁の立ちあがりは12～15cm程度になっている。壁溝は全周巡ると考えられるが、西側は二重になっている。主柱穴は２本になるが、もう１本は攪乱で確認できない。

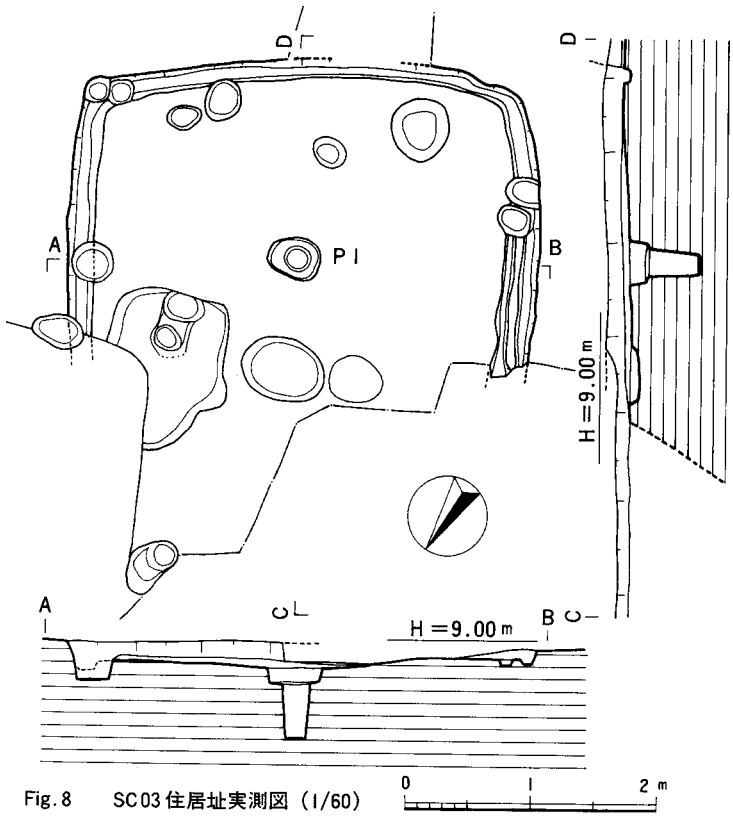


Fig.8　SC03住居址実測図（1/60）

出土遺物（Fig.7－4～6）

壺（4）　短頸壺と考えられる。胴部から頸部が短く立ちあがり、口縁部が外反、肥厚する。推定外口径13.7cm、内外面ナデ調整による。黒色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。

甕（5）　口縁部の小破片である。逆L字状に近く端部は丸く整える。黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。風化が激しい。

器台（6）　肉厚な器台の下半部である。底径9.8cm、赤褐色で砂粒を多く含む胎土を持つ。器面は内外面とも荒れているが、指押え及び刷毛目調整がみられる。

以上、SC03出土遺物は、弥生時代中期末に比定できる。

SC04住居址〔Fig.9　PL.2（3・4）〕

SC01の北側に位置し、SC01を切り、さらに北側に位置するSC05に一部切られる。長軸はほぼ磁北をとり、南北に長い長方形となる。南北５m30cm、東西４m10cmを測る。今回調査した竪穴住居址の中では一番残りがよく、壁の高さは50cmを測ることができる。四周には壁溝を巡らし、中央部に２本の主柱穴がある。柱穴間は2.0mである。

遺物は、床面直上から古式土師器がまとまって出土した。中央部から北側寄りに甕類、東側に略長方形の土壙がありその中から甑形土器と、周りから壺類や高坏が集中して出土している。北東隅には、縦25cm、横22cm、厚さ７cmの台石が置かれていた。

出土遺物（Fig.10～12　巻頭図版下）

壺（1・2・8）　1は球形の胴部を持つ壺形土器で、胴部の最大径はやや下位にある。口縁部は外反し端部は尖る。色調は淡褐色から灰褐色を呈し、非常に良精な胎土を有する。器面

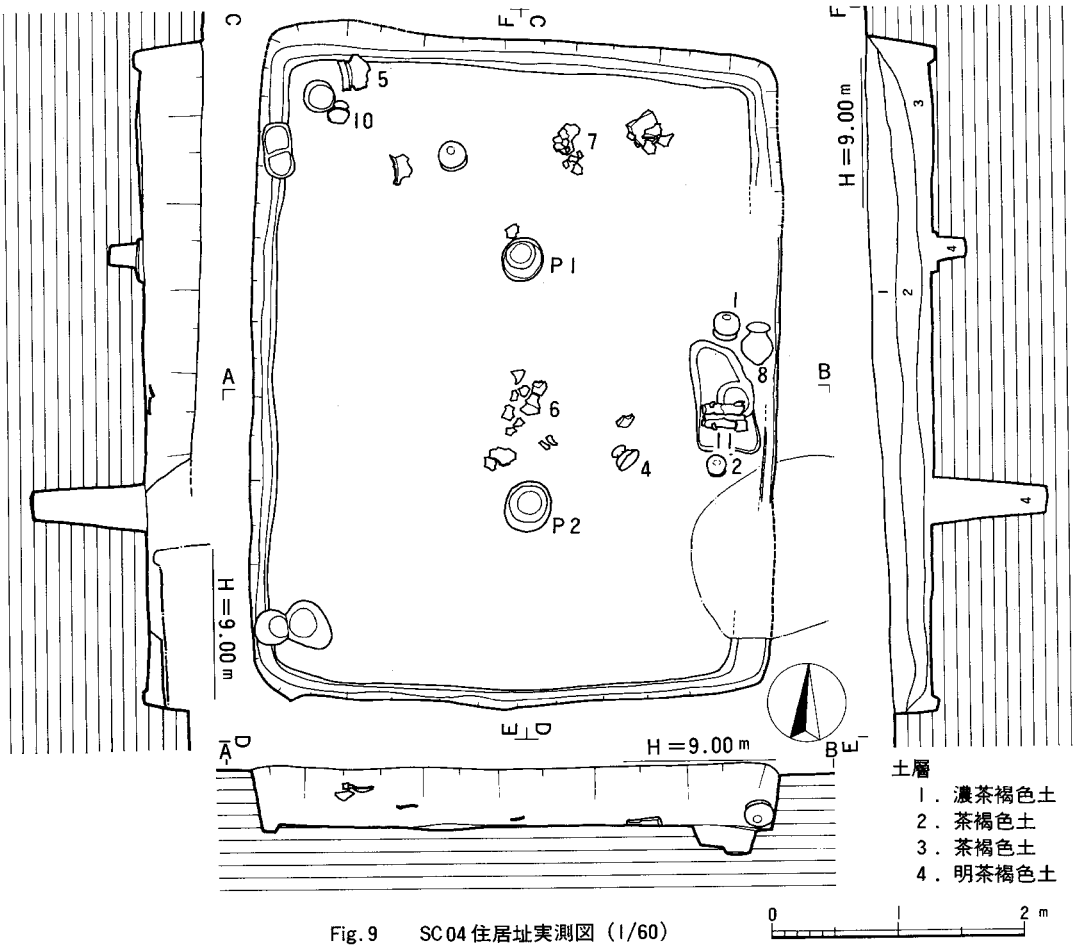


Fig. 9　SC04住居址実測図（1/60）

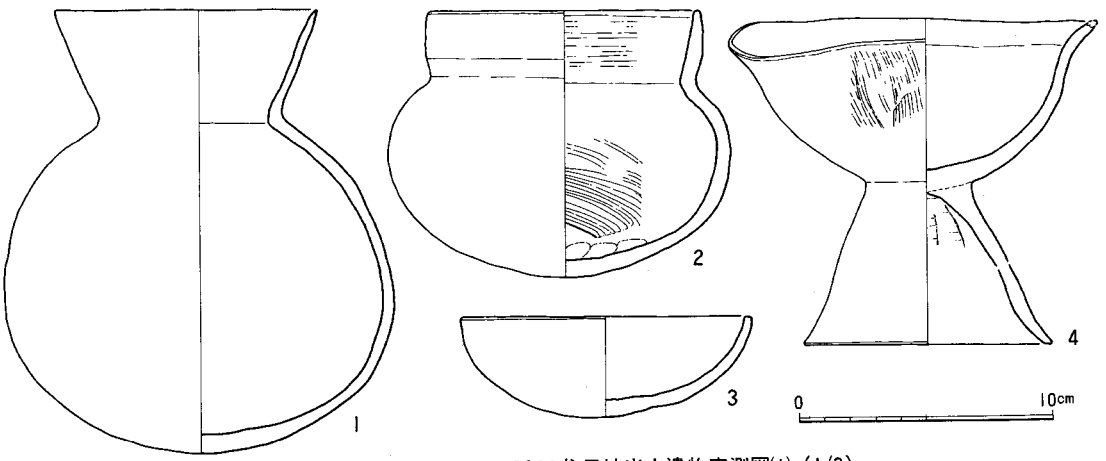


Fig. 10　SC04住居址出土遺物実測図(1)（1/3）

調整は表面が風化剝落してはっきりしない。口径10.4cm、器高17.7cm、胴径15.4cmを測る。2は丸底壺で、扁球形の胴部にやや肥厚した短い口縁部を持つ。外面調整は剝落で判然としないが、内面は刷毛目及び指押えが認められる。口径10.8cm、器高10.6cm、胴径13.5cmを測り、淡灰褐色で胎土に2～3㎜の砂粒を含む。8は口径15.0cm、器高25.5cm、胴径21.0cmを測る壺形土器である。胴部最大径は中位で、頸部は窄り、外反する口縁部を有する。口縁端部はハネ

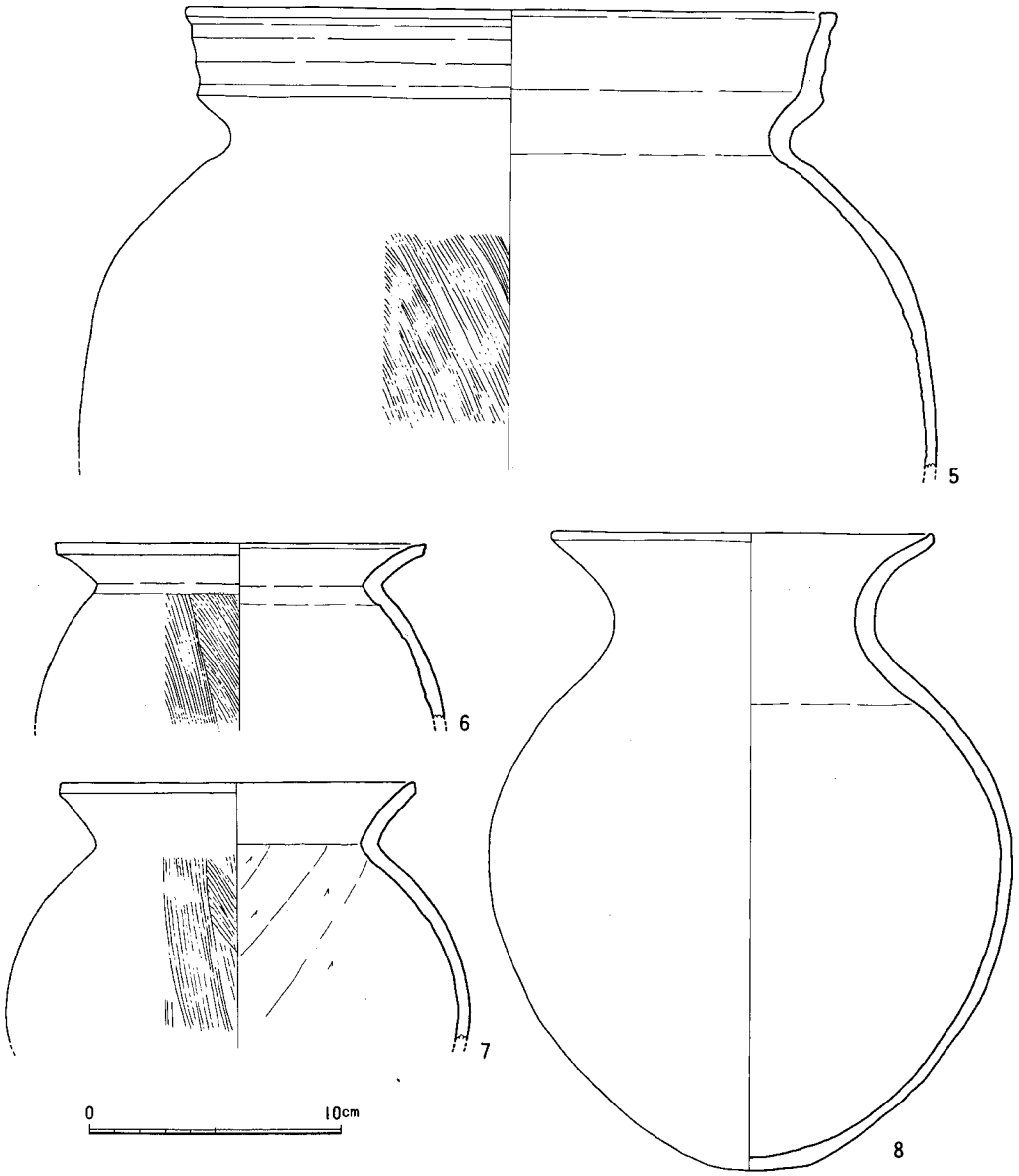
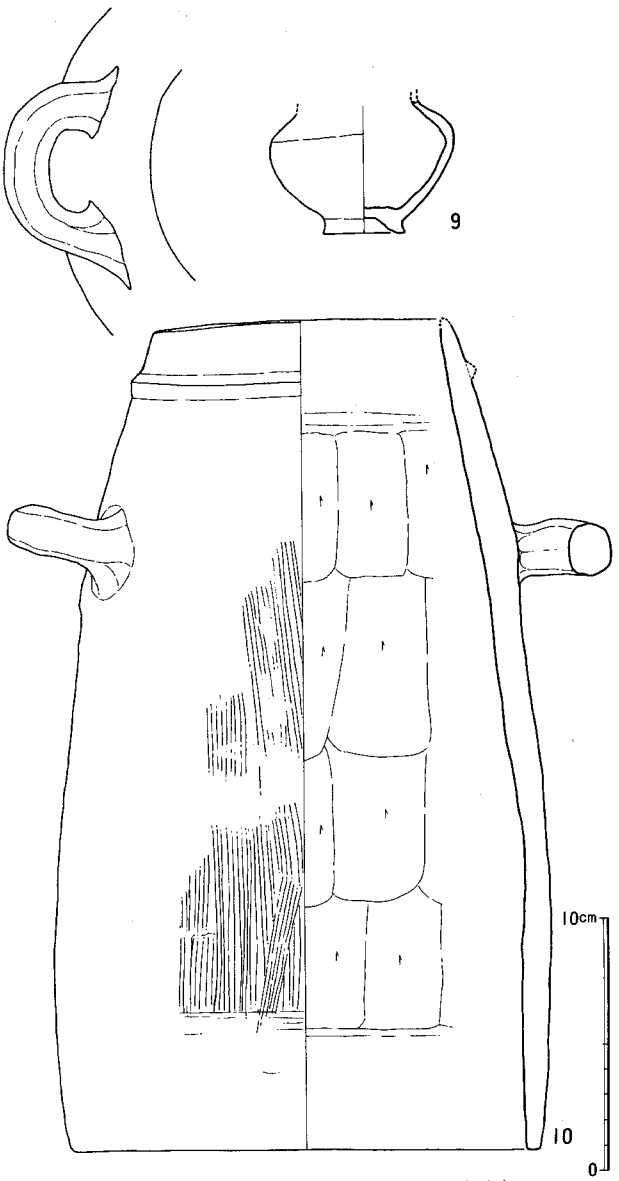


Fig. 11　SC 04 住居址出土遺物実測図(2)（1/3）

上げ状となる。灰褐色から上半部は明褐色を呈し、胎土にやや砂粒を含む。器面は風化が激しく調整は判然としないが、内面底部近くは指頭圧痕が観察される。

甕（５～７）　5は二重口縁を有する大形の甕形土器である。口径26.0cm、胴径34.3cmを測る。明褐色を呈し、胎土に１～２mmの石英・長石砂を含む。調整は胴部外面に細かい刷毛目が観察されるが、あとは風化が激しく不明である。６・７は外反する口縁部を持つ甕形土器である。胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削り、その他はナデ調整であるが、器面が風化剝落して不明瞭な部分がある。６は口径14.8cm、明褐色で胎土に石英・長石砂を含む。７は口径14.2cm、胴径18.5cmで赤褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を含む。６・７は口縁部の外反度がやや異なるが、作りが良く類似しており布留式の古段階に位置づけられるのではなかろうか。

高坏（４）　外反する口縁部に深い坏部を有し、脚部はややふくらみを持ちながら裾部は外開きになるタイプの高坏である。口径14.5cm、器高13.0cm、底径9.8cmを測り、坏部及び脚部はかなり歪つになっている。



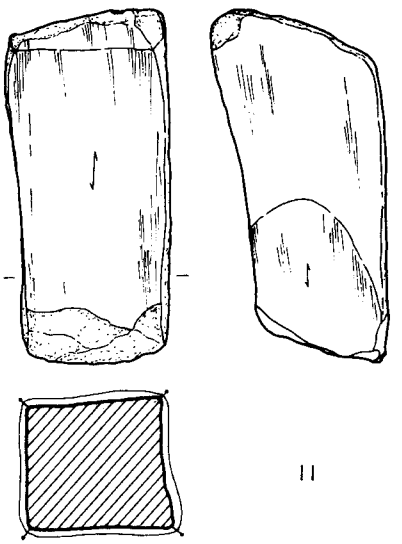


Fig. 12　SC04 住居址出土遺物実測図(3)（1/3）

淡褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含むが精良であり、1の壺形土器の胎土に良く類似している。調整は、表面が剝落してはっきりしないが、坏部外面に縦方向の刷毛目が観察される。

椀（3）　口径11.5cm、器高4.0cmで、褐色から明褐色の色調を呈し、胎土に砂粒を少量含む。器表は風化剝落しており、調整ははっきりしない。

甑形土器（10）　いわゆる山陰系甑形土器と呼ばれるもので、ほぼ完形で出土した。口径12.0cm、底径18.5cm、胴部最大径19.6cm、器高33.1cmを測る。口縁部に貼付の三角突帯を有し、上半部に一対の横方向の環状把手を装着する。把手は体部に穴をあけ挿入して接着されている。口縁端部は丸く整形され、下端部は平担に仕上げる。調整は口縁部、裾部内外面共横ナデ、胴部外面は縦刷毛目、内外は下方から上方へのヘラ削りとなっている。色調は褐色で大きな黒斑が認められる。胎土には2～3mmの花崗岩風化砂粒が多量に混入している。この他、同住居址からは環状把手のみが別に2箇出土している。

ミニチュア土器（9）　器形は脚台付壺形土器である。灰褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を多く含む。器表は風化剝落で荒れており、調整は内外面とも不明。残存器高5.4cm、胴径7.3

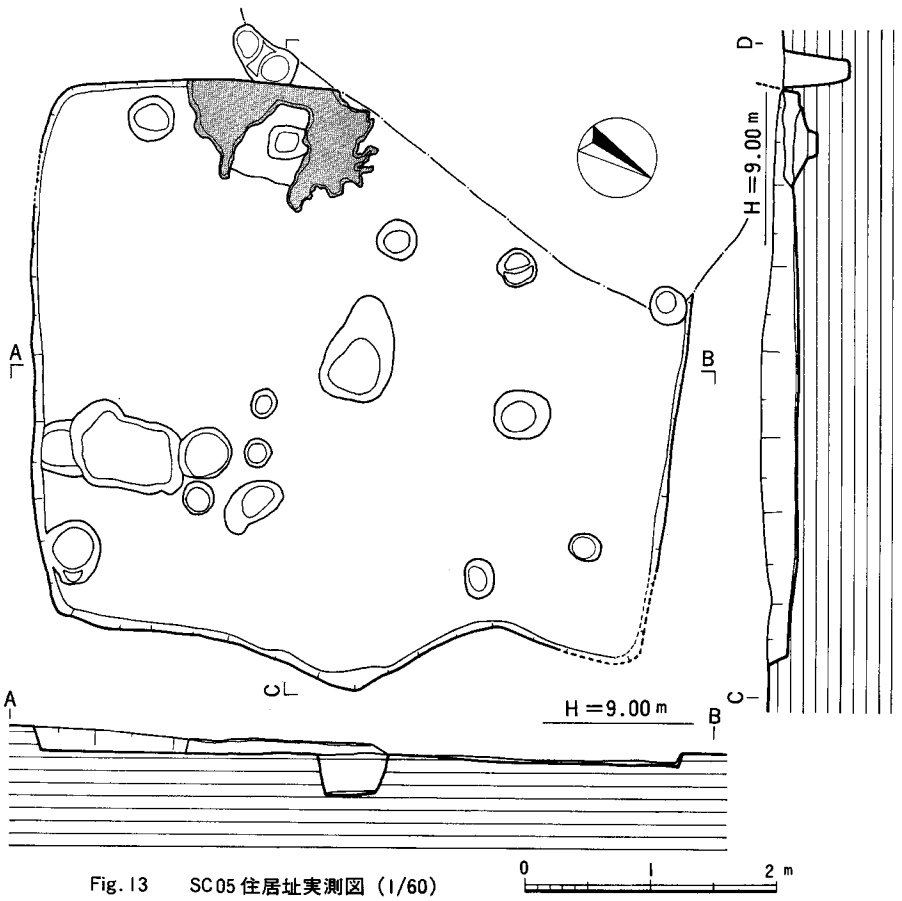


Fig. 13　SC05住居址実測図（1/60）

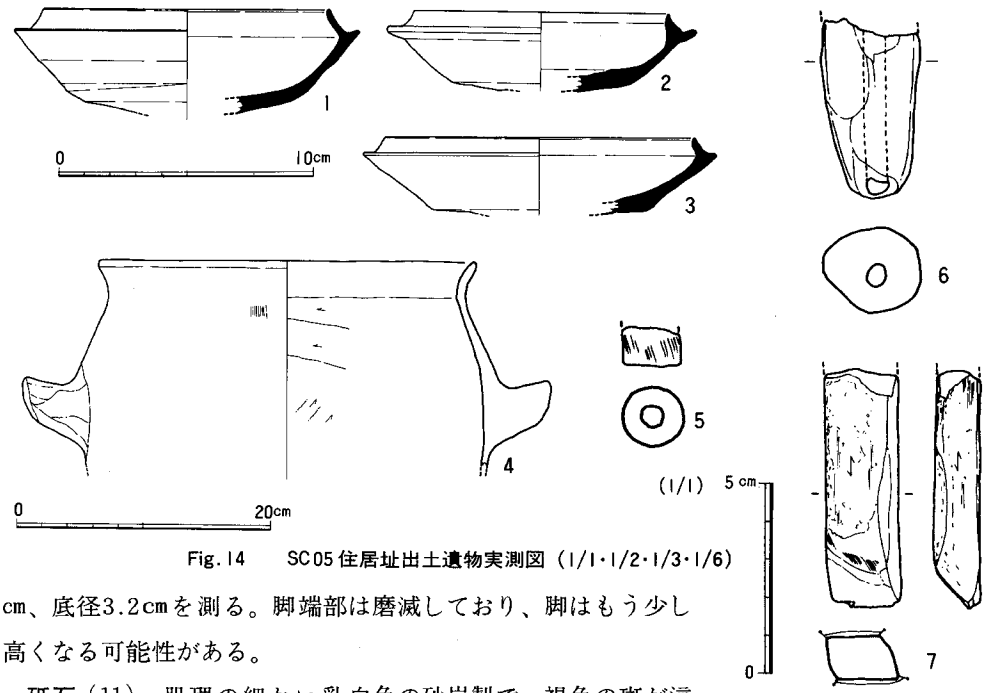


Fig.14　SC05住居址出土遺物実測図（1/1・1/2・1/3・1/6）

cm、底径3.2cmを測る。脚端部は磨滅しており、脚はもう少し高くなる可能性がある。

砥石（11）　肌理の細かい乳白色の砂岩製で、褐色の斑が這入る。四面とも使用されており、三面は特に使い込まれている。現存長14.0cm、下半部折損。

SC04からは、古墳時代前期初頭に位置づけられる外来系土器がまとまって出土している。特に山陰系の甑形土器の出土は注目に値する。今後、同時代における北部九州と、山陰、畿内、瀬戸内地方との関係を改めて注意する必要がある。

SC05〔Fig.13　PL.2（5）〕

SC03・04を一部切って、北側に位置する。長軸はN—30°—Wにとり、南北5m20cm、東西4m40cmを測る。西壁にカマドを付設する。主柱穴ははっきりせず、壁溝も確認できない。壁の立ち上りは約20cm、6世紀末～7世紀にかけての住居址である。

出土遺物（Fig.14）

高坏（1）　須恵器有蓋高坏の坏部である。口径11.0cm、坏高4.1cm、蓋受けの立ち上りは内傾する。色調は灰色で、胎土に1mm大の砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。

坏（2・3）　須恵器坏身片である。口径10.0～12.2cm、蓋受けの立ち上りは短く内傾している。2は灰色で胎土精良、焼成堅緻である。3は焼成が悪く、淡灰色を呈し端部は磨滅する。

甑（4）　推定口径29.5cm、明褐色を呈し、胎土に2～3mmの石英・長石砂を含む。調整は器面が風化剝落してはっきりしないが、外面は刷毛目、内面はヘラ削りが観察される。

土錘（6）　径2.6cmの管状土錘である。残存長4.8cm、黄褐色を呈し、砂粒を少量含む。

砥石（7）　頁岩製で、破損した一部である。片面は良く研ぎ込まれ、平滑にすり減っている。

玉（5）　灰緑色をした滑石の臼玉である。外径7.5mm、孔径2.5mmを測る。一部破損。

SC06住居址〔Fig.16　PL.2（6）〕

SC05の東側で検出された。大部分は既設建物解体時の攪乱で壊されており、東壁の半分、及び南壁は確認できない。長軸は東北方向を取り、N—44°—Eである。東西6m20cm、南北は推定5m強で、長方形のプランになると考えられる。壁溝は明確に確認できるが、壁から30～60cm内側に巡る。壁の高さは25cm前後残存している。東壁の一部は東に位置するSC07円形住居址を切っており、時期的には中期後半以降が考えられる。

出土遺物（Fig.15）

時期的にはやや古い様相を呈するが、逆L

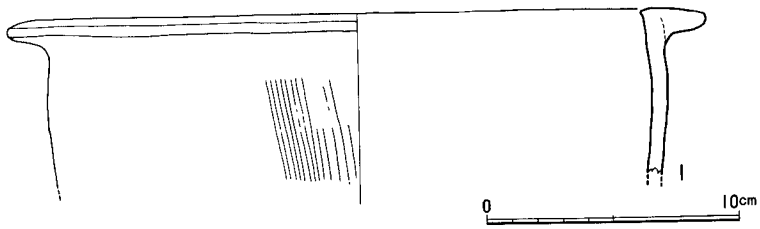


Fig. 15　SC06住居址出土遺物実測図（1/3）

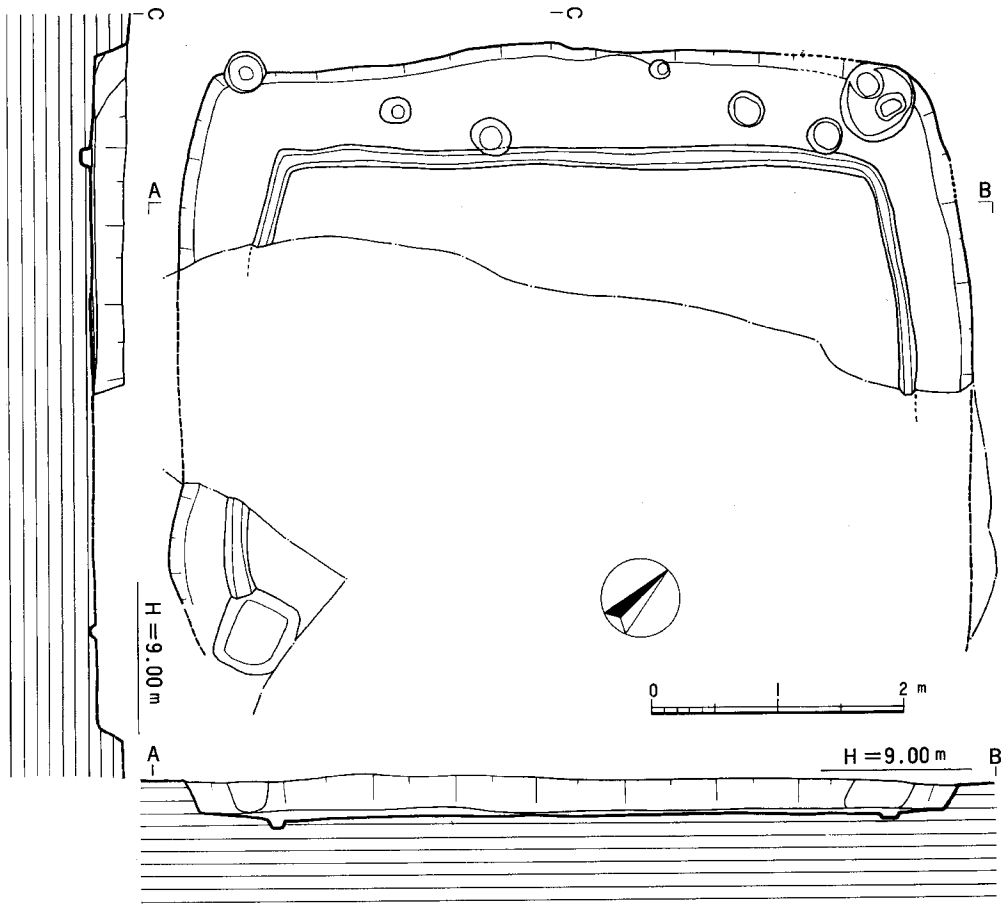


Fig. 16　SC06住居址実測図（1/60）

字状口縁を持つ甕形土器である。茶褐色を呈し、胎土に２～３㎜大の石英・長石砂を含む。外口径22.6cm、外面は縦方向の刷毛目、内面はナデ調整か。その他、同住居址からは６世紀後半代の須恵器甕口縁部片が出土しているが、攪乱に伴なう混入品と考えられる。

SC07住居址〔Fig.17　PL.3（１）〕

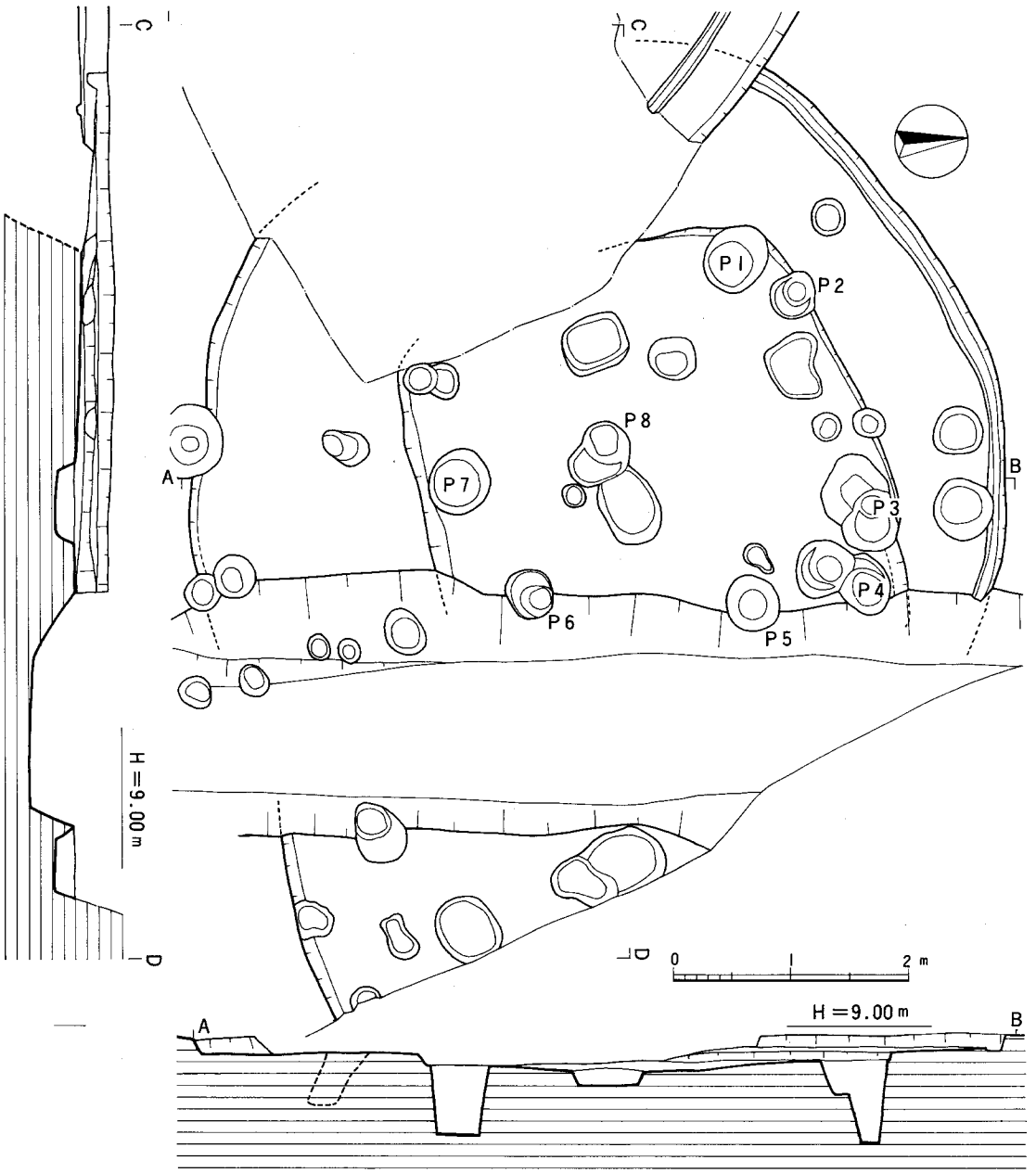


Fig.17　SC07・11住居址実測図（1/60）

ＳＣ06の東側に位置する円形住居址である。東半部は、磁北に伸びるＳＤ01溝に切られ判然としない。西側はＳＣ06に切られ、かつ新しい攪乱によって壊されている。住居址の径は６ｍ95cmで、北側に壁溝が巡る。中央部は約３ｍ90cm四方で窪み、周辺がベッド状に高くなる。主柱穴は方形の掘り方内に収まり、５～６本が円形に並ぶ。西側破壊部分にも、もう１穴あったものと考えられる。住居址の残りは、周縁部が12～13cm、中央部の掘り方がさらに12～15cm深くなり、都合25cm前後になる。

出土遺物（Fig.18）

壺（１・２・４・７）　1は扁球形の胴部から短く外反する口縁部を持つ壺形土器である。推定外口径13.3cm、胴径15.1cmを測る。外面明褐色を呈し丹塗りを施す。胎土に微砂粒を含む。２は袋状口縁壺である。口縁部は丸く内湾し、短い頸部からすぐに胴部へと移行する。器色は黄褐色で、精良な胎土を持つ。調整は内外面共風化剝落してはっきりしない。4・7は鋤先状口縁を有する壺形土器である。４は推定外口径30.7cm、７は37.2cmを測る。４は茶褐色を呈し、

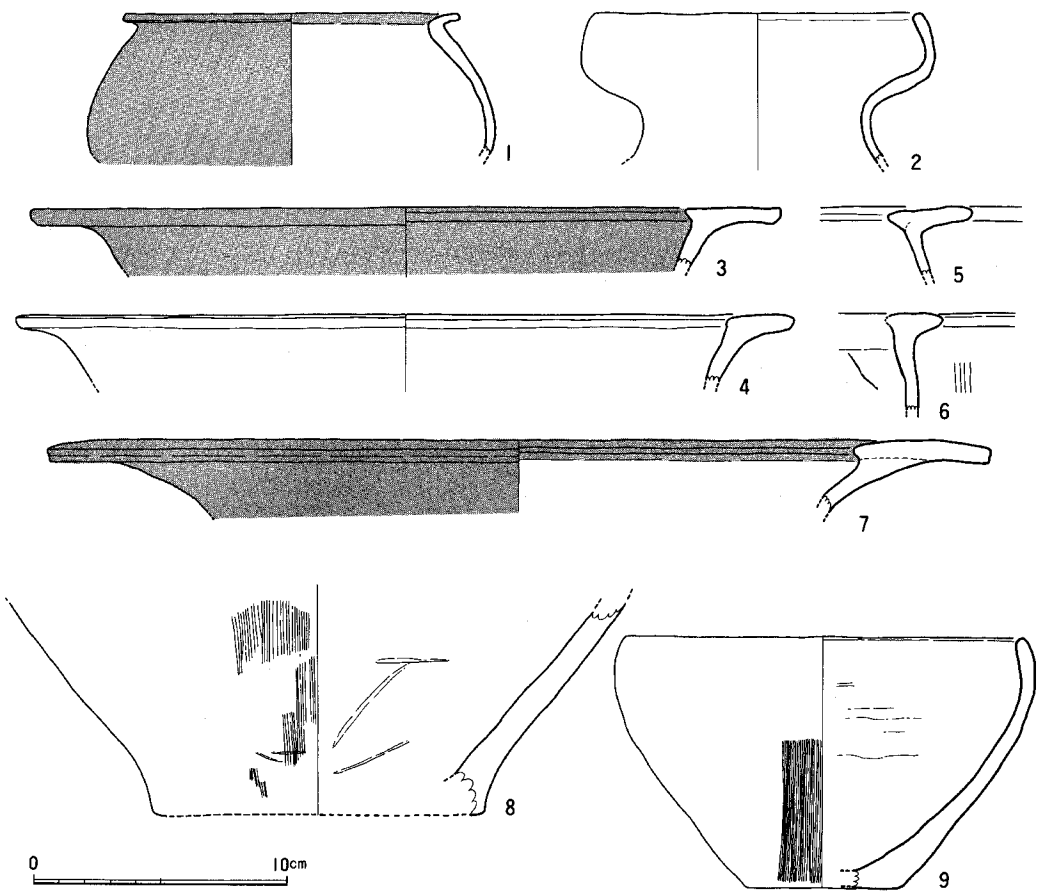


Fig.18　SC07住居址出土遺物実測図（1/3）

胎土に２㎜大の砂粒を多く含む。７は精良な胎土を持ち、明褐色で丹塗りが施されている。

甕（５・６・８）　５・６は口縁部片で逆Ｌ字状口縁を有する。５は明褐色を呈し、胎土に石英砂を混入する。6は胎土に砂粒を少量含み灰褐色を呈す。外面には縦刷毛目を施しススが付着する。8は底部である。器色は明褐色で、精良な胎土を持つ。外面に刷毛目調整痕あり。

高坏（３）　推定外口径29.6cm、鋤先状口縁をなす。褐色で胎土に少量砂粒を含む。丹塗り。

鉢（９）　口径15.5cm、器高10.0cmの鉢形土器である。淡褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。外面には細かな縦刷毛目が観察されるが、あとは風化剝落が激しく不明。

ＳＣ07出土土器は、弥生時代中期後半から末に位置づけられるが、これらの土器と一緒に

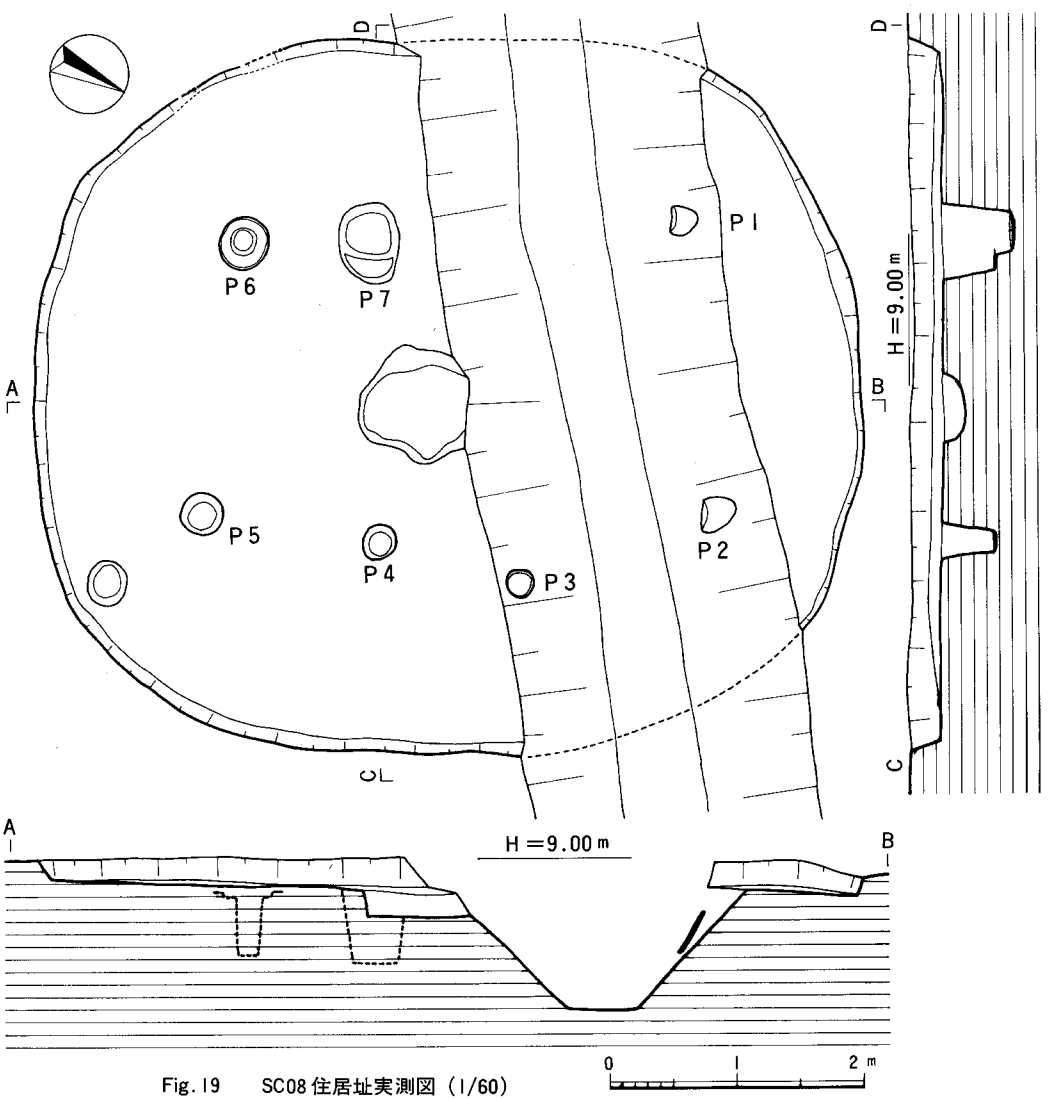


Fig. 19　SC08住居址実測図（1/60）

青銅器鋳造に関係する遺物が出土している。

中子（Fig.63—7　巻頭図版上）　現存長5.2cm、中央部の断面は楕円形で長径2.55cm、短径2.1cmを測る。基部から先端部に向って細くなる。淡褐色を呈し、胎土は石英砂を少量含むが、微砂を固めた様な感じで極めて精良である。一部分は熱を受けて黒ずんでいる。断面及び全体の形状から中細銅矛の袋部根元に近い部分の中子ではなかろうか。短く折り取られたような様相を呈している。

SC08住居址〔Fig.19　PL.3（2）〕

調査区中央部西側で検出された。南北に長いやや楕円形のプランを有する。中央部は、幅2m20cm前後のSD02溝で大きく切られている。長径6m50cm、短径5m60cm、壁高は20cm前後残存する。柱穴は、中央ピットをはさんで1間×3間の方形に配列されており興味深い。壁溝は認められなかった。

出土遺物（Fig.20）

甕（2・3）

くの字形口縁を持つ甕形土器である。2は推定口径31.5cmを測る。口縁部は肥厚し端部は丸く整形する。胴部外面には粗い縦刷毛目がみられる。

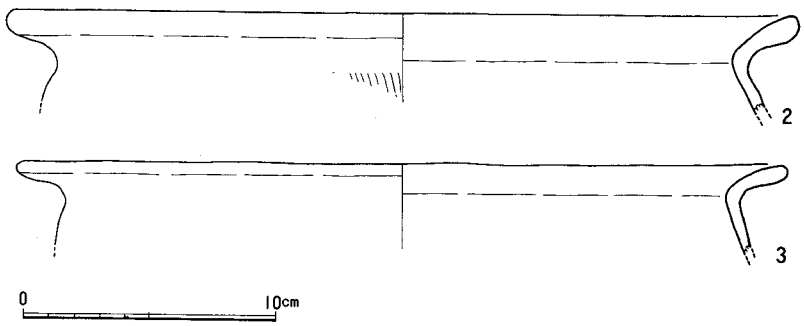


Fig.20　SC08住居址出土遺物実測図（1/3）

茶褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を混入する。3も2と同様な器形をとる。推定口径30.7cm、淡褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を多量に含む。調整は器面が風化剝落しており不明である。弥生時代中期末の所産と考えられる。

砥石（1）　暗灰色の砂岩製で、全面よく使い込まれており平滑である。残存長15.1cm、中央部の断面は4.5cm×3.4cmである。

SC09住居址〔Fig.21　PL.2（5）〕

東西3m70cm、南北3m30cm前後のやや小形の竪穴住居址である。壁は20～28cm残存しており、周縁に壁溝が巡る。長軸はN—58°—E方向にとる。SC05の北側に位置し、南隅をSC05及び攪乱で切られている。また、北隅も既設建物解体時の攪乱で切られている。主柱穴は判然としなかった。住居址内からは、弥生時代中期後半から末葉にかけての遺物が出土している。

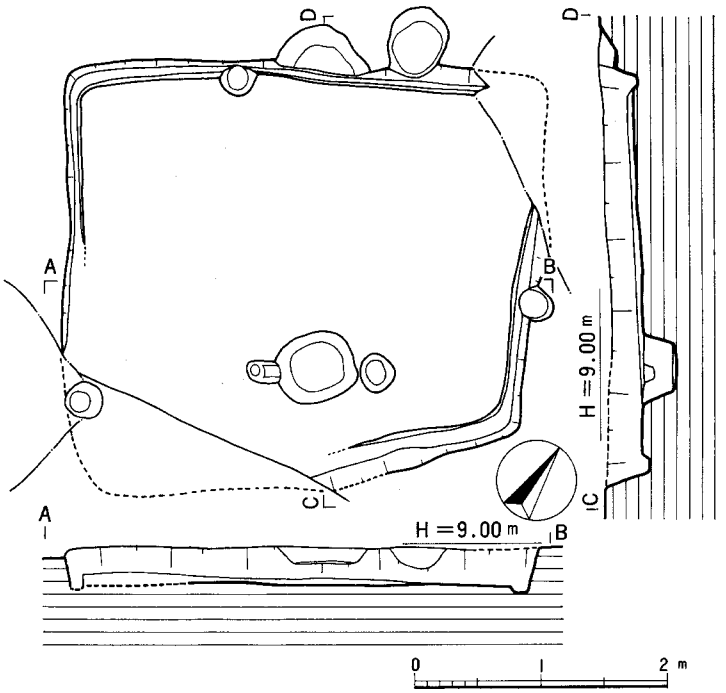


Fig.21　SC09住居址実測図（1/60）

出土遺物（Fig.22）

甕（1～8）　1～4は逆L字状口縁を有する甕形土器である。1は推定外口径20.2cm、やや厚手の作りで、明褐色を呈し2～3mmの石英・長石砂を含む。口唇部は凹線状に窪み、少し内側に上下に貫通する焼成前の穿孔が認められる。器表は剝落しているが丹彩が施されている。2～4は口縁上面がやや内傾する逆L字状口縁を持つ。4の推定外口径は32.7cm、3点とも暗褐色から淡褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を多く含む。器面調整は剝落して不明。

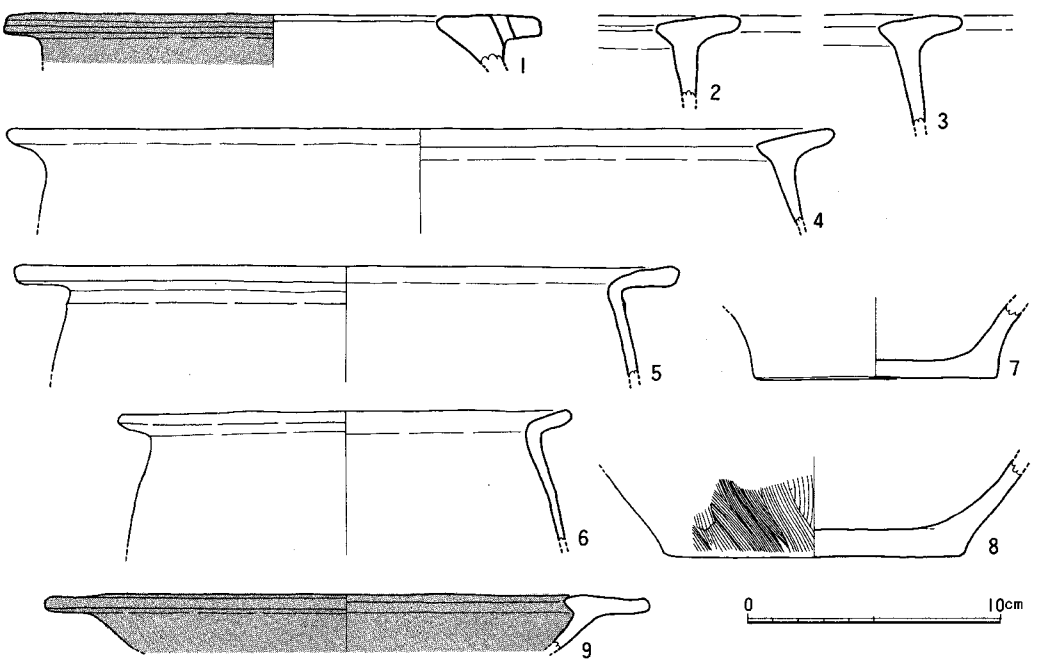


Fig.22　SC09住居址出土遺物実測図（1/3）

5・6は、くの字形に外反する口縁部を持つ甕形土器である。5は推定外口径26.2cm、6は17.9cmで小形である。共に明褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。7・8は底部である。7は底径9.6cm、褐色で胎土に石英・長石砂を含む。8は底径11.9cm、茶褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を多量に混入する。外面は細かな刷毛目調整、内面は手ナデである。

高坏（9）　推定外口径23.8cm、明褐色を呈し精良な胎土を有する。器表は風化剝落しているが内外面とも丹塗りの痕跡が認められる。

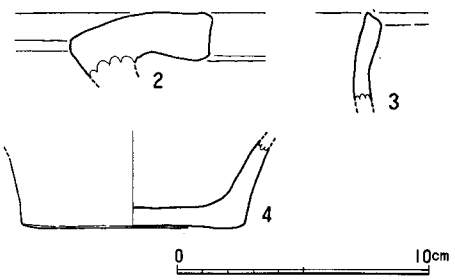


Fig.23　SC10・11住居址出土遺物（1/2・1/3）

SC10住居址〔Fig.3　付図 1〕

調査区中央部西側で検出された。大部分が調査区外に伸びており、方形竪穴住居址の北東隅東西2m、南北2mを確認し得たにすぎない。さらにコーナーはSD04溝及び攪乱で壊されている。壁の高さは最大で35.0cm残存しており、北側はベッド状に10cm程高くなる。出土遺物は極めて少なかった。

出土遺物（Fig.23—1～3）

甕（2・3）　共に小破片で、径を復元し得ないが、2は大甕の口縁部片である。逆L字状に外反し、端部は肥厚する。口唇部はナデ調整によって少し凹む。淡褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を含む。甕棺の口縁部片の可能性もある。3は短頸壺の口縁部片かもしれない。外反する口縁で、端部は肥厚する。石英砂を中心とする砂粒を多く含み、淡褐色をなす。焼成は悪い。

石庖丁（1）　半月形外湾刃の石庖丁片である。暗灰色の粘板岩製で、調整時の細かな擦痕が観察される。背部には調整時の剝離痕がみられる。

SC10出土遺物は小破片が多く時期判定が困難であるが、甕口縁部の形態から弥生時代中期末の時期を考えたい。

SC11住居址〔Fig.17　PL.3（1）〕

SC07の東側に位置し、SD01溝によって切られ、さらに東半部は未調査区に含まれるため、全体の様子は判然としない。壁の一端は弧を描くので円形住居址と考えられるが、SC07との切り合い関係は把握できなかった。

出土遺物（Fig.23—4）

甕（4）　図化できるのは、底部1点のみである。底径8.8cm、淡赤褐色を呈し、胎土に1～2mmの石英・長石砂を含む。調整は器面が風化剝落して判然としないが、外面は縦方向の刷毛目、内面は手ナデとみられる。

SC11は、他の出土土器を考慮して弥生時代中期末の時期を想定することができる。

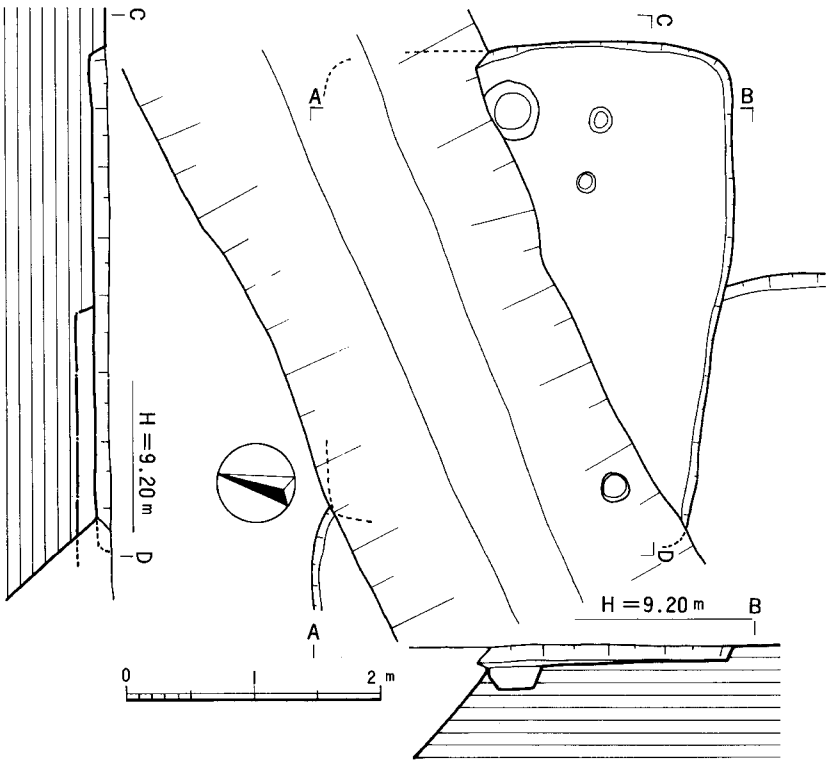


Fig.24　SC12住居址実測図（1/60）

SC12住居址

〔Fig.24　PL.3（2）〕

調査区中央部西側に位置し、SC08住居址を切っている。しかし、大部分はSD02溝によって切られており、全体のプランは判然としない。小形の長方形竪穴住居址と考えられる。残存長は東西3m80cm、南北2.0mを測ることができる。壁の残りは悪く、12cm前後である。壁溝及び主柱穴は確認していない。出土遺物は図化できるものがなく、SC08との切り合い関係から、弥生時代中期末以降の時期が考えられる。

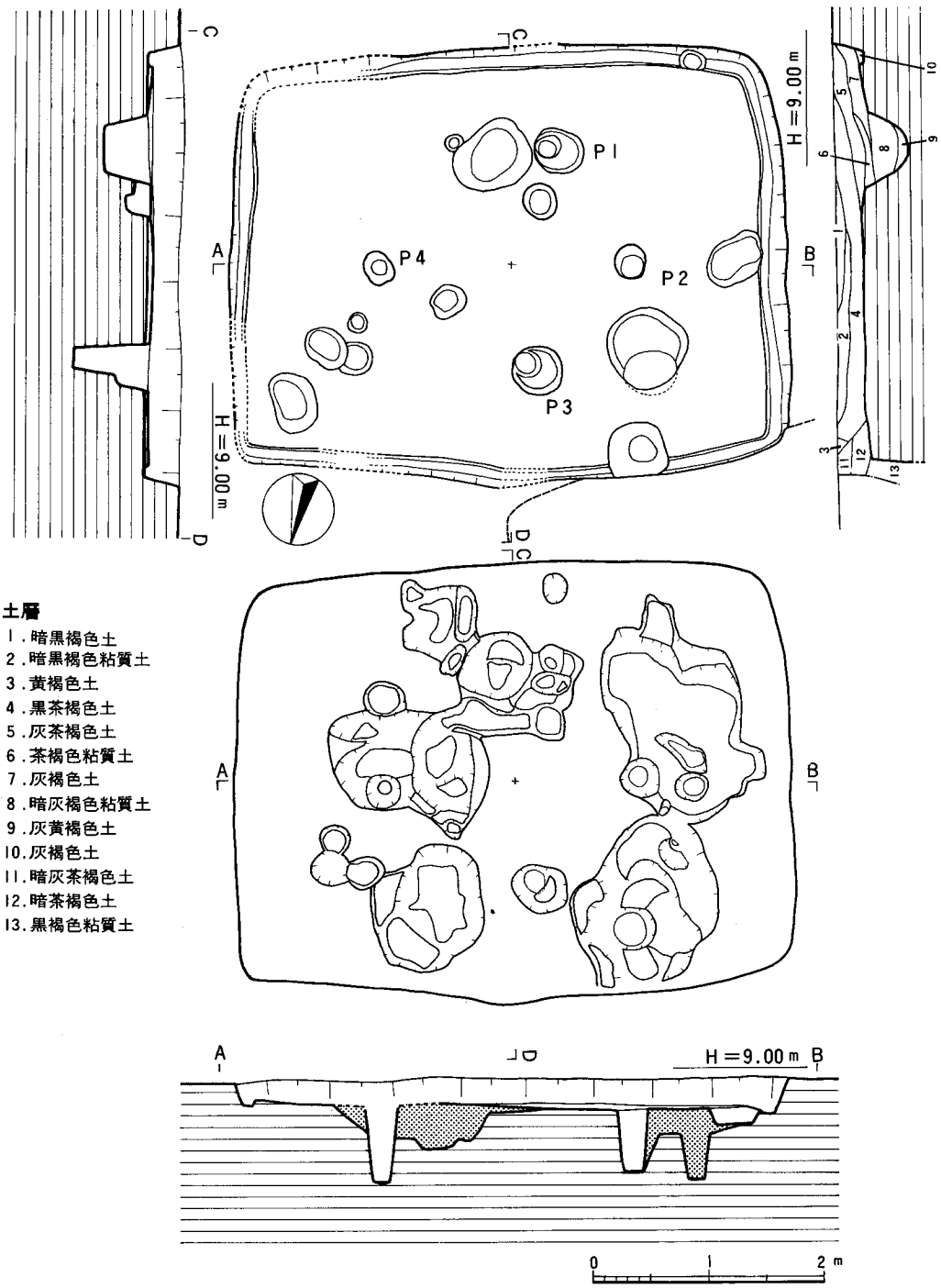
SC13住居址〔Fig.25　PL.3（4）〕

調査区中央部東側に位置し、北側壁の一部はSC14に切られる。長方形のプランを有し、長軸はN—77°—Eをとる。東西4m80cm、南北3m75cmを測り、壁の立ち上りは20～25cm残存しており、残りが良い方である。床面周縁には壁溝を巡らす。この住居址は建て替えが行なわれており、先ず、P1、P3を主柱穴とする竪穴住居が営まれ、その後、貼り床をして、P2、P4を主柱穴とする住居が営なまれている。貼り床を剥がしてみると、土壙状の落ち込みが5箇所確認された。P1、P3間は1m85cm、P2、P4間は2m20cmである。

出土遺物（Fig.26）

甕（1～3、5）　1はやや内傾する逆L字状口縁を持つ。推定口径30.1cm、淡褐色を呈し石英砂を中心とする砂粒を含む。2・3は、くの字に近い逆L字状口縁を有し、端部は肥厚する。共に胎土に砂粒を含み、2は褐色、3は淡褐色を呈する。5は底部である。底径8.5cm、褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。甕形土器は全て器面が荒れており、調整が確認できない。

SC13出土甕形土器は、口縁部の形態から弥生時代中期末に位置づけられる。



土層

1．暗黒褐色土
2．暗黒褐色粘質土
3．黄褐色土
4．黒茶褐色土
5．灰茶褐色土
6．茶褐色粘質土
7．灰褐色土
8．暗灰褐色粘質土
9．灰黄褐色土
10．灰褐色土
11．暗灰茶褐色土
12．暗茶褐色土
13．黒褐色粘質土

Fig. 25　SC13住居址実測図（1/60）

壺（4）　底部片である。底径9.0cm淡褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を多く含む。外面は縦刷毛目、内面は指押えが観察される。

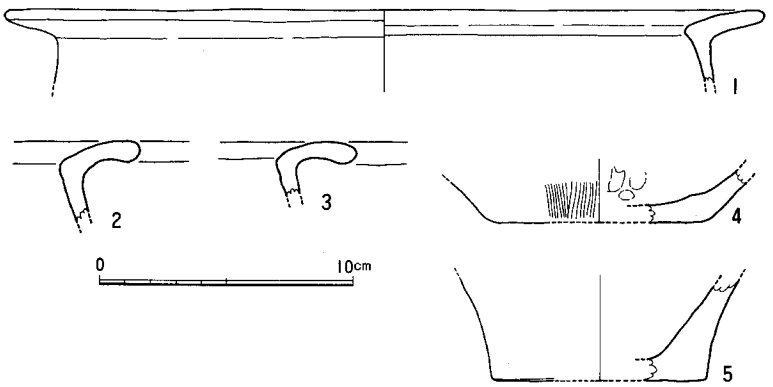


Fig.26　SC13住居址出土遺物実測図（1/3）

SC14住居址

〔Fig.27　PL.3（4）〕

調査区中央部で検出され、SC13の北側に位置する。住居址の中央部をSD02溝が貫通し、大きく破壊されている。長軸はN—26°—Wとなり、南北5m90cm、東西4m90cmを測る。壁の立ち上りは25cm前後残存する。壁溝は全周巡らないが、一部は確認されている。2本柱の建物であると考えられる。遺物は南側に集中して発見された。大形の壺類は主柱穴南側に破砕集積した状態で出土している。東南隅には小形の壺形土器が出土している。

出土遺物（Fig.28）

壺（1・2・10・12）　1は鋤先状口縁を有する大形の壺形土器である。胴部は球形に張り、小さな底部へと移行する。外口径31.4cm、胴部最大径は中位にあり、突帯外径45.8cm、底径8.8cm、器高54.4cmを測る。口唇部には刻み目を施し、頸部と肩部にはM字状突帯をそれぞれ一条、胴部には三条巡らす。口唇部及び頸部には丹が塗布され、暗文が施される。頸部以下は丁寧なナデ調整が加えられ、平滑に仕上げられている。器色は褐色を呈し、胎土内には2～3mmの石英砂を混入する。2も鋤先状口縁を持つ甕形土器で、頸部がやや長い。口唇端部には刻み目を施し、頸部及び肩部にはM字状突帯をそれぞれ一条巡らす。外口径は26.7cmで、淡褐色を呈し、石英・長石砂を含む。口縁上端には丹塗りの痕跡が観察されるが、全体の器表は風化剝落しており、どこまで塗られていたのかはっきりしない。10は小形の壺である。外反する口縁に、球形にふくらむ胴部を持つ。口径13.5cm、胴部最大径19.1cm、器高18.1cmを測る。精良な胎土を有し淡褐色をなす。外面及び底面に丹塗りが施される。内面は風化剝落して不明。12は底部で、底径8.0cm、茶褐色を呈し胎土に砂粒を多く含む。外面には粗い刷毛目が観察される。底部の形態から鉢形土器の可能性もある。

甕（3～7・11）　3・4・6は、くの字状口縁を持つ甕形土器である。3は復元外口径30.2cm、6は小破片で口径を出せないが、共に淡褐色を呈し、胎土に3mm大の石英・長石砂を多く含む。器表は風化剝落して、断面は本来の器表よりも薄くなっている。4は口縁部が剝落しているが、推定外口径24.0cmを測る。胎土には、1mm大の石英・長石砂の外に角閃石や暗灰色

の別の砂粒を含む。外面は刷毛目、内面はナデ調整となっている。器色は褐色を呈す。5・7はやや内湾するくの字状口縁を有し、口縁下に三角突帯を貼付する。同タイプで突帯を貼付しないものも存在する。5は復元口径36.4cm、明褐色を呈し、石英砂を含む。外面に刷毛目がみられる。7は肌理の細かな胎土を有し、茶褐色をなす。11は底部である。明褐色で砂粒の多い胎土を持つ。器面は風化剝落が激しく荒れている。

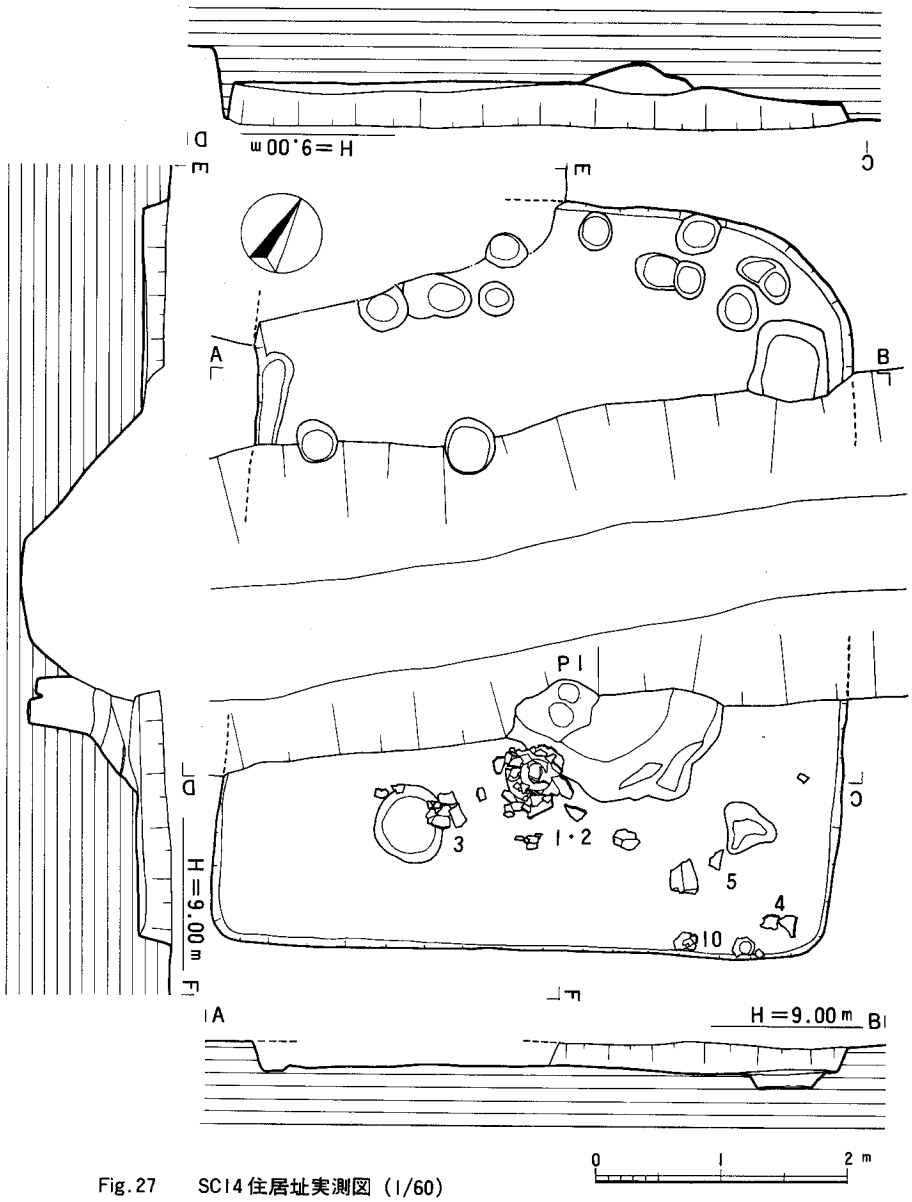


Fig.27　SC14住居址実測図（1/60）

器台（8・9）8は脚部を欠失する。淡褐色を呈し、胎土には2～3㎜の石英・長石砂を多量に混入する。9は肉厚の器台脚部である。胎土に砂粒を少量含み、淡褐色を呈する。ともに焼成が悪いのか風化が激しく、器面が荒れて調整が観察できない。

SC14出土土器は弥生時代中期末の時期が考えられるが、SC13よりもやや新しい。

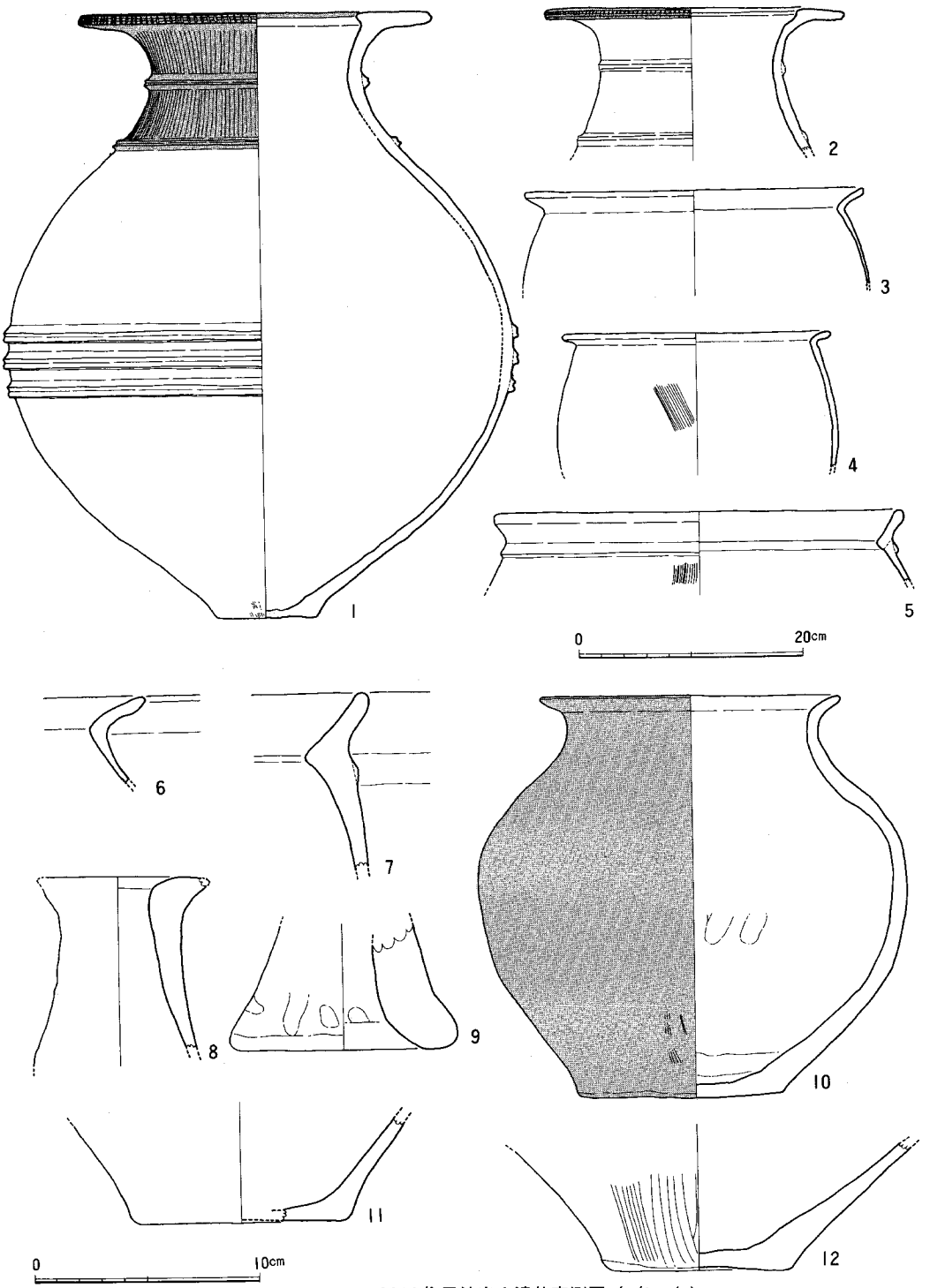


Fig. 28　SC14住居址出土遺物実測図（1/3・1/6）

SC15住居址〔Fig.29　PL.3（5）〕

調査区北側の東半部で検出された。東壁の一部は調査区外へ伸びている。東西4ｍ30cm以上、南北4ｍ55cm、壁高22～30cmを測る。隅丸方形で四本柱を有する。長軸は南北方向にとり、N—11°—Eとなる。西壁にカマドを持つ。柱穴間の間隔はP1—P2、P3—P4が2ｍ30cm、P2—P3、P1—P4が丁度2.0ｍとなり、間隔を統一している。主柱穴の掘り方は50～60cmと大形で、

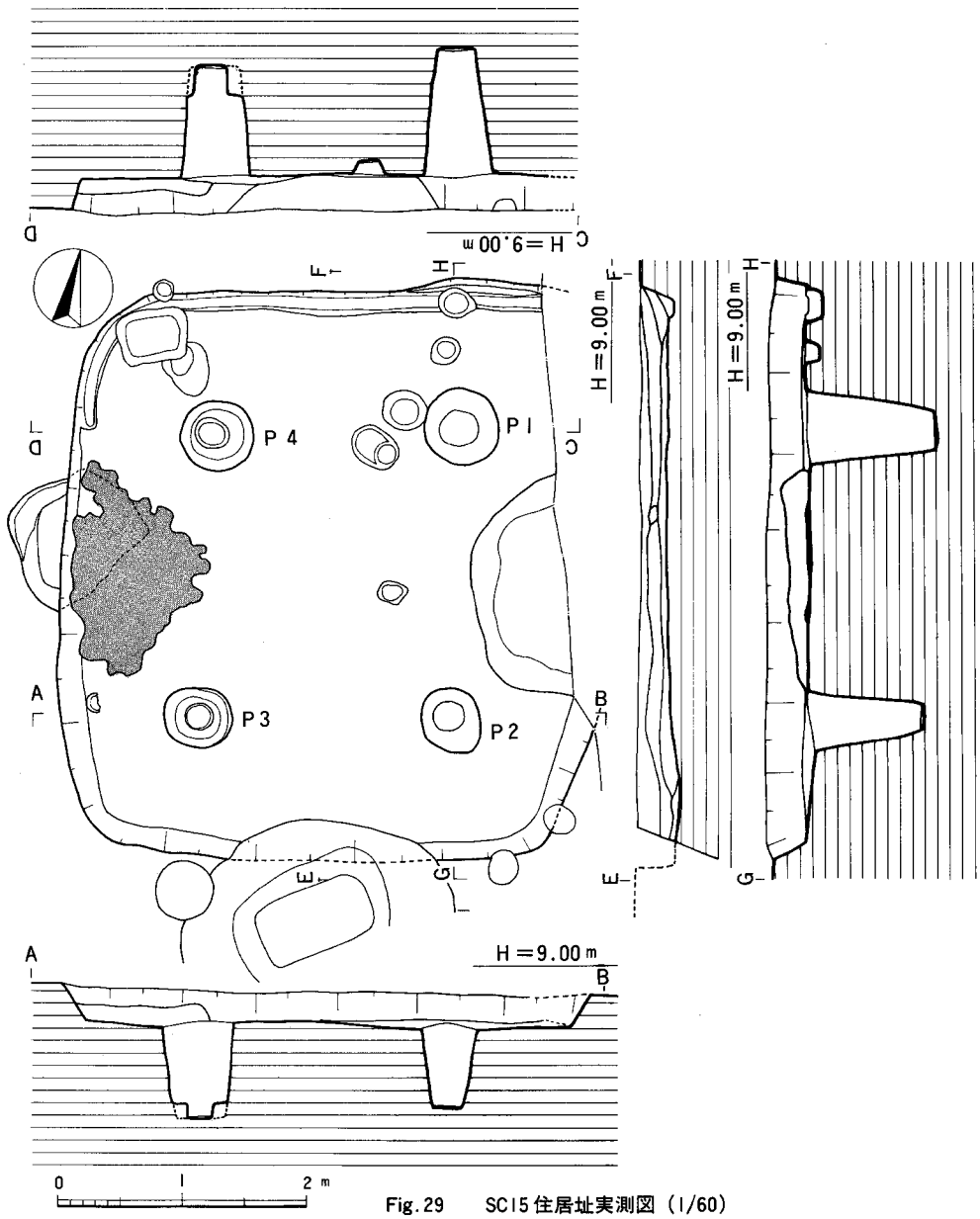


Fig.29　SC15住居址実測図（1/60）

かつ深く、径20cmの柱痕が確認できた。出土遺物から古墳時代後期の6世紀後半代が考えられる。

出土遺物（Fig.30）

甕（1・2・4・5・9）　土師器甕で、1・2は口縁部が僅かに外反する。1は小形品で把手状の粘土貼付が認められる。4は口縁部が短く外反し、胴部がふくらむ。5・9は外反する口縁を有し、外端部を肥厚させる。5は内外面に条痕状の調整痕が観察される。ともに明褐色から褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を含む。器表は風化して剝落しているものが多い。

壺（3・6）　須恵器の壺類口縁部と胴下半部である。3は口径10cm、回転ナデによって薄

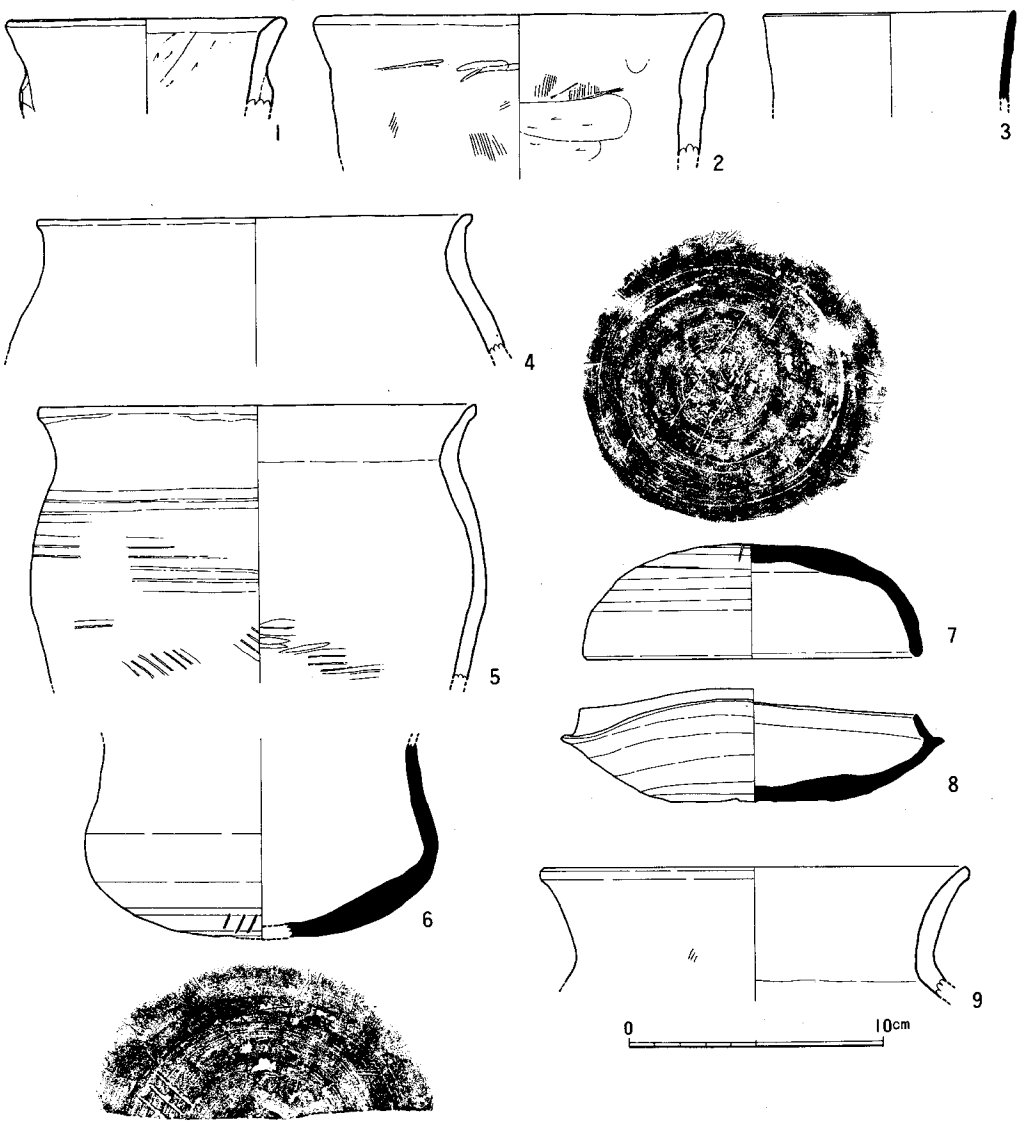


Fig.30　SC15住居址出土遺物実測図（1/3）

く引き伸ばされている。6は長い頸部に平べったい胴部を有する。底部はヘラ削りを施し、3本の短沈線を入れる。3は灰色、6は淡灰色を呈し、共に少量の砂粒を含む。

坏（7・8）　須恵器の坏身と蓋である。7は口径13.4cm、やや厚手の作りである。天井部にはヘラ削りを施し、2本の平行ヘラ描線文を入れる。暗灰色を呈し、胎土に砂粒を少量含むが、焼成堅緻である。8はカマド内から出土したもので、蓋受けの立ち上りは内傾する。灰色を呈し、胎土に砂粒を少量含むが焼成良好で堅緻である。焼け歪みが激しい。底部はヘラ削り。

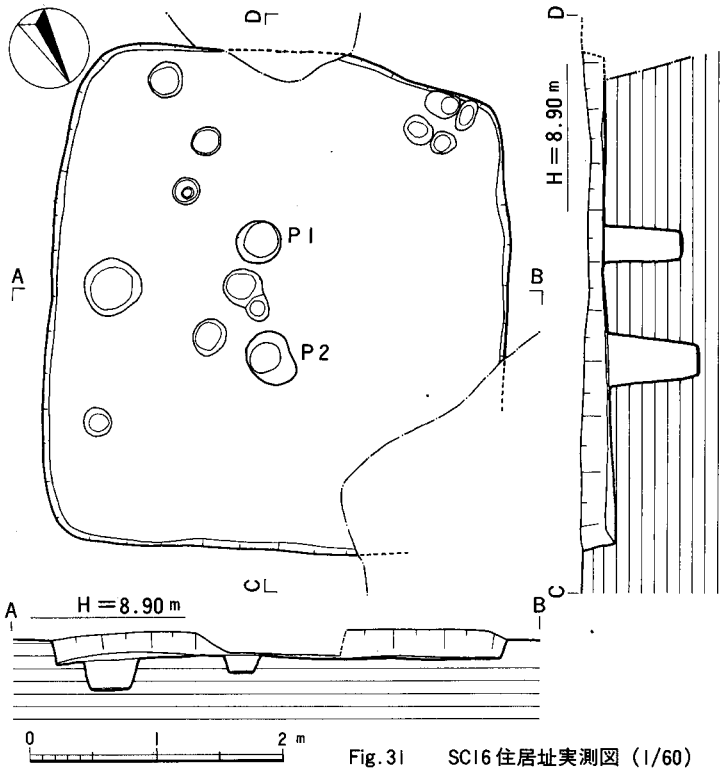


Fig.31　SC16住居址実測図（1/60）

SC16住居址〔Fig.31　PL.3（6）〕

調査区北側中央部に位置する。長軸はN—33°—Eにとり、長辺3m90cm、短辺3m60cmでやや長方形となる。壁高は20cm残存し壁溝

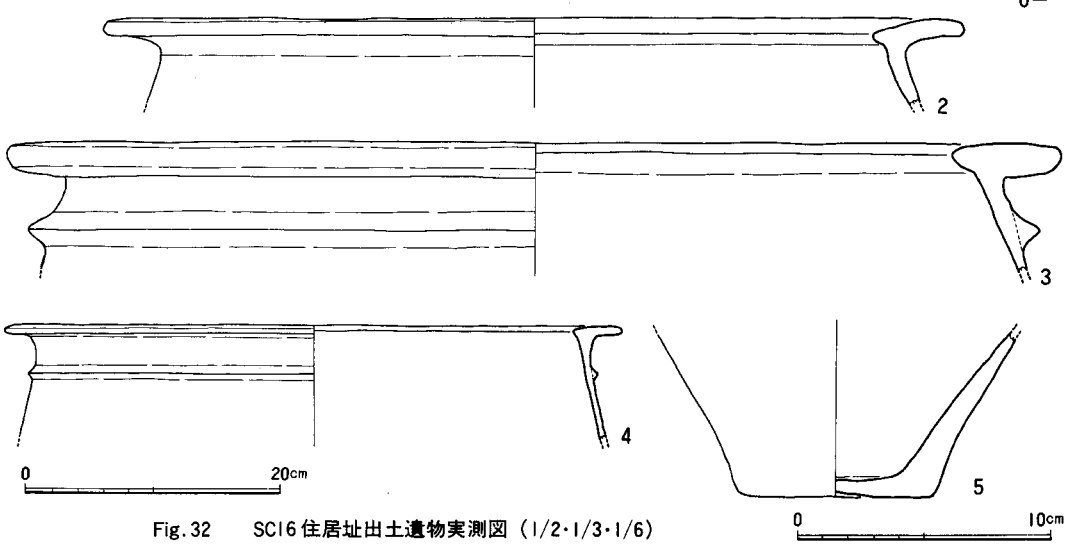


Fig.32　SC16住居址出土遺物実測図（1/2・1/3・1/6）

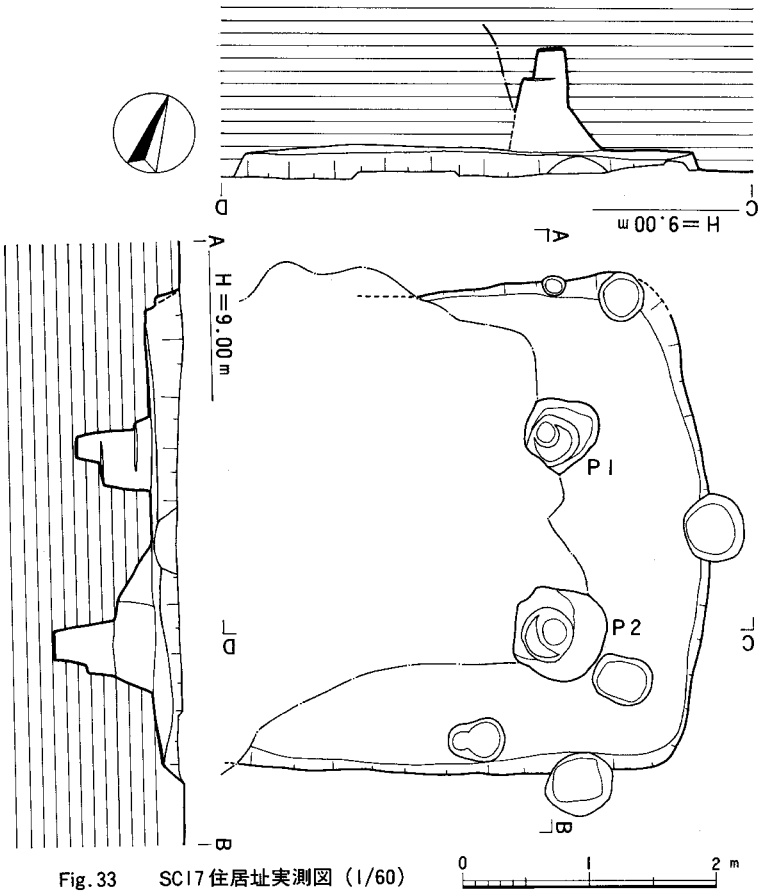


Fig.33　SC17住居址実測図（1/60）

は巡らない。床面中央部に２本の主柱穴があり、間隔は90cmである。

出土遺物（Fig.32）

甕（２～５）　2～4は逆Ｌ字状口縁を有する甕形土器である。3・4は大形で、口縁下に鋭い三角貼付突帯をめぐらす。２は復元外口径34.2cm、３は41.7cm、４は48.5cmを測る。共に褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を混入する。器表は風化剝落して調整は不明。５は底部で、底径8.0cm、茶褐色で胎土に大粒の砂粒を含む。

石製品（1）　灰緑色滑石製の紡錘車である。外径5.2cm、孔径0.7cm、厚さ0.6cmを測る。両面には研磨痕が残る。

SC17住居址〔Fig.33〕

ＳＣ15の北側に位置し、大部分を既設建物解体時の攪乱で破壊されている。ＳＣ15と同様４本柱の竪穴住居址であったと考えられる。南北３ｍ90cm、東西３ｍ70cm以上、壁の立ち上りは20～25cm残存している。壁溝はみられない。Ｐ1とＰ2との距離は1ｍ60cmを測る。柱穴の掘り方は大きくて深い。６世紀後半代の時期である。

出土遺物（Fig.34）

坏（1～３）　須恵器の坏蓋及び坏身である。1は復元口径14.0cm、口縁端部内側に細い沈線

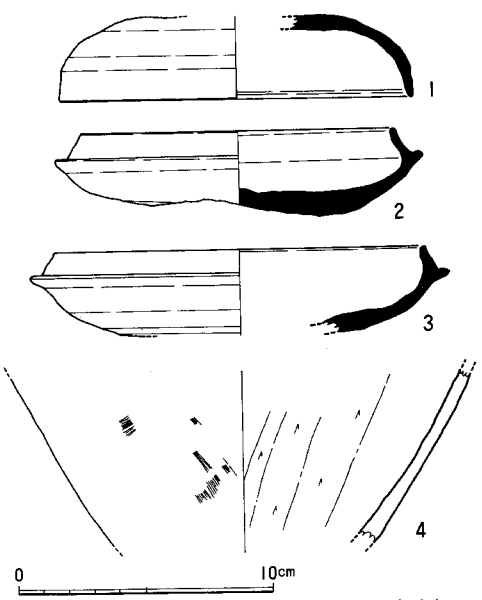


Fig.34　SC17住居址出土遺物実測図（1/3）

がめぐる。2・3は坏身で、蓋受けの立ち上りは低く内傾している。3以外は焼成堅緻である。

甕（4）　土師器甕で明褐色を呈し、胎土に砂粒を少し含む。外面刷毛目、内面ヘラ削り。

SC18住居址〔Fig.35　PL.4（1）〕

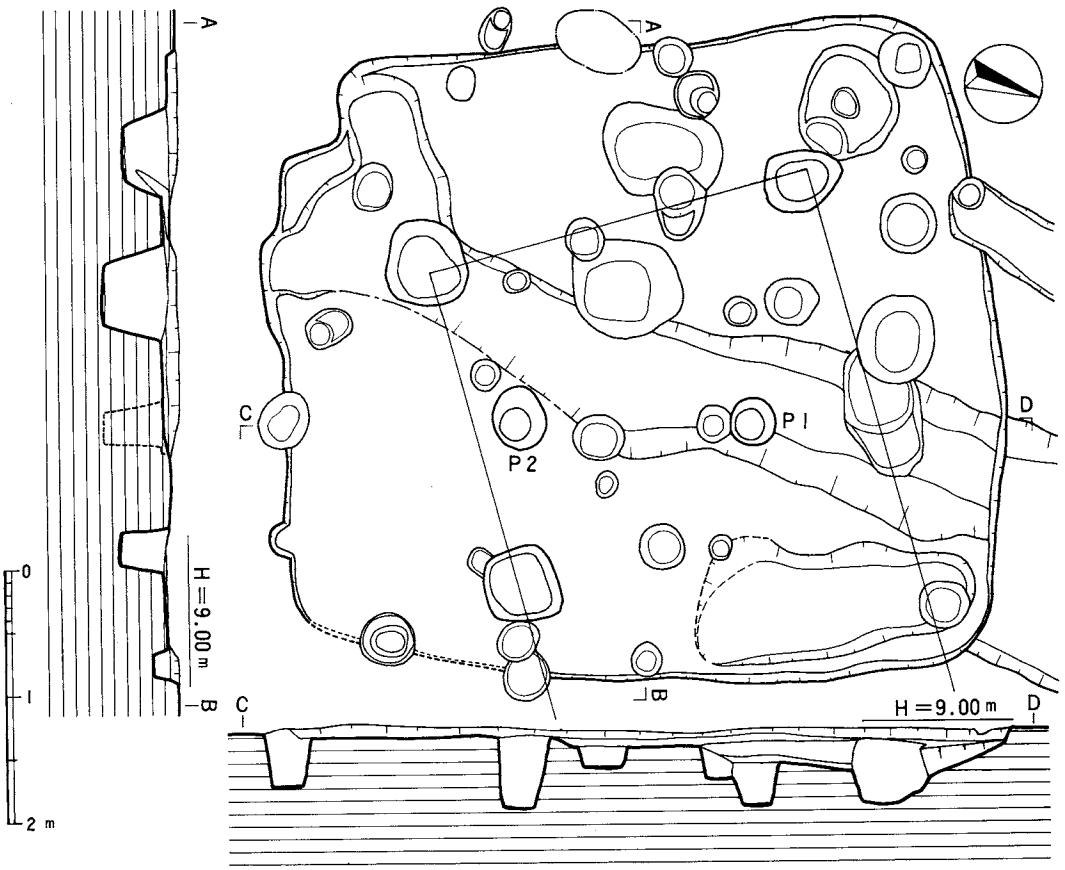


Fig.35　SC18住居址実測図（1/60）

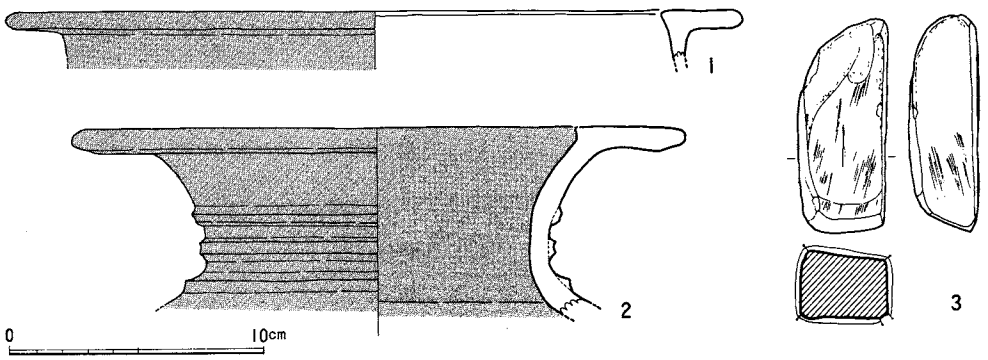


Fig.36　SC18住居址出土遺物実測図（1/3）

調査区北半部の西側に位置する。長軸はN—21°—Wをとり、南北5m65cm、東西5m20cmを測る。壁の残りは悪く僅か10cmしか残存していない。主柱穴はやや東に寄って2箇所検出された。間隔は1m85cmである。住居址のプランを見ると西側が少し張り出しており、張り出し部を除くと主柱穴は中央部に位置することになる。西側は建て増しの可能性がある。SC18はSD06・08に切られており、SB04とも切り合い関係にある。

出土遺物（Fig.36—1～3　Fig.63—8　巻頭図版上）

甕（1）　逆L字状口縁を有し、復元外口径29.2cmを測る。明褐色で胎土精良、外面丹塗り。

壺（2）　鋤先状口縁を持ち、頸部にM字状突帯2条、肩部に三角突帯1条を施す。復元外口径24.3cm、灰褐色を呈し、胎土に砂粒を混入する。内外面とも丹塗りを施す。

石製品（3・8）　3は褐色味を帯びた乳白色砂岩製の砥石である。砥面は3面あるが、断面図右下の調整痕は砥石転用以前のものであり、黒変はないが鋳型の可能性がある。8は肌理の細かな乳白色の砂岩製で、上端部に段状の平坦面を残し、断面はカマボコ形になる。器種は

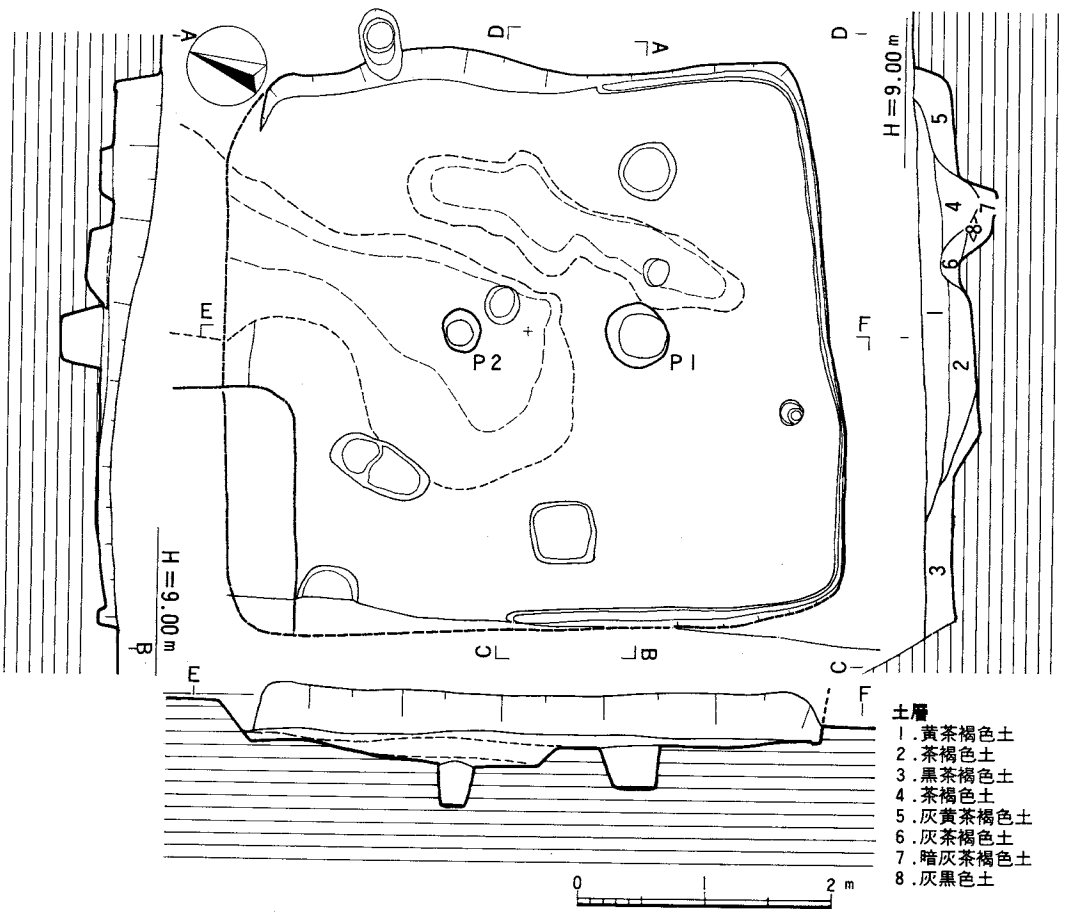


Fig.37　SC19住居址実測図（1/60）

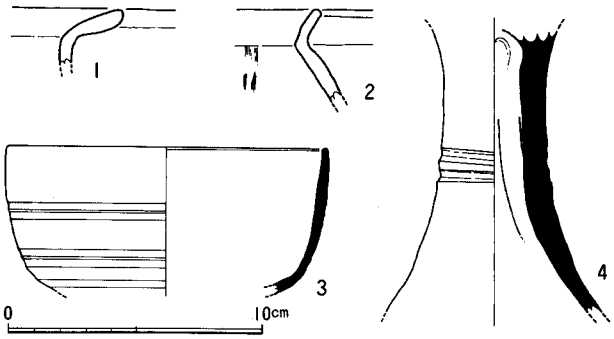


Fig.38　SC19住居址出土遺物実測図（1/3）

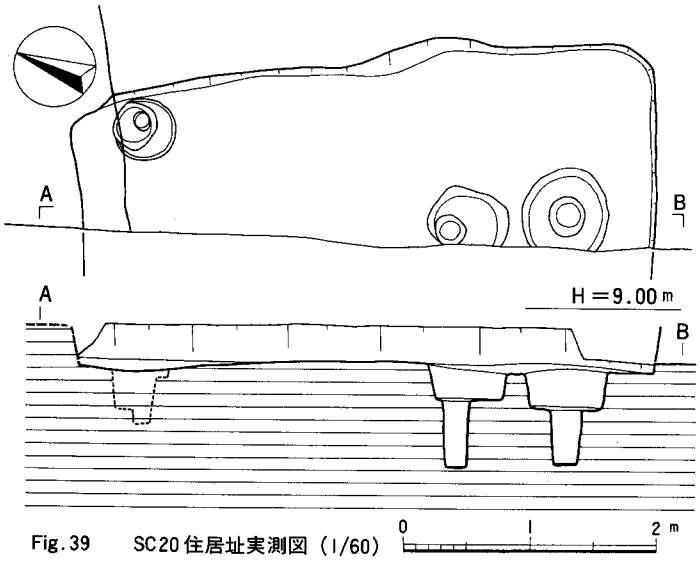


Fig.39　SC20住居址実測図（1/60）

出土遺物（Fig.38）

甕（1・2）　逆L字状口縁を持つ甕で、明褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。弥生中期末。2はくの字状口縁を有する小形の甕で、淡褐色を呈し、胎土に石英砂を含む。弥生後期か。

鉢（3）・**高坏**（4）　SD05からの混入品である。3は口径12.7cm、胴部に2本単位の沈線を入れる。灰黒色で焼成堅緻。4は高坏脚部で、茶褐色を呈し、厚手の粗雑な作りである。

SC20住居址〔Fig.39〕

SC19に切られ、北側に位置する。大部分は調査区外へ伸びている。南北4m50cm、壁高は30cm残存。弥生時代中期後半。

出土遺物（Fig.40—1　Fig.42—2～8）

同定できないが、青銅器鋳型の可能性大である。住居址内のSD08覆土から出土。

SC18出土遺物は弥生時代中期後半代と考えられ、青銅器鋳型参考品が出土している事は注意する必要がある。

SC19住居址〔Fig.37　PL.4（2）〕

SC18の北側で検出された。中央部はSD05・06で大きく切られ、床面まで掘り込まれている。主軸はN—22°—Wで、SC18と同一方向をとる。南北推定4m70cm、東西4m40cm、壁の残りは良く、35cm残存している。南側には壁溝が巡る。床面中央部には2個の主柱穴がみられ、間隔は90cmである。時期は弥生時代中期末。

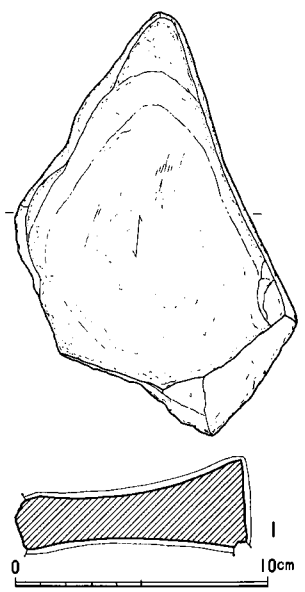


Fig.40　SC20住居址出土遺物実測図（1/3）

石皿（1）　淡褐色砂岩製である。両面とも良く使い込まれ窪んでいる。

壺（2）　未発達な鋤先状口縁を持つ。茶褐色で胎土に砂粒を多く含む。

甕（3～5・7・8）　逆L字状口縁を有する甕形土器で、5・7は大形品である。7は口縁下に三角突帯を付す。8は底部である。

椀（6）　淡褐色で厚手な作り。

SC21住居址〔Fig.41〕

調査区北東隅で検出された。東西4m10cm以上、壁溝が巡り、主柱穴は2個と推察される。弥生中期末。

出土遺物（Fig.42－9～11）

甕（9～11）　9・10は口縁部小破片、11は底径7.0cmの底部である。

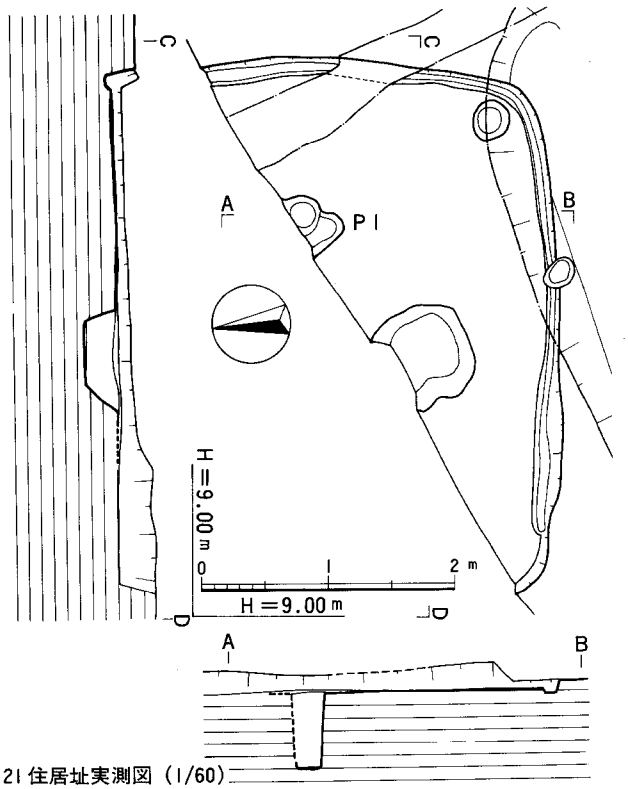


Fig.41　SC21住居址実測図（1/60）

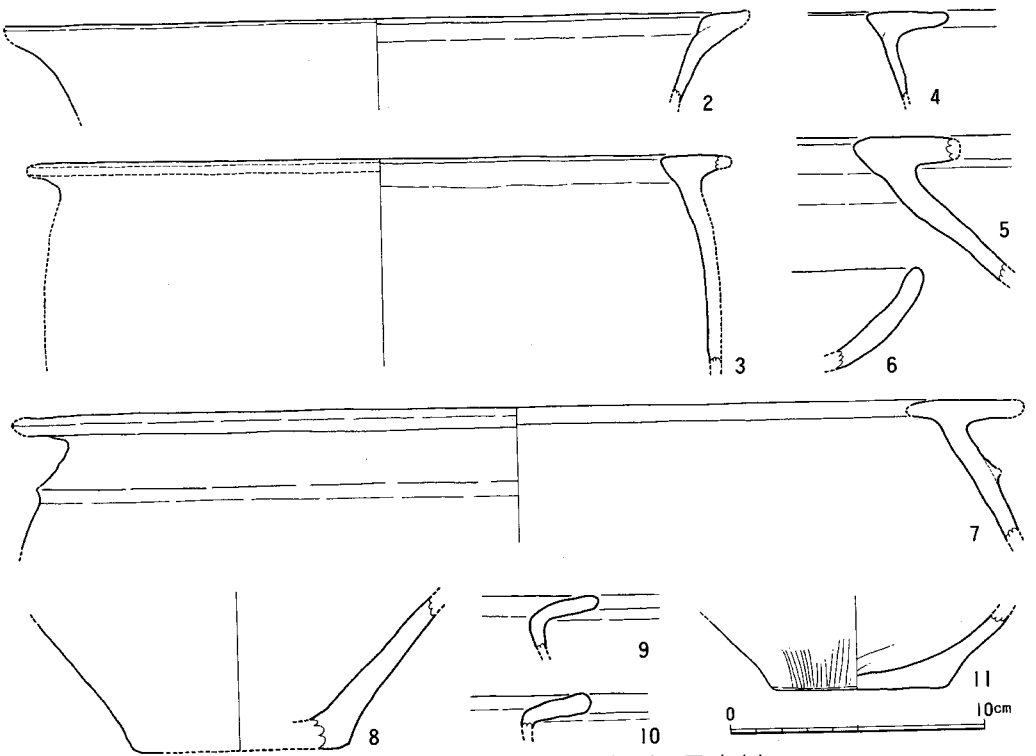


Fig.42　SC20・21住居址出土遺物実測図（1/3）

2　掘立柱建物

調査区全体で総数830のピットを検出したが、その中で掘立柱建物を６棟分確認することができた。しかし、実際にはまだ掘り方のしっかりしたピットが多数存在するので、復元可能な掘立柱建物が他に存在するものと考えられる。ピットの覆土は数種類あり、黒色土、黒褐色土、茶褐色～灰褐色土などが観察された。ピットの覆土は、基本的には各時期の竪穴住居址と同一の土色になる。ピットからの出土遺物は小破片が多く、時期の判定が困難であったが、覆土の色調も時期を決定する参考材量にした。

SB01掘立柱建物〔Fig.43　PL.4（４）〕

調査区南半中央部に位置し、ＳＣ06と切り合い関係にある。主軸はＮ―67°―Ｅにとり、梁行１間、桁行２間の建物になる。柱間の間隔は、梁行が３ｍ10cm、桁行がそれぞれ２ｍ30cmを測る。柱穴の掘り方は60cm前後の方形で、柱痕は観察されなかった。北東隅の１穴は攪乱によって確認できない。覆土は黒色で、実測できる遺物はないが、破片から、弥生時代中期末の時期が考えられ、ＳＣ06よりもやや新しい時期が推察される。

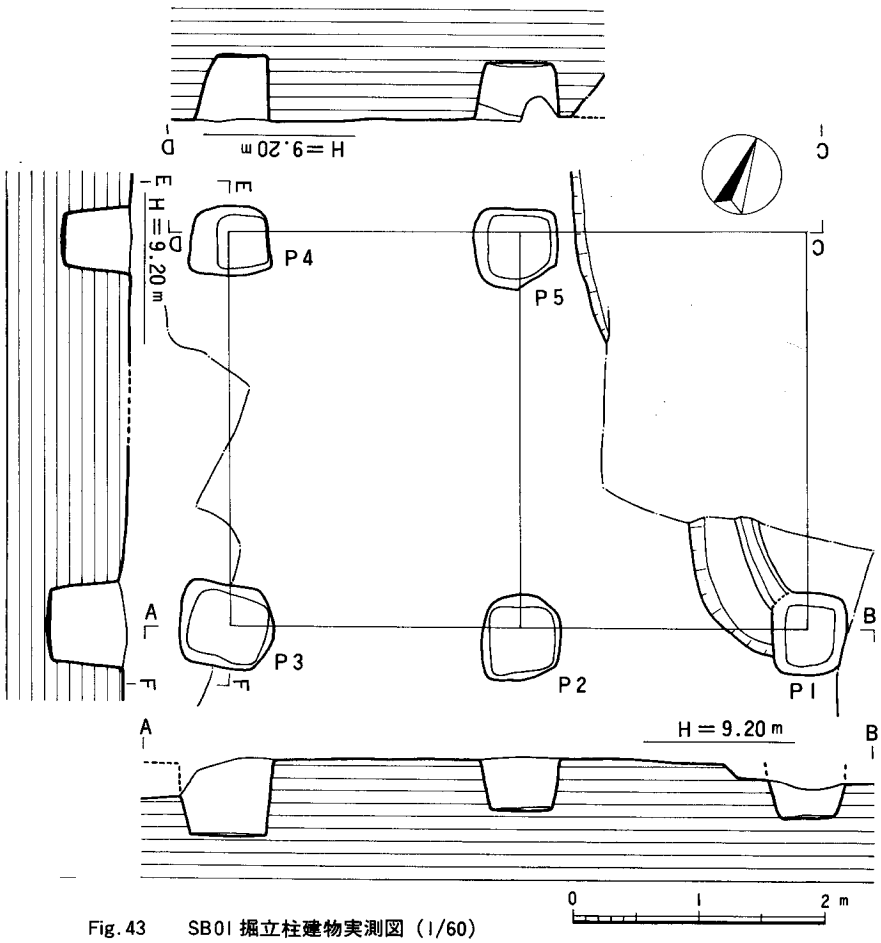


Fig.43　SB01 掘立柱建物実測図（1/60）

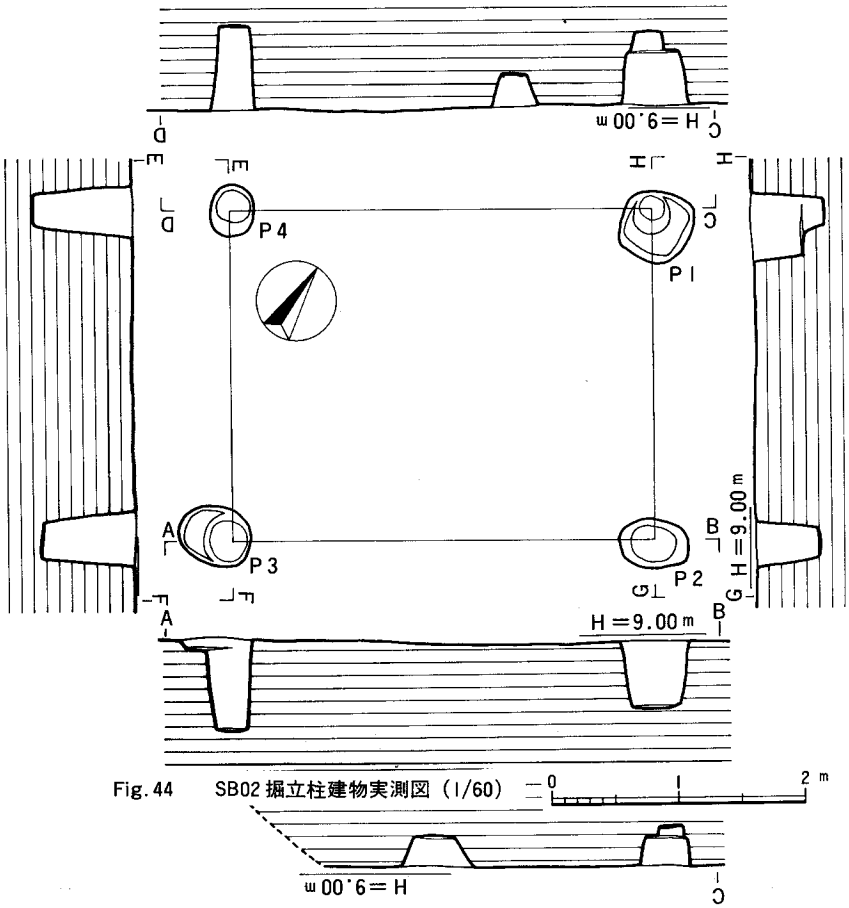


Fig. 44　SB02 掘立柱建物実測図（1/60）

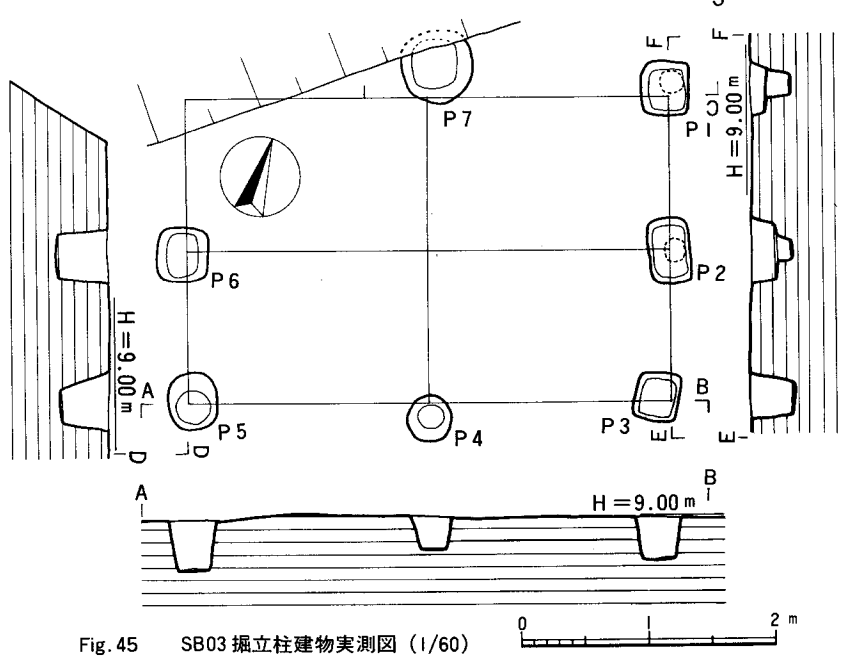


Fig. 45　SB03 掘立柱建物実測図（1/60）

SB02掘立柱建物〔Fig. 44　PL3（3）〕

調査区中央部で検出された、梁行1間桁行1間の建物である。竪穴住居址の主柱穴の可能性もあるが、柱間が梁行2m60cm、桁行3m30cmあり、間隔が大きすぎること、覆土が弥生時代住居址と同一の黒色土を呈することから掘立柱建物の柱穴と考えた。主軸はN—57°—Eである。弥生時代中期後半か。図示できる遺物は殆ど出土していない。柱穴の掘り方は30cm前後から50cm前後である。

SB03掘立柱建物〔Fig.45　PL.3(3)〕

SB02のすぐ北側に位置する。梁行1間、桁行2間規模の建物であるが、梁行は半間ごとに柱穴が認められる。主軸はN—71°—Eにとり、柱間は、梁行がそれぞれ1m20cm間隔で、合計2m40cm、桁行はそれぞれ1m90cm間隔である。柱穴の掘り方は40cm前後の方形が多く、中には長辺が50cmを越えるものもある。15cm強の柱痕が確認された柱穴が存在する。北西隅の柱穴はSD02によって切られており、確認することができなかった。出土遺物は、全て小破片で、図示できるものはないが、弥生時代中期末の時期が想定できる。覆土は弥生時代住居址と同様黒色土である。

SB04掘立柱建物〔Fig.46　PL.4　(1)〕

調査区北半部の西側に位置し、SC18と切り合い関係にある。当初SC18のプラン検出時には確認できなかったが、床面まで掘り下げた段階で柱穴群を確認し得た。黒色土の覆土を有し、SC18よりもやや古い時期が考えられる。建物は梁行1間、桁行2間で、主軸をN—54°—Eに

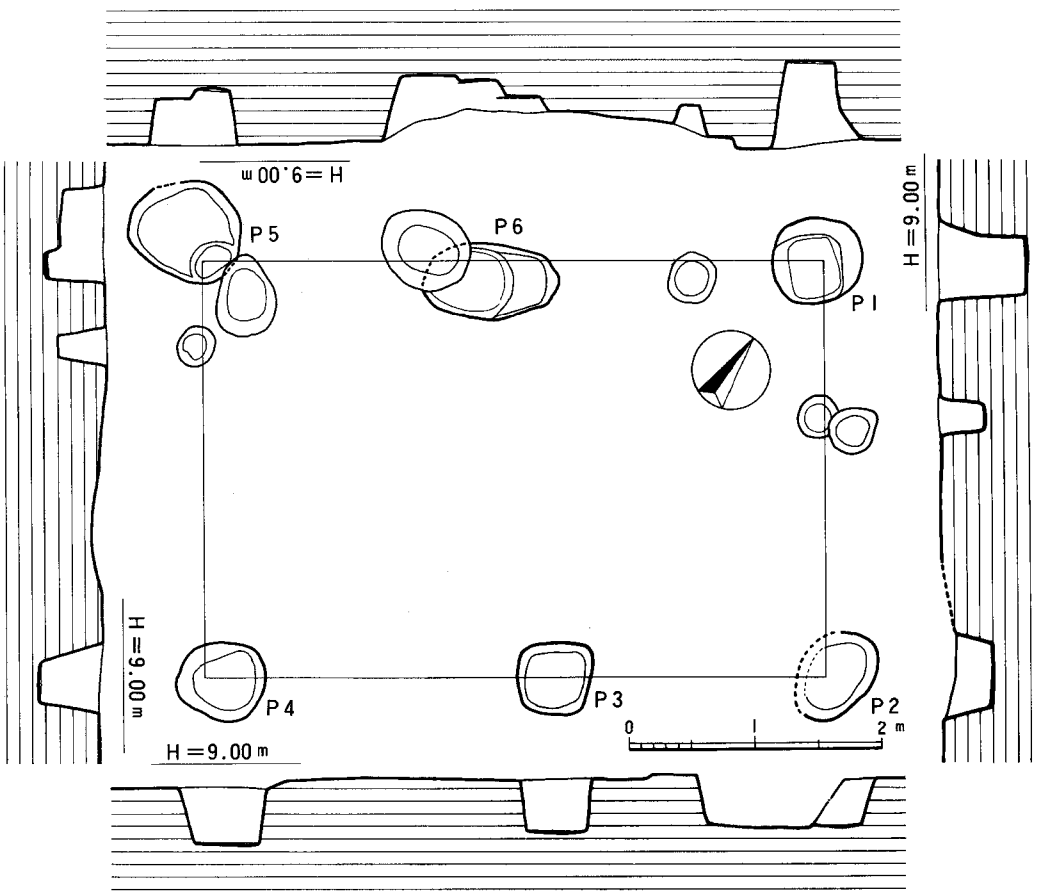


Fig.46　SB04掘立柱建物実測図(1/60)

とる。柱間の間隔は梁行が３ｍ30cm、桁行は合計４ｍ90cmになるが、間隔がそれぞれ異なっており、Ｐ2―Ｐ3、Ｐ5―Ｐ6が２ｍ20cm、Ｐ3―Ｐ4、Ｐ6―Ｐ1が２ｍ70cmとなっている。柱穴の掘り方は60～70cmでやや大形である。弥生時代中期後半と推察される。

SB05掘立柱建物〔Fig.47　PL.4（５）〕

調査区北半部中央で検出された。梁行２間、桁行３間規模の建物であるが、梁行部分には半間ごとに柱穴が確認され、不規則に並んでいる。梁行総長４ｍ85cm～４ｍ90cm、桁行総長６ｍ05cmを測る。柱間の間隔は、Ｐ1―Ｐ2が１ｍ90cm、Ｐ2―Ｐ3が１ｍ40cm、Ｐ3―Ｐ4は80cm、Ｐ4―Ｐ5は75cmで合せて1ｍ55cm、Ｐ5―Ｐ6は1ｍ25cmを測る。Ｐ6からＰ7までは大きな攪乱が這入り柱穴を確認することができなかった。西側梁行は、Ｐ7―Ｐ8が1ｍ50cm、Ｐ8―Ｐ9とＰ10―

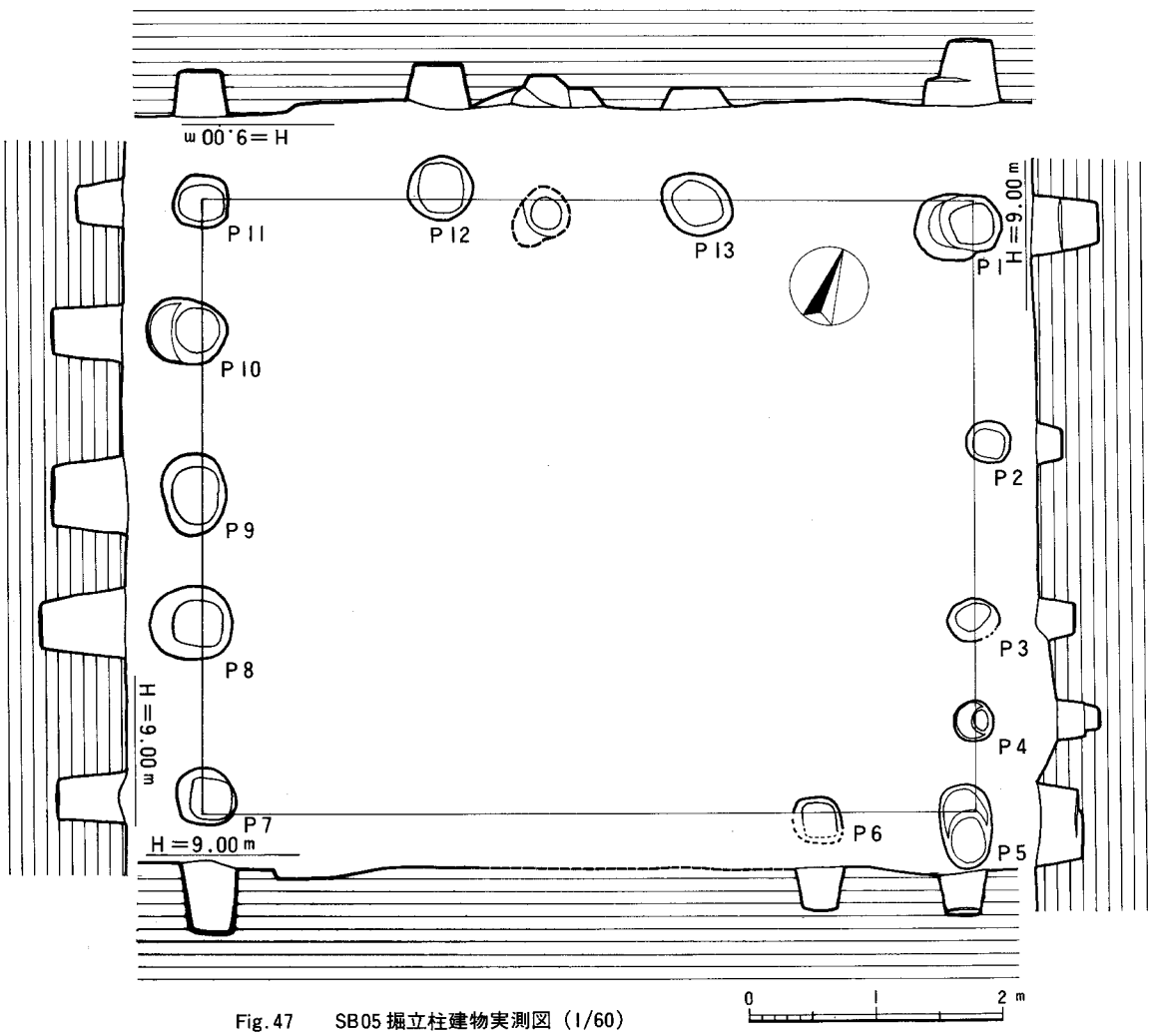


Fig.47　SB05掘立柱建物実測図（1/60）

P11が共に1m05cm、P9—P10が1m30cmとなる。北側桁行は割合規則的に配列され、P11—P12が1m90cm、P12—P13が2.0m、P13—P1が2m15cmを測る。柱穴の掘り方は、北側及び西側が大きくしっかりしており、東側は貧弱である。建物の主軸はN—70°—Eをとる。遺物の出土は小破片で非常に少なく、時期決定が難かしいが、古墳時代遺構の覆土とは異なり、黒色土を呈していることから、弥生時代に属する掘立柱建物の可能性がある。

SB06掘立柱建物

〔Fig.48〕

調査区北西隅に位置する。遺構は未調査区へ広がっており、全体を把握することはできなかったが、南北棟で梁行2間、桁行3間かそれ以上のやや大形の建物を想定することができる。

確認し得た部分は東側及び南側の柱穴で、P1—P2が3m40cm、P2—P3が3m20cm、P3—P4が2m90cmを測り、スパンが長い。柱穴の掘り方も大きくて径80cmを測ることができる。主軸はN—22°—Wの方向をとる。時期は、出土遺物が小破片で決め難いが、SC20を切っており、黒色の覆土を有することなどから、弥生時代中期末と考えられる。

以上、6棟の掘立柱建物は、弥生時代中期後半から末葉に属するとみられ、SB02、04が時期的に古い。SB05以外は倉庫建築の可能性が大きい。

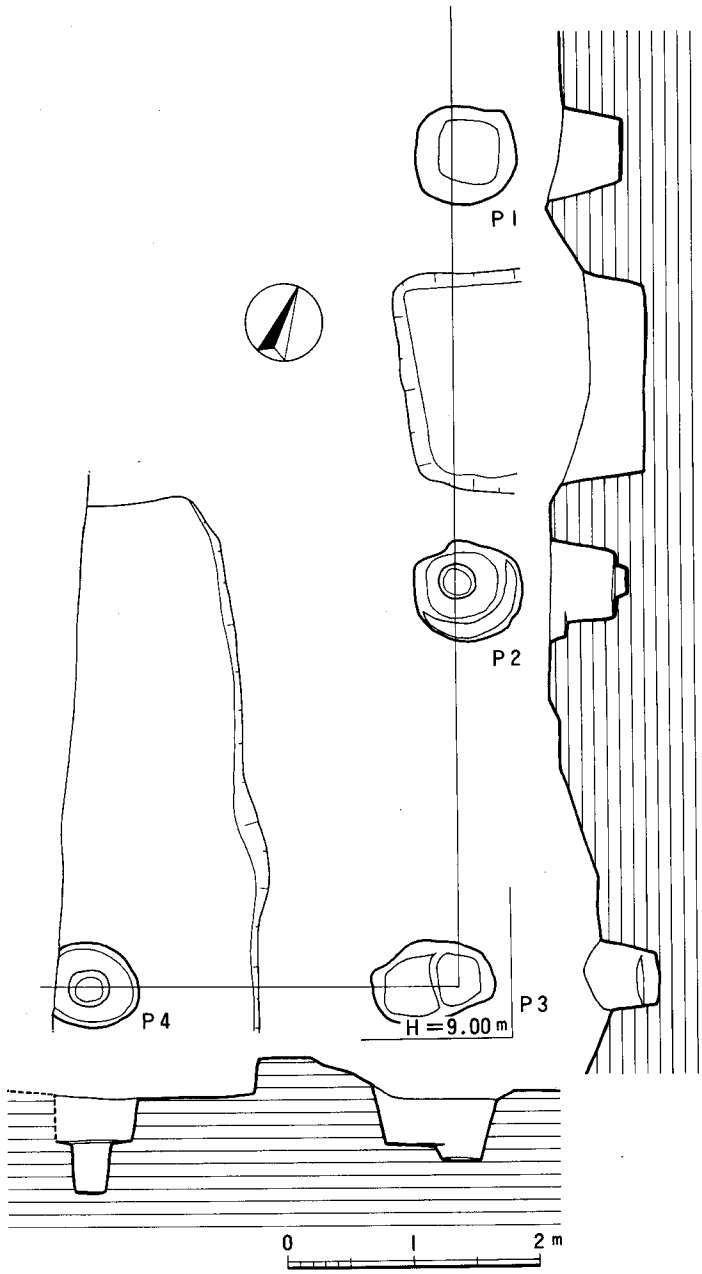


Fig.48　SB06掘立柱建物実測図（1/60）

3　井戸址

調査区全体から4基の井戸址を検出した。住居遺構の多さの割には井戸址が少なく、散発的に分布しているに過ぎない。比恵遺跡の状況から考えると、別地点に集中する可能性がある。

SE01井戸址〔Fig.49　PL.4（3）〕

調査区南半部西側で検出された。大形の井戸址で、上面はほぼ円形に近く、径3m15cmを測る。深さは遺構確認面から－3m50cmあり、黄白色の八女ロームまで掘り下げられている。鳥栖ロームから八女ロームに変化する位置は、標高6m70cm前後である。この部分が大きく抉れており、抉れは全体に広がっている。井筒は確認されず、素掘りの井戸である。底径1.0mで、調査時には湧水はみられなかった。遺物は埋土中位から下部にかけて完形に近い形の土師器や須恵器が多量に出土した。

出土遺物（Fig.51・52）

坏（1～11）　土師器坏で、口径12.6cm～15.0cm、器高3.2cm～4.6cmを測る。口径は13.0cm前後、器高は4.0cm前後が最も多い。3・6は口径がやや大きく15.0cmを測る。色調は黄白色から褐色まで細かく変化している。胎土には少量砂粒を含む物もあるが、殆ど精良である。底面は全てヘラ切りで、1・2・4・8には板目痕が残る。体部はナデ調整で、半数には整形時の稜線が残る。11は口径12.7cm、底径7.7cm、器高4.6cmを測る。淡褐色で精良な胎土を持ち、底面には板目痕が観察される。内面には径2.4cmの円内に「**寺**」とヘラ描きされた文字が認められ、大井戸との関係で注目される。

皿（12～14）　土師器皿である。口径13.0cm～14.1cm、器高2.0cm～2.3cmの法量を有する。淡褐色から褐色を呈し、胎土は精良である。底部にはヘラ切りのあとがみられる。

椀（15～17）　土師器高台付の椀で、口径14.4cm～17.0cm、器高6.6cm～7.0cmを測る。明褐色から褐色の色調を有し、胎土は共に精

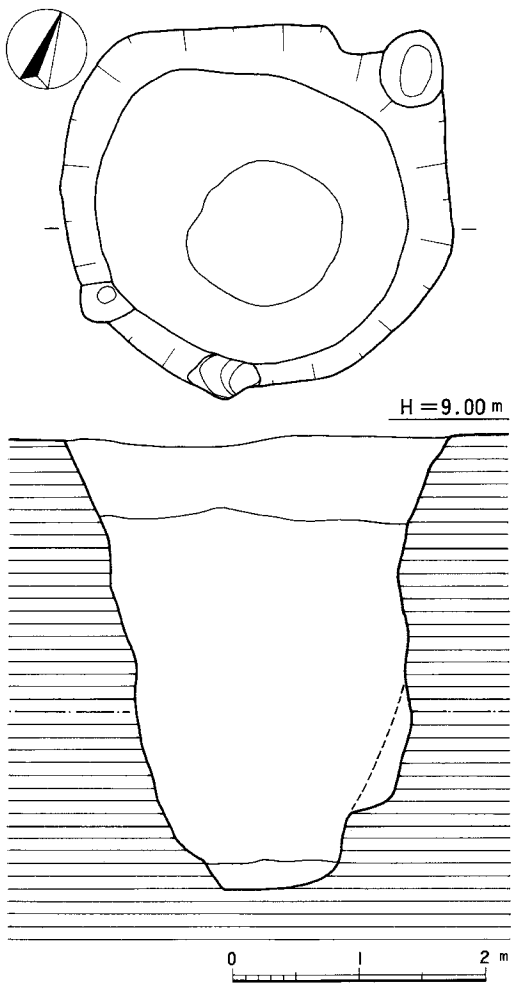


Fig.49　SE01井戸址実測図（1/60）

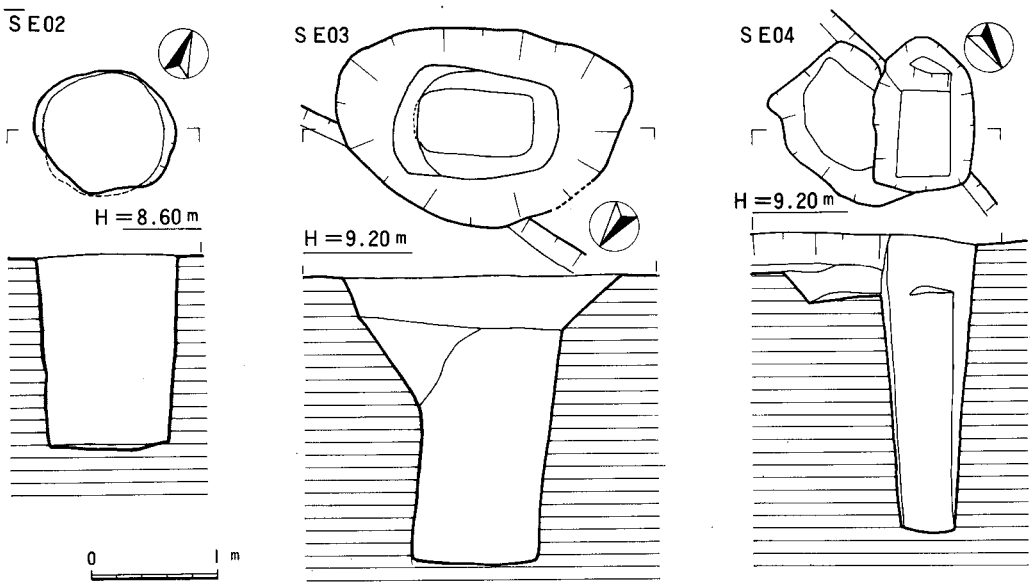


Fig.50　SE02・03・04井戸址実測図（1/60）

良である。高台は15と17が八の字状に開き、16は垂直に貼り付ける。16は他に比べ口径が17.0cmと大きい。器表は荒れて剝落しており、焼成が悪いのか、埋土の関係によるものなのか判然としない。SE01出土の他の土師器も器表が荒れているものが多い。

短頸壺（18・19）　土師器で、18は口径8.7cm、底径5.8cm、器高10.1cmを測る。平底で口縁部はやや外反する。淡褐色を呈し、石英砂を少量含む。外面は横ナデ、内面は指押えが観察される。19は胴部が扁平になり、底径が大きくなる。淡褐色を呈し、胎土は精良である。

甕（20～26）　20は須恵器の甕である。外反する口縁部を有し、端部は平坦に仕上げる。外面には細い沈線をめぐらす。胴部最大径はやや上位に位置し、厚手の作りである。口径16.4cm胴径27.6cm、器高31.1cmを測る。暗灰色を呈し、胎土に砂粒を少量含むが、焼成良好である。外面は粗い平行タタキ、内面は格子目文がみられ、格子目のあて具は興味深い。

21～26は土師器の甕である。くの字形に外反する口縁部を持ち、張りの少ない胴部へ移行する。外面は刷毛目、内面はヘラ削りが施される。22は丸平底の鉢形で内外共刷毛目調整がみられ、把手が付く。口径18.0cm、器高11.1cmで砂粒を多く含む胎土を有し、赤褐色を呈す。その他は口径20.6cm～30.8cm、器高15.8cm～25.6cm、褐色～暗褐色を呈し、胎土に1～2mmの石英・長石砂を多く含む。底部以外はカーボンが厚く付着する。

瓦（27～30）　上記の遺物と共伴して、丸瓦と平瓦が出土している。27は丸瓦で、厚さ3.5cm、灰褐色を呈し内面に布目痕が残る。外面の調整は器面が荒れており不明。胎土に石英・長石砂を多量に含む。28は須恵質の平瓦である。厚さ2.5cm、内面に布目、外面に縄目タタキが

みられる。灰色を呈し、胎土は精良で焼成堅緻である。29・30は縄目タタキを有する平瓦である。淡褐色～褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を混入する。内面は擦痕及び布目痕がみられる。

ＳＥ01出土遺物は各器種の特徴から、８世紀後半～９世紀初頭に位置づけられる。

ＳＥ02井戸址〔Fig.50〕

磁北に伸びるＳＤ01溝の底から検出された、弥生時代中期末の井戸址である。上面はやや楕円形を呈し、長径1ｍ10cmを測る。深さは確認面下－1ｍ55cmで、黄白色の八女ロームまで達している。底径は95cmでほぼ円形をなす。遺物は壺・甕・器台・紡錘車などが出土している。

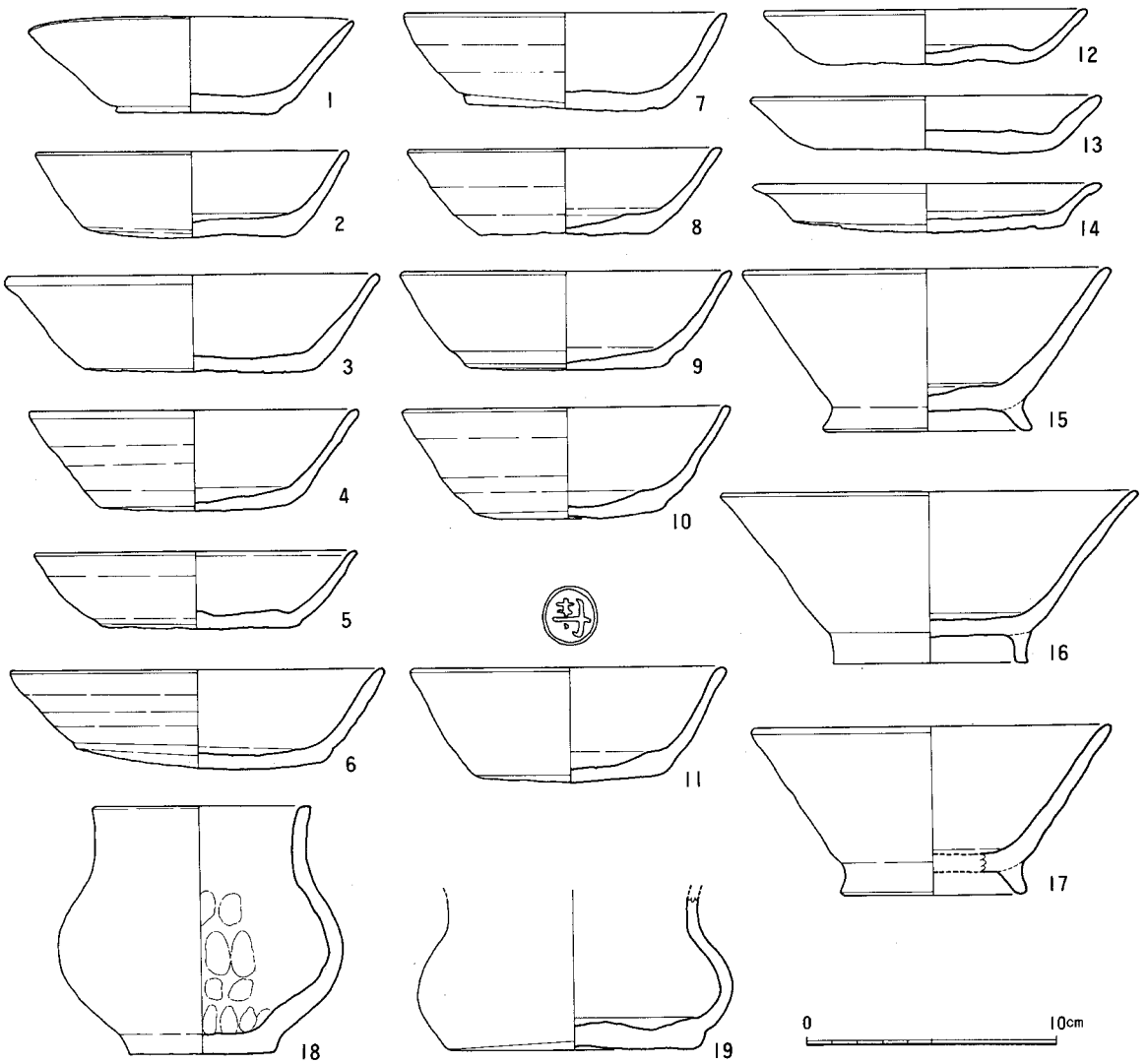
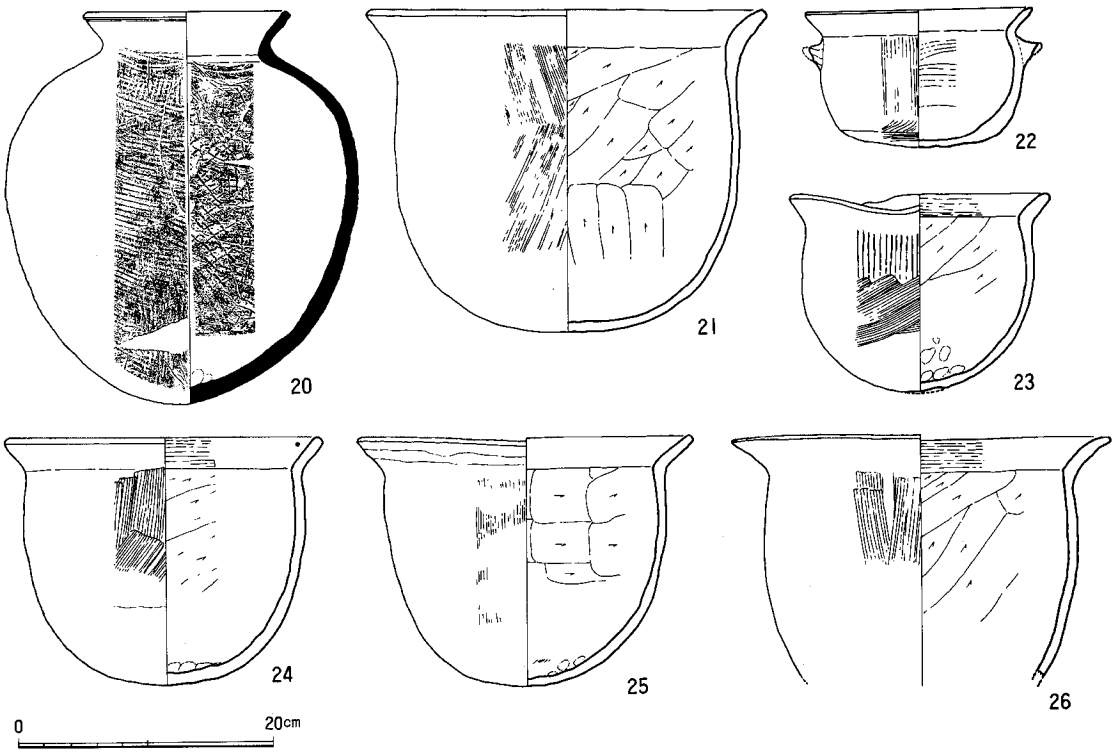


Fig. 51　ＳＥ01井戸址出土遺物実測図(1)（1/3）



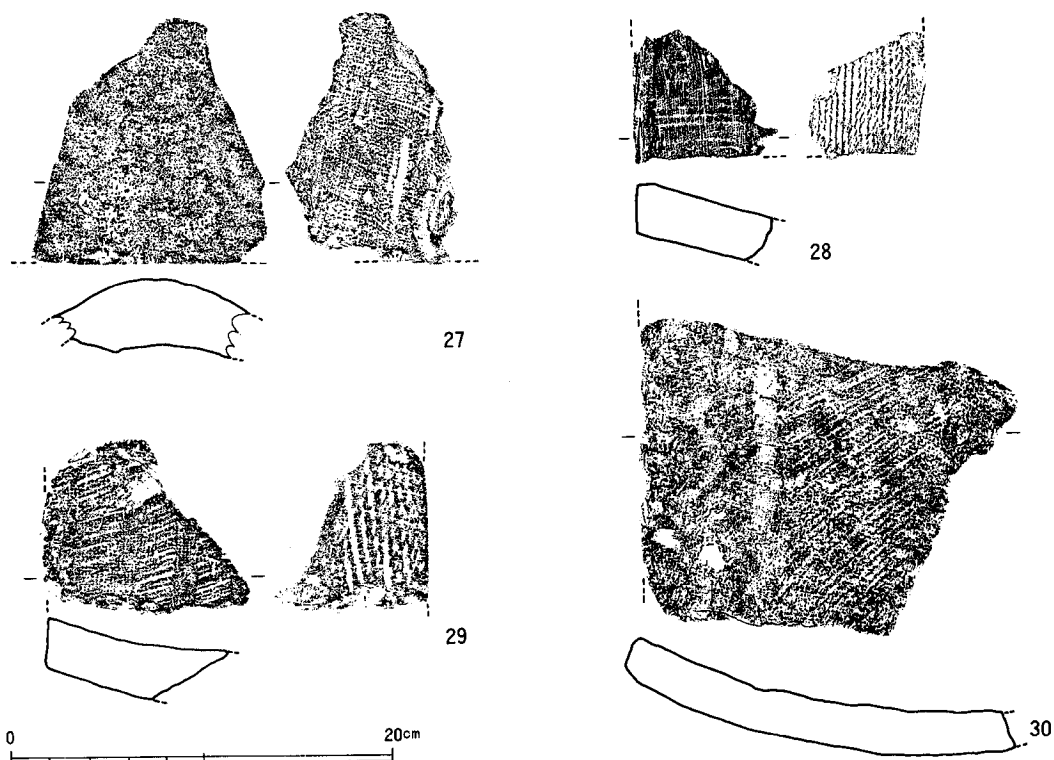


Fig. 52　SE 01井戸址出土遺物実測図(2)（1/4・1/6）

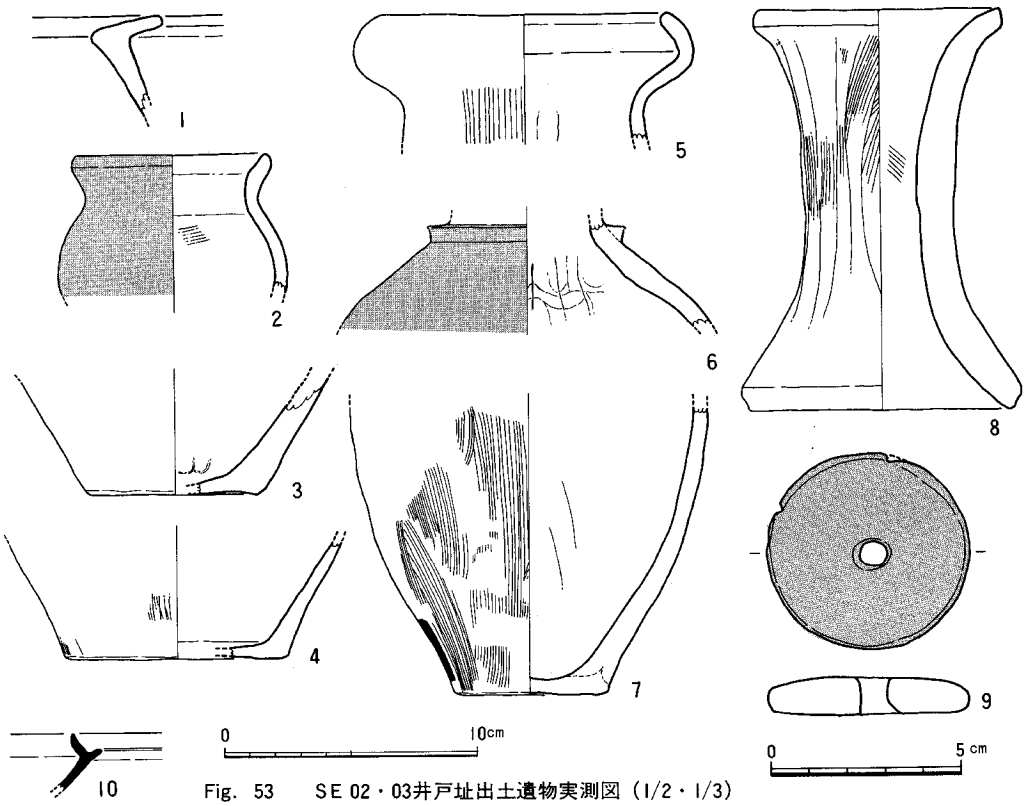


Fig. 53　SE 02・03井戸址出土遺物実測図（1/2・1/3）

出土遺物（Fig.53－1～9）

壺（2・5・6）　2は小形の壺で復元口径7.5cm、6は肩部に三角突帯を持つ壺の破片で共に褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。外面丹塗り。5は推定口径11.0cmの袋状口縁壺である。

甕（1・3・4・7）　1は逆L字状口縁を持つ甕で、上端部がやや内傾する。明褐色を呈し砂粒を幾分含む。3・4・7は底部で、3は底面が少し窪む。灰褐色から褐色を呈し、胎土に石英・長石砂を含む。4・7の外面には刷毛目調整が観察される。

器台（8）　器高15.9cmを測り、やや下端が幅広い。淡褐色を呈し外面には稜と刷毛目あり。

紡錘車（9）　径5.2cm、厚さ1.0cmの土製である。淡褐色で精良な胎土を持ち、丹彩される。

SE03井戸址〔Fig.50　PL.3（5）〕

SC15を切って南側に位置する。東西2m30cm、南北1m55cmの楕円形で、底面は95cm×50cmの長方形となる。遺物は小破片が多く、図化できるものは須恵器坏身片1点のみである。

出土遺物（Fig.53－10）

坏（10）　須恵器坏身片で、蓋受けの立ち上りは短く、内傾する。6世紀末～7世紀初頭か。

SE04井戸址〔Fig.50　PL.3（5）〕

SC15の西壁及びカマドの下から検出された。覆土は黒色で、弥生時代中期と考えられる。

4 土 壙

調査区全体で13基の土壙を検出した。

SK01土壙〔付図1〕

調査区南端部東側に位置する。浅いL字状の溝状を呈す。遺物が少なく時期不詳。

SK02土壙〔Fig.54〕

SK01の南側で確認され、楕円形を呈する。古墳時代後期の須恵器片が出土。

SK03土壙〔付図1〕

SK01の北側に位置する。竪穴住居址の可能性もあるが、底面が皿状に窪む。遺物が少なく、時期がはっきりしない。

SK04土壙〔Fig.54〕

調査区南半部西側で検出された。大部分が未調査区へ伸びており、全体が分らない。竪穴住居址の可能性があるが、底面が段状に深くなっているので土壙とした。出土した土師器甕から古墳時代後期と考えられる。

SK05土壙〔付図1〕

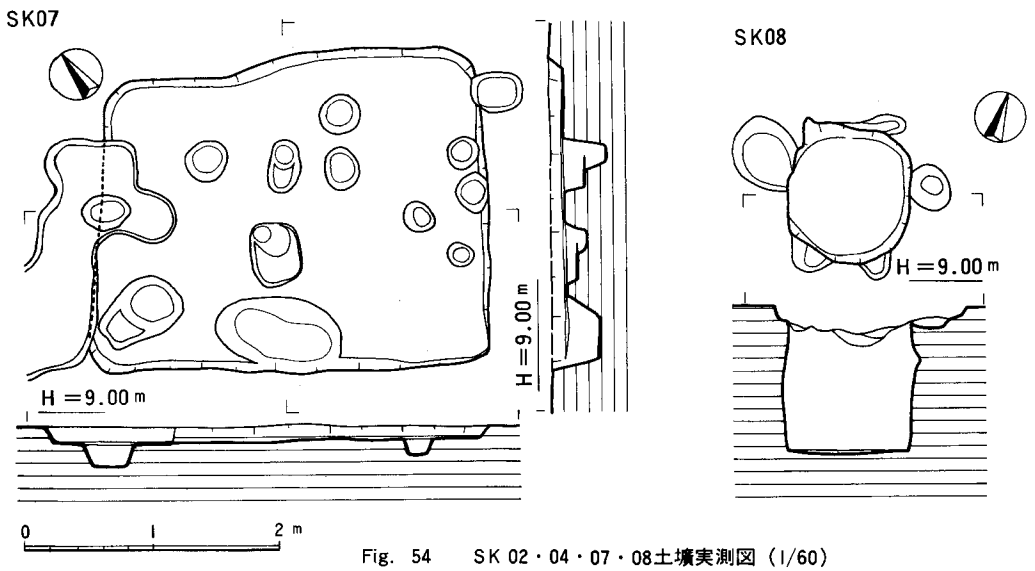


Fig. 54 SK 02・04・07・08土壙実測図（1/60）

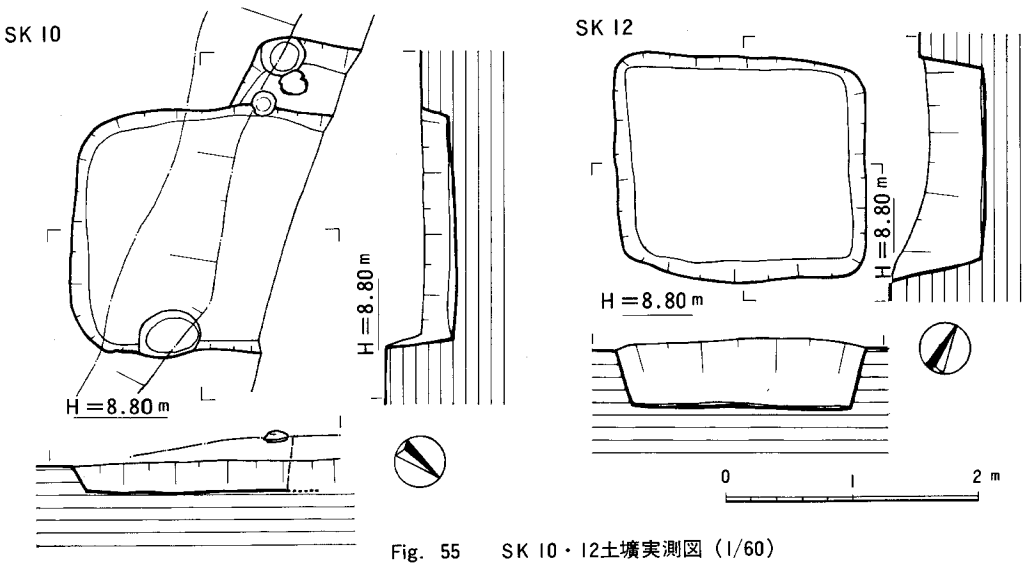


Fig. 55　SK 10・12土壙実測図（1/60）

調査区南半部中央で検出。長径1m44cm、短径80cmの楕円形で、底は２段掘りで－１m30cm。

出土遺物（Fig.56－１～３）

皿（１～３）　土師皿で赤色粒子を含む胎土を持つ。淡褐色を呈し、１はヘラ切り、２・３は糸切り底となる。底面には全て板目痕がみられる。その他、瓦質土器や青磁も出土している。

SK06土壙〔付図１〕

調査区北端部で出土。長楕円形で南は攪乱、北はSD10で切られている。６世紀後半代。

出土遺物（Fig.56－４～７）

甑（４）　外口径24.6cm、黒褐色を呈し、胎土に石英砂を含む。外面篦ナデ、内面ヘラ削り。

甕（５・６）　５は外口径18.7cm、口縁部は外反し端部は肥厚する。明褐色で胎土に石英砂を含む。６は短く外反する口縁部を有し、口径18.7cm、褐色を呈し、胎土に砂粒を少し含む。

坏蓋（７）　やや厚手作りの須恵器である。大粒の砂粒を少量含む。灰白色を呈し焼成不良。

SK07土壙〔Fig.54〕

調査区北半部中央に位置する。長辺３m10cm、短辺２m60cmの長方形である。壁の立ち上りは約10cm残存している。住居址にしては小さ過ぎるので土壙とした。弥生時代中期末。

出土遺物（Fig.56－８）

甕（８）　淡褐色を呈し、胎土に石英砂を多く含む。外面は刷毛目、内面は指押え調整。

SK08土壙〔Fig.54〕

SB05の北側に位置する。上面は南北に長い溝状を呈しており、その下に径1.0mの円筒状の掘り込みが認められた。北側は攪乱で破壊されているが、上面はSD09と接続するか。

出土遺物（Fig.56－９・11・12）

坏（9） 須恵器坏身の破片である。青灰色を呈し、細砂を含むが焼成良好。6世紀後半。

手捏ね土器（11・12） 褐色～黄褐色を呈し、精良な胎土を有する。親指を挿入して整形。

SK09土壙〔付図1〕

調査区北西隅で検出された。大部分が未調区に広がり詳細は不明。弥生中期末の遺物が出土。

SK10土壙〔Fig.55〕

調査区北端部に広がり、SD10によって切られる。長方形を呈し、上面から須恵器坏が出土。

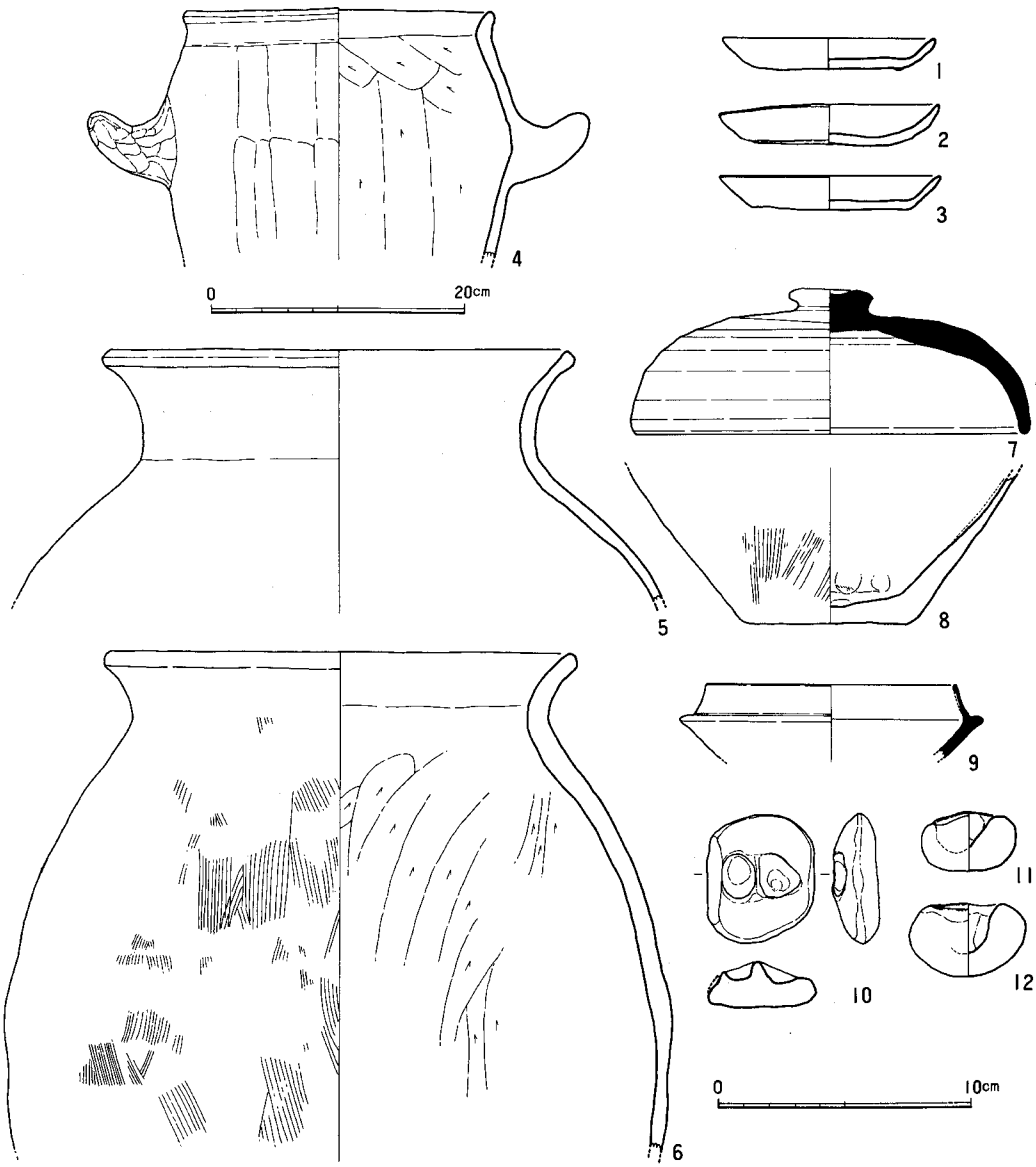


Fig. 56 SK 05・06・07・08土壙出土遺物実測図（1/3・1/6）

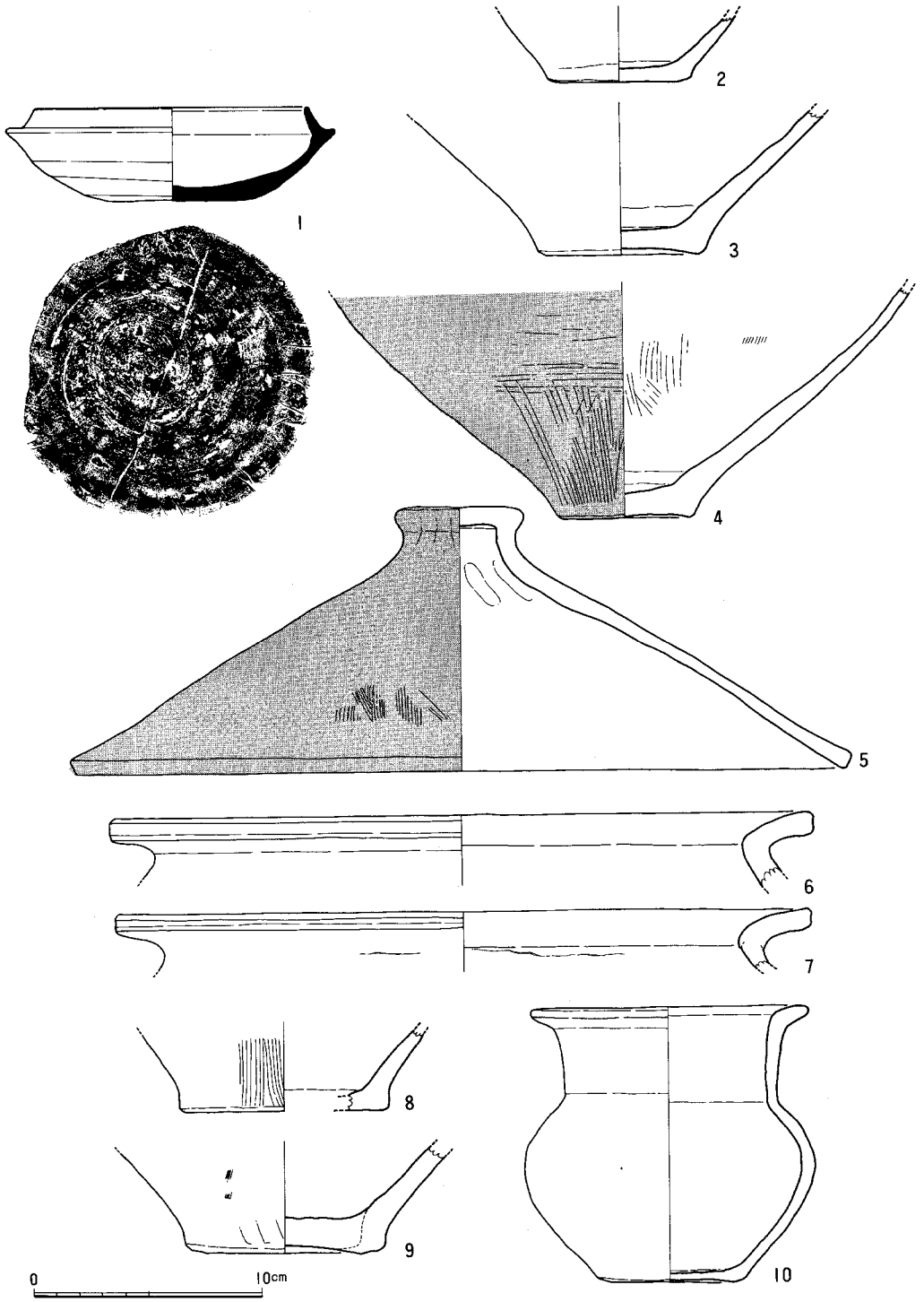


Fig. 57　SK 10・11・12・13土壙、SP 532ピット出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.57－1）

坏（1）　暗灰色を呈し、胎土に石英・長石砂を混入する。体部1/3はヘラ削り。6世紀後半。

SK11土壙（付図1）

SD10に切られ、一部しか残存していなかった。弥生時代中期中葉から後半代の遺物が出土。

出土遺物（Fig.57－2～5）

甕（2～4）　明褐色から褐色を呈し、2・3は胎土に石英・長石砂を含む。4は非常に精良な胎土を持ち、外面は丹塗り篦研磨される。2は縦刷毛目、3は調整不明。3・4は窪み底。

蓋（5）　4と全く同一の胎土を有し、淡褐色を呈する。外面は丹塗りで細かな刷毛目調整。

SK12土壙（Fig.55）

調査区北側に位置し、SD10に切られる。長辺2.0m、短辺1m80cm、深さ75cmを測る。

出土遺物（Fig.57－6・8）

甕（6・8）　6は逆L字状口縁に近く、口縁下に三角突帯が付く。8は底部で刷毛目調整。

SK13土壙（付図1）

調査区北端部で検出され、未調査区に広がり、詳細は不明。SK12同様、弥生時代中期末か。

出土遺物（Fig.57－7・9）

甕（7・9）　共に明褐色で、7は逆L字状口縁に近く、強く外反する。9は窪み底の底部。

SP532（付図1　Fig.57－10）　SC15の南西隅に位置。灰褐色の弥生中期末の小壺出土。

5　溝

SD01溝〔付図1　PL.4（6）〕

調査区東南部で検出された幅2m30cm前後、深さ70cmの逆台形状を呈する溝である。方向は

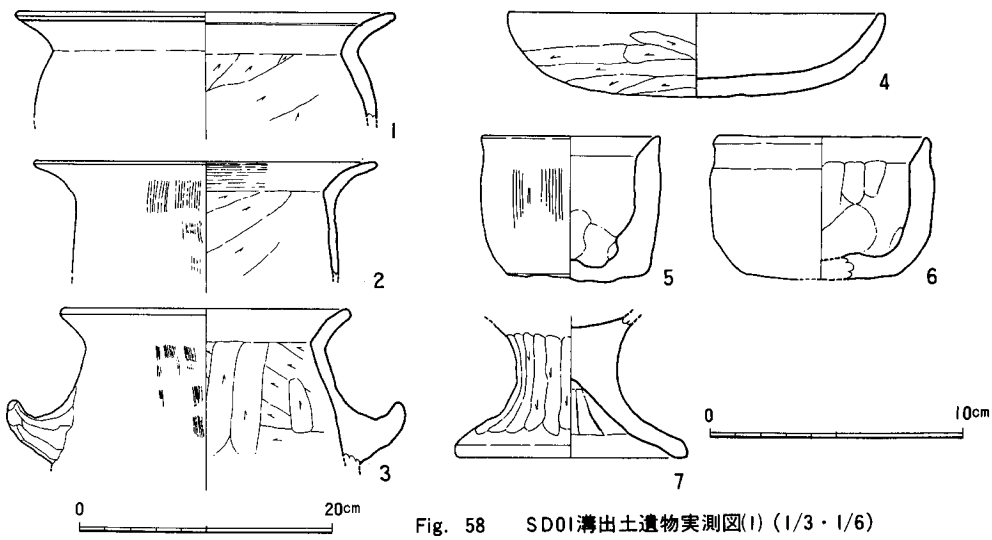


Fig. 58　SD01溝出土遺物実測図(1)（1/3・1/6）

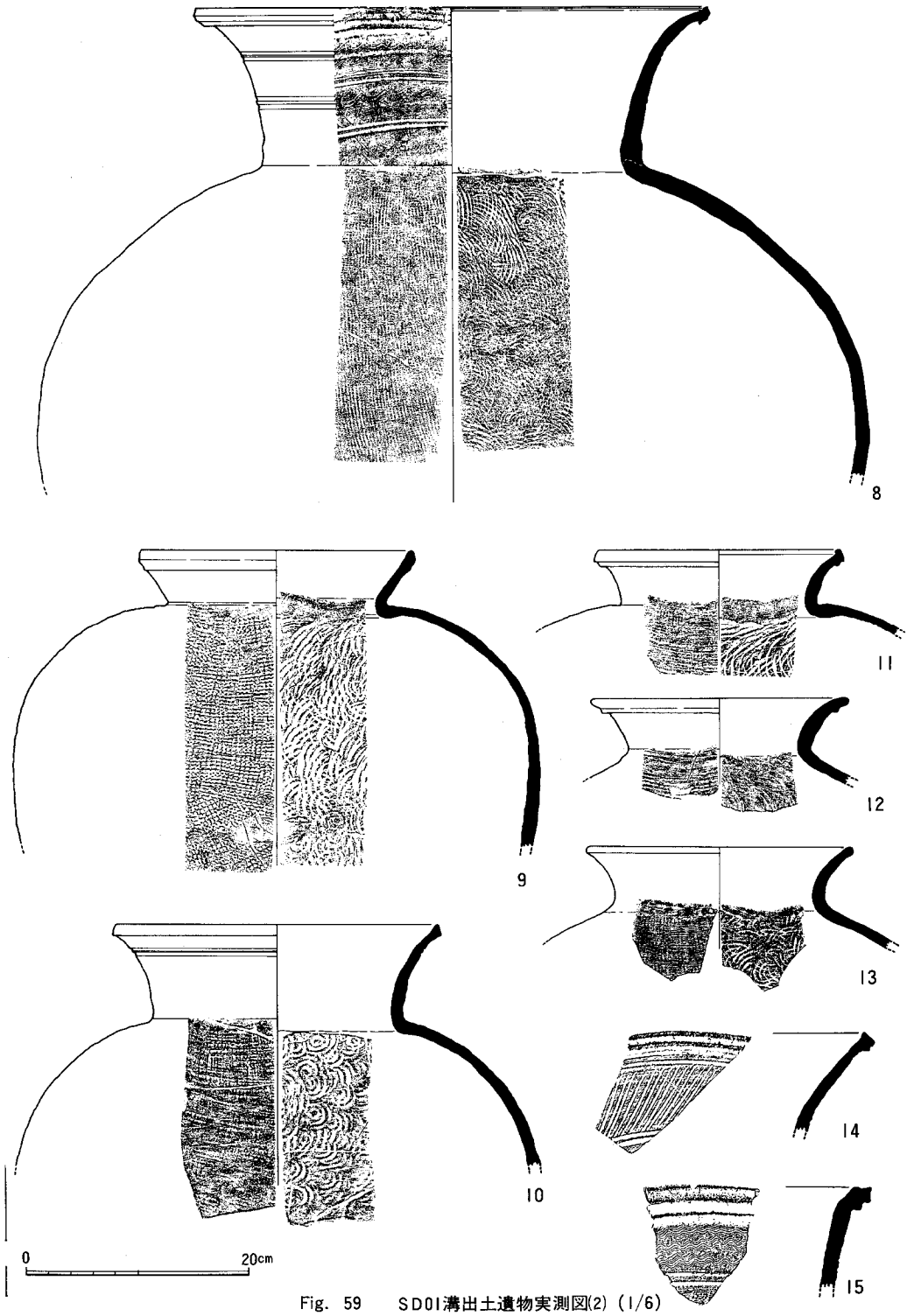


Fig. 59　SD01溝出土遺物実測図(2)（1/6）

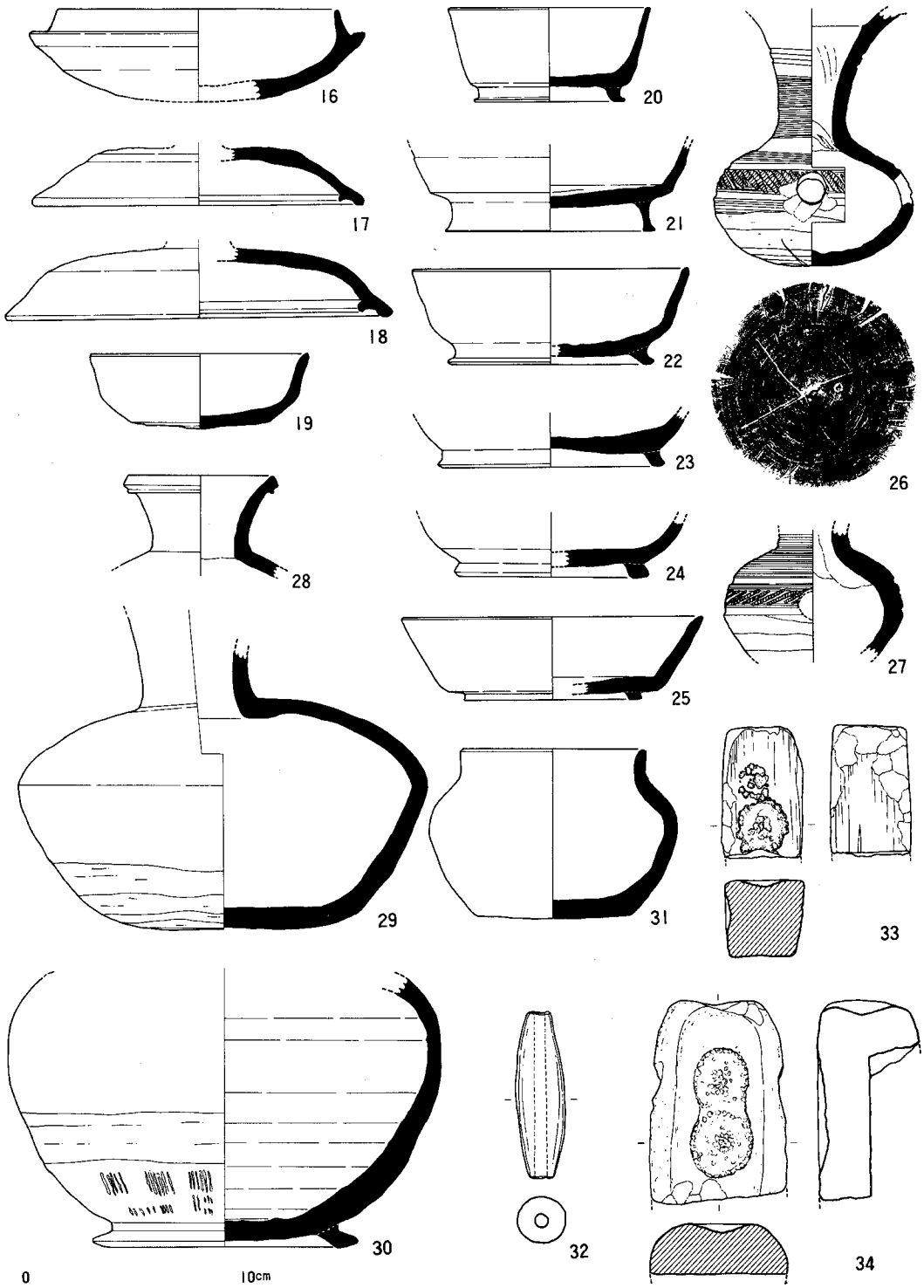


Fig. 60　SD 01溝出土遺物実測図(3) (1/3)

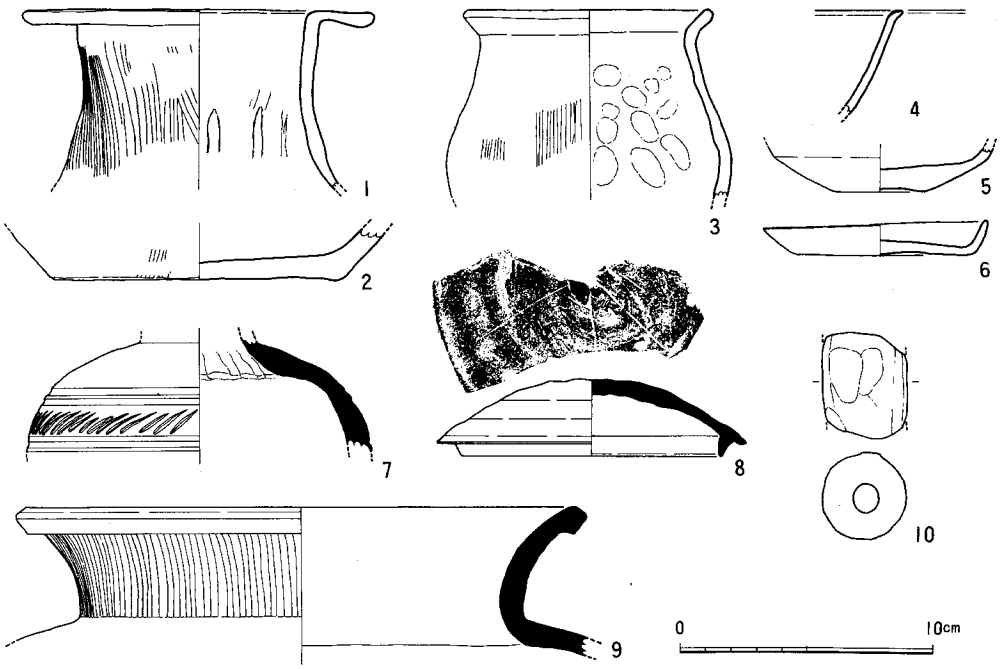


Fig. 61　SD 02・03・10溝出土遺物実測図（1/3）

磁北をとり、一直線に伸びる。溝からは７世紀後半を中心に８世紀初頭迄の遺物が多量に出土。

出土遺物（Fig.58～60・62・63－４）

土師器（１～７）　１・２はくの字形に外反する口縁を有する甕である。３は甑で把手が付く。共に外面刷毛目、内面ヘラ削りで、褐色を呈し胎土に砂粒を含む。４は埦で底はヘラ削り、５・６は手捏ねの鉢形土器で底面に籠目痕が付く。７は脚部にヘラ削りを加えた高坏である。全て砂粒を含み、褐色～淡褐色をなす。その他、鍔の付いたカマド片が多く出土している。

須恵器（８～31）　8～15は大甕である。外面は平行叩き、内面は青海波文がみられる。９は外面格子叩き、８・15は口縁部外面に波状文がつく。16～25は坏身及び蓋である。16はやや古い様相を呈する。17・18は径の大きな坏蓋で、天井部のつまみは脱落している。19は無高台、20～25は高台が付く坏身である。高台は高く外開きになる。25はこの中でも新しい様相である。26・27は𤮈、28は提瓶の口縁部である。29は平瓶、30は長頸壺か。胴部下半及び胴部にヘラ削りが施され、30には下半に平行タタキが残る。31は短頸壺である。焼成が悪く、風化している。

石器・土製品（32～34　Fig.63－４）　33・34は砂岩製の窪み石である。33は黄白色で砥石の転用品である。４は黄灰色砂岩製の石庖丁。これらは混入品であろう。32は管状土錘である。

瓦（Fig.62－１～６）　１・２は丸瓦で、板を合わせた桶状のものを作り製作されている。行基作りと考えられ、古い様相を呈す。３～６は平瓦である。桶巻作りで、平行叩きを中心とするものが多い。４は格子叩きである。５は隅瓦。１・３は須恵質で他は明褐色。胎土は精良。

SD02・SD10溝〔付図1〕

SD02は調査区中央部で検出。N—52°—Eをとり、幅2m40cm～2m70cm、深さ1.0m～1m20cmのV字に近い逆台形となる。SD10は西に向って深くなり幅2.0m、深さ30cm前後で、U字形の浅い溝となる。方向はN—59°—EでSD02に近い。ともに中世の遺物を出土している。

出土遺物（Fig.61—1～6・10　Fig.63—5・6）　Fig.61—1～6はSD02出土。1・3は弥生土器で混入品である。2は瓦質土器で捏鉢か。4は白磁碗の口縁部、5は青磁皿の底部である。6は糸切りの土師皿。10はSD10出土で管状土錘片である。他に滑石製石鍋片が出土している。Fig.63—5・6はSD02覆土に混入して出土した石庖丁である。6は小豆色を呈す。

SD03・SD05・SD07溝〔付図1〕

一連の溝である。幅2.0m前後、深さ30～40cmを測る。方向はN—7°—Eで、SD01に近い。

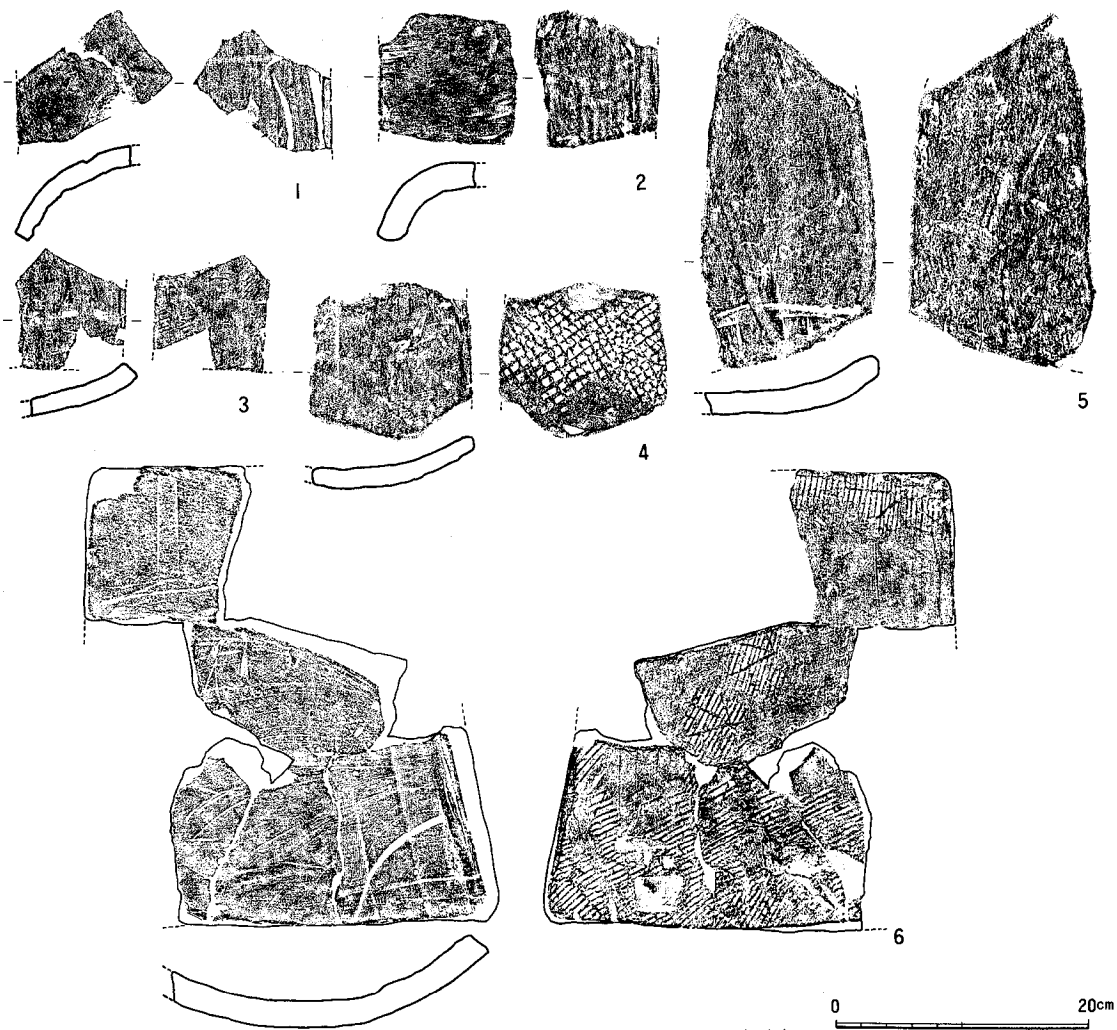


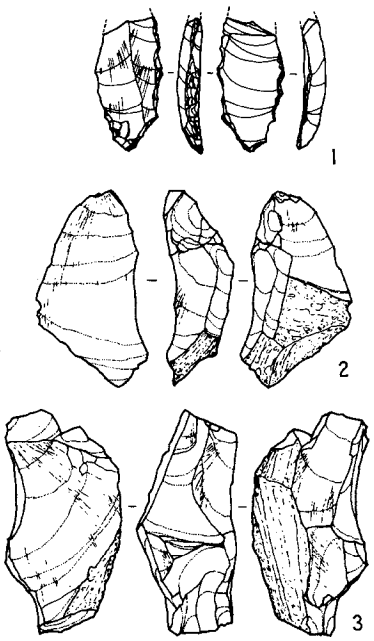
Fig. 62　SD01溝出土瓦実測図（1/6）

出土遺物（Fig.61－7～9）　図示したものは全て須恵器である。7は甕で、胴部に箆で短沈線を施す。8は坏蓋もしくは坏身である。ヘラ記号が認められる。9は甕で、頸部には粗い刷毛目状の調整を加え、後ナデている。SD03･05･07は、出土遺物及び方向から、7世紀代か。

SD04・06・08・09溝〔付図1〕

ともに浅い溝である。幅も一定せず、大溝に付随するものであろうか。SD08のSC18寄りから取瓶片、SD09のピットから土製模造鏡が出土している。SD09はSK08と一連の遺構の可能性がある。

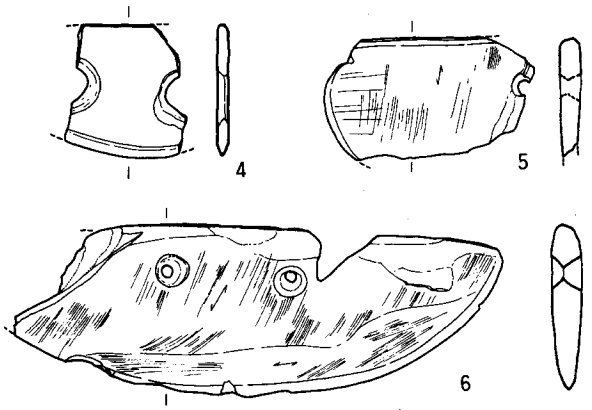
出土遺物（Fig.56－10　Fig.63－9）　10は褐色を呈する土製模造鏡である。砂粒を含み、中央の鈕の部分は指頭でつまみ上げている。9は取瓶片で、外面は赤褐色、2～3㎜の石英砂を含み、内面は熱変で黄灰色に溶結。



6　その他の重要遺物（Fig.63）

ナイフ形石器（1）　縦長剥片を使用し、基部にブランティング加工を行なう。先端部欠損、黒曜石製。SC01住居址の覆土から出土した。

剥片・石核（2・3）　共にサヌカイトで、2は縦長剥片、3は上下から剥片剥離を行なった残核である。2はSC04、3はSC03覆土中出土。



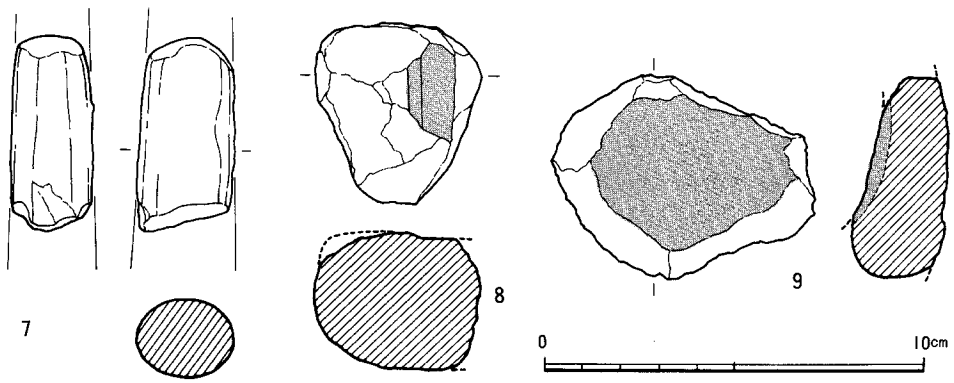


Fig. 63　その他の重要遺物（1/2）

Ⅳ まとめ

那珂・比恵の台地は弥生銀座と呼ばれるほど、弥生遺跡の豊庫として取り沙汰されることが多いが、那珂遺跡群の実体については不明な点が多かった。那珂遺跡群では、これまで8次に亘る発掘調査を行なっているが、墓地が中心であり、生活遺構の調査は極めて少ない。今回、弥生時代から古墳時代、さらには古代から中世にかけての遺構を調査し、那珂遺跡群を考える上での貴重な資料を提供した。以下、各時期毎に気づいた点を簡単に記し今後の参考にしたい。

先ず、ナイフ形石器を中心とする後期旧石器時代の遺物群の出土である。全て遊離した状態で出土しているが、本来は鳥栖ローム上部に含まれていたと考えられる。諸岡遺跡ではまとまって出土しており、幾つかの地点が存在するものと考えられる。今後、周辺の調査で石器群が出土する可能性があり、注意が必要である。

次に、今回最も多く検出した中心的な遺構は、弥生時代の竪穴住居址と掘立柱建物群である。竪穴住居址は全部で17軒で、明らかに3軒は円形もしくは楕円形を呈し、残りは長方形のプランを有する。弥生時代中期後半から中期末の時代に営まれ、後期に這入る住居址は見い出せない。掘立柱建物の内、1間×2間の掘り方の大きな柱穴を持つ建物は倉庫建築と推察され、竪穴住居址群と組み合さると考えられる。

出土遺物で特に注目されるのは、青銅器鋳造に関する遺物である。SC02から取瓶片、SC07から中子、SC18から鋳型参考品と、SC18を切るSD08から取瓶片がそれぞれ出土している。取瓶は全体の形状を推定し得ないが、赤褐色を呈し、石英砂粒を多量に含む。器壁は厚く、内面は高熱を受けて黄灰色に溶結している。中子は、長さ5.2cmで楕円形の断面形状から銅矛の中子と考えられる。銅矛の実測図、鋳型及び現物と照合したところ、中細銅矛の袋部根元近くに一致する。細形銅矛でも径は合致するが、細形銅矛は先端部に向う窄り方が急なので、全体は一致しない。中広銅矛は既に袋部の扁平性が進んでおり、長径及び窄り方は一致するが、中子の短径が大き過ぎて合致しない。中子の胎土は微砂を固めた様な感じできわめて精良である。部分的に熱を受けて一部黒ずんでいる。実際に使用された可能性がある。鋳型参考品は2点出土しており、SC18出土品は乳白色の砂岩製で砥石に転用されている。一側縁に砥石転用以前の調整痕がある。もう一点の鋳型参考品はSC18内からの出土ではあるが、SC18とSD08との切り合い部分から出土している。乳白色の肌理細かな砂岩製で、断面カマボコ形を呈し、上面に平坦面を有する。共に黒変はないが、周辺遺跡に出土している鋳型と同一の石材であり、他の関連遺物と合せて鋳型参考品と考えても差しつかえあるまい。ところで、青銅器鋳造関係遺物の所属年代は、SC02が弥生中期末、SC07が中期後半から末葉、SC18が中期後半であり、弥生時代中期後半から末葉にかけて那珂台地でも青銅器鋳造が行なわれていたことが明ら

かになった。時期的にはやや新しくなるが、南方150ｍで中広銅戈の鋳型が出土しているし、さらに南の妙楽寺からも広形銅矛の鋳型が出土している。周辺では、井尻、板付、月隈、高宮などで中広及び広形の銅矛や銅戈、銅鐸などの鋳型が出土している。須玖岡本遺跡を中心とする春日丘陵一帯は青銅器鋳造の中心地になっているが、那珂台地を中心とする一帯にも青銅器鋳造の中心地が存在したのではなかろうか。今後の調査が期待されるところである。

古墳時代の住居址は４軒出土している。１軒が古墳時代初頭、他の３軒は６世紀後半から７世紀にかけての住居址である。古墳時代初頭の住居址はＳＣ04で、１軒のみしか分布していない。同時期の住居址は、恐らく周辺の未調査区へ広がっているものと推察される。ところで、このＳＣ04からいわゆる山陰系甑形土器と呼ばれるものが、ほぼ完形で出土している。出土状態は、東壁近くの略方形土壙内に横倒しの状態であった。周りには壺形土器と高坏だけが分布する。甕類は中央部から北半部にかけて分布する。甑形土器は器高33.1cmで上半に横位置の環状把手を２個装着する。いわゆる山陰系甑形土器は、山陰のみならず広島や愛媛などでも出土している。九州で他の外来系土器と一緒に出土したことは極めて珍らしく、今後古墳時代初頭の様相を考える上で、山陰、畿内、瀬戸内との関係を抜きにしては語れなくなるだろう。南方150ｍに、福岡平野では最も古い時期の、前方部が撥形に開く前方後円墳（那珂八幡古墳）が所在することも、あながち無関係ではあるまい。

７世紀後半から奈良時代にかけては、溝と大井戸がある。溝はＳＤ01で、磁北をとる。７世紀後半代を中心とする須恵器、土師器と共に瓦が出土している。平行タタキを中心に平瓦は粘土板桶巻作りで製作され、丸瓦も模骨を使用している。精良な胎土を持ち、大部分は明褐色を呈し、赤焼き須恵器状となる。須恵質の瓦は丸瓦、平瓦共に認められる。瓦当は軒丸の小破片らしきものは認められるが、軒平は出土していない。全体的に古い様相を呈している。比恵遺跡で２間×９間の大形掘立柱建物に回廊を付設する遺構も磁北をとり、７世紀後半代で興味深い。

奈良時代の瓦はＳＥ01から出土している。ＳＤ01の瓦とは、胎土、焼成、叩き抜法などが異なる。この井戸址からは土師器坏見込みに「㊨」とヘラ描きされたものが出土している。しかし、これらの時期に相当する遺構は調査区内では他に検出できなかった。

中世の時期の大溝（ＳＤ02）も注意が必要である。調査地点は字「堀ノ内」と云い、中世の居館址との関係も考慮する必要がある。現在も台地周縁を取りまくように用水路が巡る。

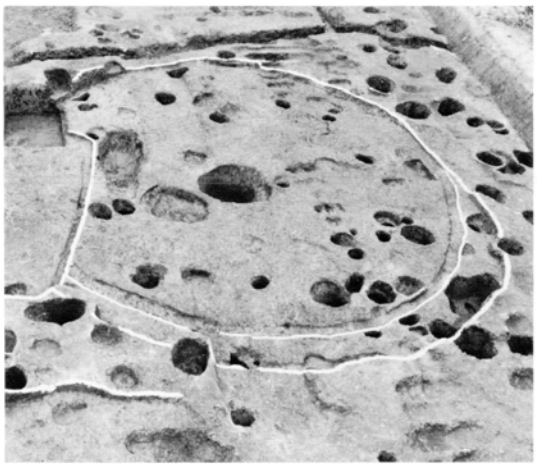
以上、第８次調査で気付いた点について概略記したが、今後の調査に期待する所大である。

最後になりましたが青銅器鋳造関係の遺物については、春日市教育委員会の丸山康晴、平田定幸氏にご教示を賜わり、関係遺物を実見させて頂いた。山陰系甑形土器の分析は、1987年３月27日福岡市埋文センターで奥田尚氏にお願いした。「在地のものではなく、出雲の可能性がある」と結果を頂いた。同様の内容を狐塚省蔵氏からも連絡頂いた。瓦に関しては、本市埋蔵文化財課瀧本正志氏にご教示賜わった。記して感謝申し上げます。

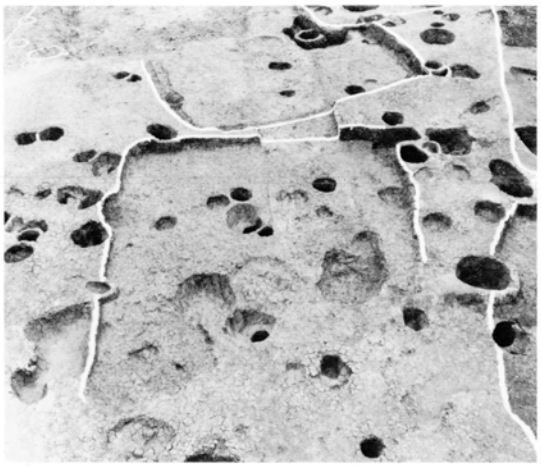
PLATES

調査区南半部全景（上方の森は那珂八幡古墳）

PL. 2

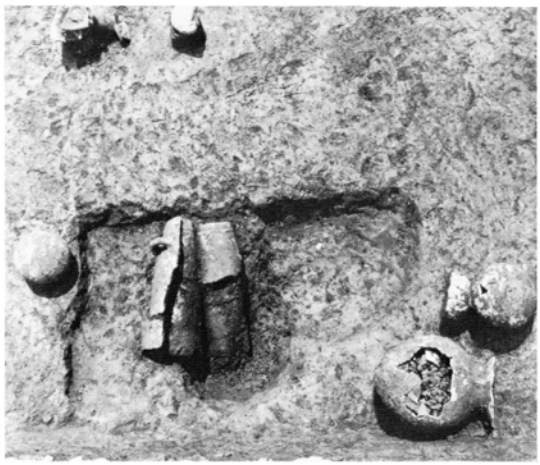


(1) SC01住居址出土状況(西から)

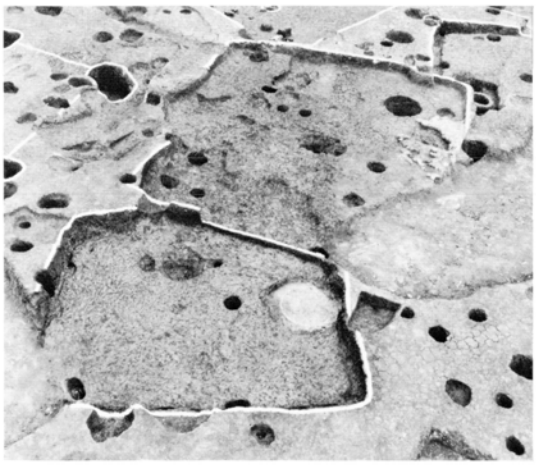


(2) SC02・03住居址出土状況(南から)

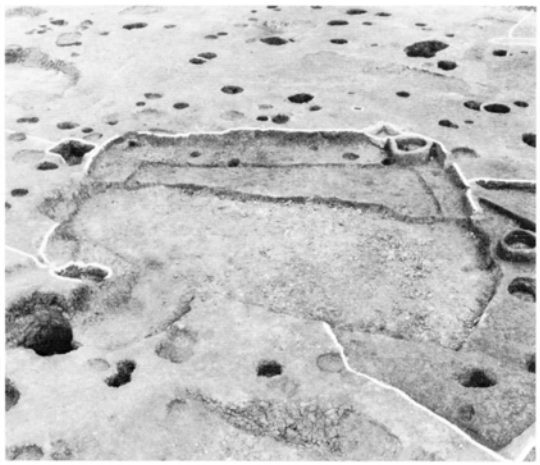
(3) SC04住居址出土状況(南から)



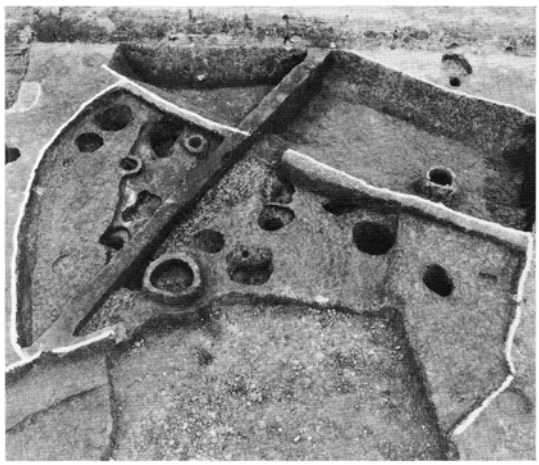
(4) SC04住居址遺物出土状況(東から)



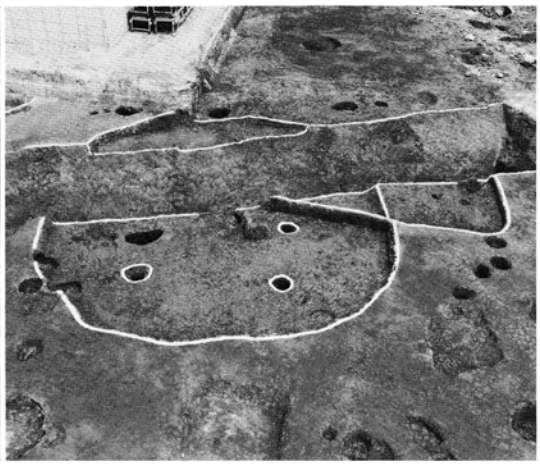
(5) SC05・09住居址出土状況(北から)



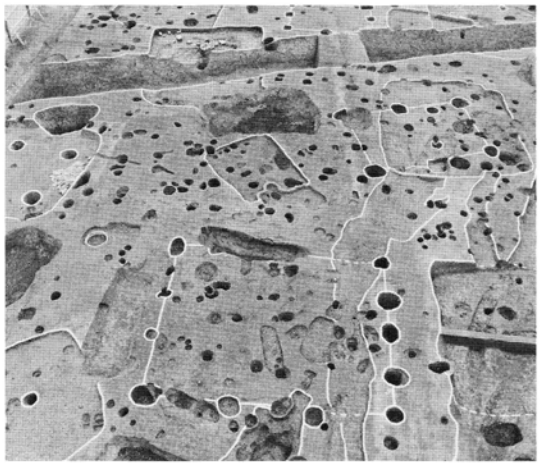
(6) SC06住居址出土状況(南から)



(1) SC07住居址出土状況(西から)



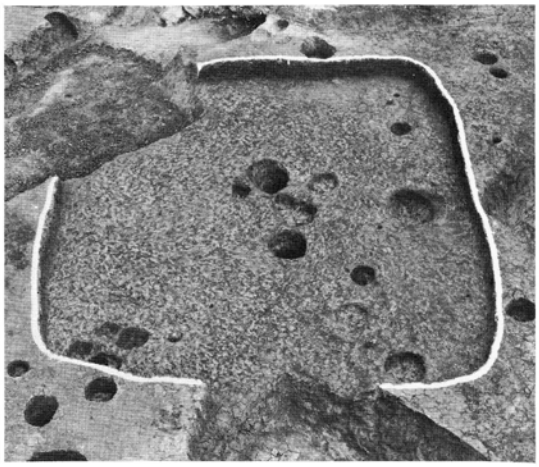
(2) SC08・12住居址出土状況(南から)



(3) 調査区北半部全景(北から)

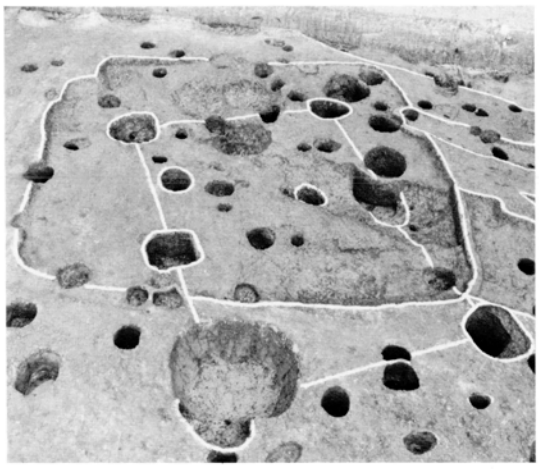
(4) SC13・14住居址出土状況(南から)

(5) SC15住居址・SE03井戸址出土状況(西から)

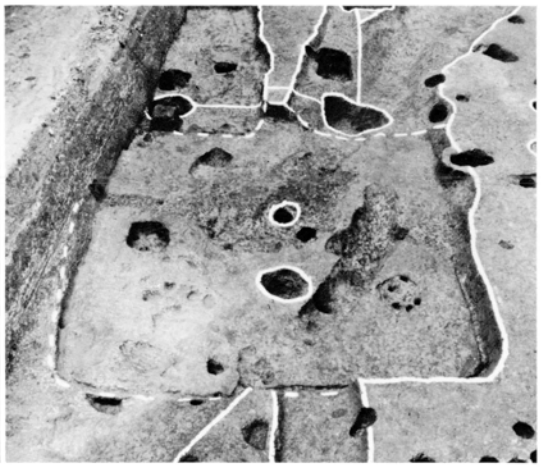


(6) SC16住居址出土状況(西から)

PL. 4

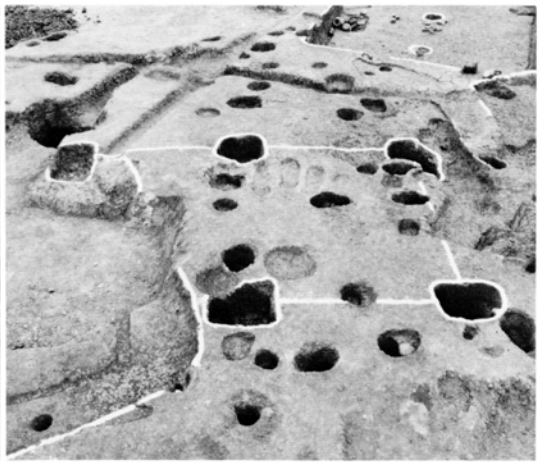


(1) SC18住居址・SB04掘立柱建物出土状況(東から)



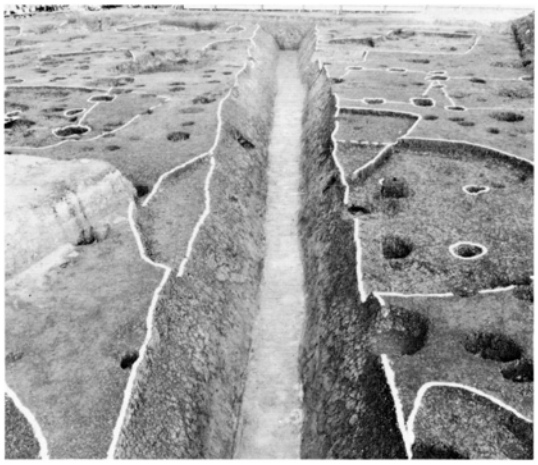
(2) SC19住居址出土状況(南から)

(3) SE01井戸址出土状況(東から)



(4) SB01掘立柱建物出土状況(北から)

(5) SB05掘立柱建物出土状況(南から)



(6) SD01溝出土状況(西から)

那珂遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第153集

昭和62(1987)年3月31日

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大名二丁目10—29
(092)711—4667

印刷　正光印刷株式会社
福岡市西区徳永877—1
(092)806—5708